

放屁論自序

屁へてふ物のある故に、へへの字も何とやらをかしけれど、天てんに霹靂へきれきあり、神かみに幣帛へいはくあり、鷹たかに經緒へを有り、船ふねに艦へさきあり、草くさに女青へくそかうらあり、蟲むしに氣へつひりむし攀あり、狐きつね鼯た鼠ねの最後さいご屁へは、一生いっしょう懸命けんめいの敵かたきを防ふせぐ。人と
して放はならすんば、獸けものにたも如ごとかざるべけんや。放はなつたり喫かいだり屁へたる君子くんしありといへば、強あながちこれ
を賤いやしむべからず。今いま評判へつひりの撒氣漢そとこ、論ろんより證據しやうこ兩國橋にこ。

風 來 山 人 誌

放屁論

人參呑んで縊る癡漢あれば、河豚汁喰うて長壽する男もあり。一度で父なし子孕む下女あれば、毎晩夜鷹買うて鼻の無事なる奴あり。大そうなれど嗚呼天賦命歟。又物の流行ると流行らざるも、時の仕合不仕合歟、又は趣向の善悪によるならんか。栢筵が氣どり、慶子が所作事、仲藏が功者、金作が愛敬、廣治が調子、三五郎がしこなし、梅幸浪花をひしけば、富三東都に名を顯はし、川口の參詣淺草の羣集、深川の角力、吉原の俄、沙洲は木挽町に河東節の根本を弘むれば、住太夫は葺屋町に義太夫節の骨髓を語る。或は機關、子供狂言、身ぶり聲色辻談義、今にはじめぬお江戸の繁榮、其の品數へ盡しがたき中に、さいつ頃より、兩國橋の邊に放屁男出でたりとて、評議とりん町々の風説なり。それつらく、惟みれば、人は小天地なれば、天地に雷あり人に屁あり、陰陽相激するのこゑにして、時に發し時に撒るこそ持ちまへなれ。いかなれば彼の男、昔よりいひ傳へし階子察數珠續はいふもさらなり、礮すががき三番叟、三ッ地七艸祇園囃、犬の吠き聲、鷄、鴛、花火の響きは兩國を欺き、水車の音は淀川に擬す。道成寺、菊慈童、はうた、めりやす、伊勢音頭、一中半中豊後節、土佐文彌

半太夫、外記河東大薩摩、義太夫節の長きことも、忠臣藏矢口の渡は望み次第、一段づ、三絃淨瑠璃に合はせ、比類なき名人出でたりと、聞くよりも見ぬことは嘶にならず、いざ行きて見ばやとて、二三輩打連れて横山町より兩國橋の廣小路、橋を渡らずして右へ行けば、昔語花咲男と、ことごとくしき幟を立て、僧侶男女押し合ひへし合ふ中より、先づ看板を見れば、あやしの男尻おつたてたる後に、薄墨に限取りて、彼の道成寺三番叟など、數多の品を一所に寄せて畫きたるさま、夢を畫く筆意に似たれば、此の沙汰知らぬ田舎者の、若し來か、りて見るならば、尻から夢を見るとや疑はんと、つぶやきながら木戸をはひれば、上に紅白の水引ひきわたし、彼の放屁漢は噓方とともに小高き所に坐す。その爲人中肉にして色白く、三月月形の發鬢奴、縹の單に緋縮緬の襦袢、口上爽かにして憎氣なく、噓に合はせ先づ最初が目出度三番叟尻、トツバヒヨロ／＼ピツ／＼／＼と拍子よく、次が鶏東天紅をブ、ブウーブウと撒り分け、其の跡が水車、ブウ／＼／＼と放りながら、己が體を車返り、さながら車の水勢に迫り、汲んではうつす風情あり。サア入り替り／＼と、打出しの太鼓と共に立ち出で、朋友の許にたち寄り、放屁男を見たりといへば、一座擧つてこれを論ず。或は藥を用るて放るといひ、または仕掛の有るならんと、衆議さらに一決せず。予衆人に告げていはく、諸子いふことなけれ。放屁藥あることは我嘗てこれを知る。大坂千種屋清右衛門といへる者、をかしき藥を賣るが好き

にて、喧嘩下し屁ひり藥等の看板を出す。其の藥方も聞き得たれど、それは只屁の出づるのみにて、斯様の曲竈を放る事を聞かず。又仕掛ならんと疑ひ尤もに似たれども、竹田の舞臺に事替り、四方正面のやりばなし、しかも不埒の取りしまり、何れに仕掛の有りとも見えぬ。數萬の人の目に暴し、仕掛の見えぬ程なれば、たとへ仕掛有りととも、眞にひると同然なり。衆人眞に放るといはば、其の糟を食らひ其の泥を濁らして放ると思つて見るが可し。扱つく／＼と案ずれば、かく世智辛き世の中に、人の錢をせしめんと、千變萬化に思案して、新しいことを工めども、十が十餅の形、昨日新しきも今日は古く、固より古きは猶古し。此の放屁男許りは嘶には有りと雖も、視見る事は、我が日本神武天皇元年より此の年安永三年に至りて、二千四百三十六年の星霜を経るといへども、舊記にも見えずいひ傳へにもなし。我が日本のみならず、唐土朝鮮を始め、天竺阿蘭陀諸の國々にもあるまじ。於戲思ひ付きたり能く放つたりと、響むれば一座皆感心す。遙か末座より聲を掛け、先生の論甚だ非なり。余申すべきこと有りと出づるを見れば、頃日田舎より來りたる石部金吉郎といへる侍なり。以ての外の顔色にて、扱々苦々しきことを承るものかな。それ芝居見せものの類、公より御免あるは、人を和するの術にして、君臣父子夫婦兄弟朋友の道をあかし、譬へば大星由良介が仕打は忠臣の鑑と成り、梅が枝が無間の鐘は女の操をす、むるなり。見せものの異様なるも、親の罪が子に

報ひ、狩人の子は蹄と成り、惡の報ひは針の先、必ず人々油斷すなどの教へなるに、近年はたゞ錢ま
うけのみに掛り、斯様の所へ心を用るず、剩へ屁ひり男の見セ物、言語道斷のことなり。夫れ屁は
人中にて撒るものにあらず。放るまじき座敷にて、若し誤つてとりはづせば、武士は腹を切る程恥と
す。傳へ聞く、品川にて何とかいへる女、客の前にてとりはづせしが、其の座に小田原町の李堂、堺
町の巳など居合はせて笑ひけるに、彼の女忍び兼ね、一閒へ入りて自害せんとするを、傍輩の女が
見付け、様々に諫むれども、一座がかの通り者なれば、惡口にいひふらされ、世上の沙汰に成るなれ
ば、どうも生きては居られぬとのせりふ、彼の二人も詞を盡し、此のこと決していふまじとひたすら
になだむれども、イヤ／＼今こそ左様にうけがひ給へ、跡にていひ給はんは必定、生きて恥をさらさ
んよりは、死なせてたび給へとかきくどき、とゞまる氣色あらざれば、二人もすべき方なくて、此の
事口外せまじき由證文を書いて、漸う自害をとゞめしとかや。可咲しきことの様なれど、女が自害と
覺悟せしは、情を商ふ身の上にて、恥を知りて命を捨てんといひ、又いき過ぎの通り者も惻隱の心あ
りて、おほづけなくも證文書いて人の命を助けしは、又艶しき事ならずや。かく人の恥とする事を、
大道端に看板を掛け、衆人の目にさらす事、無算千萬此の上なし。見せるものは錢まうけ、見るが鈍
漢なりと思ふに、先生雷同し給ふこと、見限り果てたることなり。盜泉の水勝母の地、皆其の名をさ

へ惡むなり。非禮聞く事なけれ非禮見ることなけれとは聖人の教へなりと、青筋ばつてのいひぶん。
予答へて曰く、子が辭甚だ是なり。さりながらいまだ道の大なることを知らず。孔子は童謠をも捨て
ず、我亦屁ひりを取ること論あり。夫れ天地の間に有るもの、皆自ら貴賤上下の品あり。其の中に
至り極まりて下品とするもの、大小便に止まる。賤しき譬喩を漢にては糞土といひ、日本にては尿の
如しと。其の糞小便のきたなきも、皆五穀の肥となりて萬民を養ふ。只屁のみ、撒つた者暫時の腹中
快き許りにて、無益無能の長物なり。上天の事は音もなく香もなしといふに引替へ、音あれども太
鼓鼓の如く聞くべきものにあらず、匂ひあれども伽羅麝香の如く用るべき能なし。却つて人を臭が
らせ、菲蒜握り屁と口の端にかゝり、空より出でて空に消え、肥にさへならざれば微塵用に立つ事
なし。志道軒が腐儒をさして屁つぴり儒者といひ初めしも、尤も千萬の詞なり。斯くばかり天地の間
に無用のものと成り果てて、何の用にも立たざるものを、こやつめが思ひ付きにて、種々に案じさま
ざまに撒りわけ、評判の大入り、小芝居などは續くべき勢ひならず。富三一人が大當りは菊之丞が
餘光も有り、屁には固より餘光もなく惚人もなく最良もなし。實に生正味むき出しの眞劍勝負、二寸
に足らぬ屁眼にて、諸の小芝居を一まくりに撒り潰すこと、皆屁威光とは此のことにて、地口でい
へば屁柄者なり。されば諸の音曲者、いふべき筈の口、語るべき筈の咽を以て、師匠に隨ひ口傳を

請け、高給金はほしがれども、聲のよしあしは生まれ付、月夜鳥や五位鷺のがあくと鳴くが如く、古き節の口真似はすれども、微塵も文句に意なく、序破急開合節はかせの鹽梅を知らざれば、新淨瑠璃の文句を殺し、面々家業の衰微に及ぶ。然るに此の屁ひり男は、自身の工夫許りにて、師匠なれば口傳もなし。物いはぬ尻分るまじき屁にて、開合呼吸の拍子を覚え、五音十二律自ら備はり、其の品々を撒り分ける事、下手淨瑠璃の口よりも、尻の氣取が拔羣よし、奇とやいはん妙とやいはん。誠に屁道開基の祖師なり。但し音曲のみに限らず、近年の下手糞共、學者は唐の反古に縛られ、詩文章を好む人は、韓柳盛唐の飽屑を拾ひ集めて柱と心得、歌人は居ながら飯粒が足の裏にひばり付き、醫者は古法家後世家と、陰辨慶の議論はすれども、治する病も療し得ず、流行風の皆殺し。誹諧の宗匠顔は芭蕉其角が涎を舐り、茶人の人柄風流めくも、利休宗旦が糞を嘗める。其の餘諸藝皆衰へ、己が工夫才覺なければ、古人のしふるしたることさへも、古人の足本へとゞかざるは、心を用るざるが故なり。しかるに此の放屁漢、今まで用るぬ臀を以て、古人も撒らぬ曲屁をひり出し、一天下に名を顯はす。陳平が曰く、我をして、天下に宰たらしめば又此の肉の如けん。我も亦謂へらく、若し賢き人ありて此の屁の如く工夫をこらし、天下の人を救ひ給はば、其の功大いならん。心を用るて修行すれば、屁さへも猶かくの如し。嗚呼濟世に志す人、或は諸藝を學ぶ人、一心に務むれば、天下に

鳴らんこと屁よりも亦甚し。我は彼の屁の音を貸りて、自暴自棄未熟不出精の人々の睡りを寤さん爲なりといふも又理窟臭し。子が論屁の如しといはばいへ、我も亦屁ともおもはず。

跋

漢にては放屁といひ、上方にては屁をこくといひ、關東にてはひるといひ、女中は都ておならといふ。其の語は異なれども、鳴ると臭きは同じことなり。その音に三等あり、ブツと鳴るもの上品にして其の形圓く、ブウと鳴るもの中品にして其の形飯櫃形なり。スーとすかすもの下品にて細長くして少しひらたし。これ等は皆素人も常に撒る所なり。彼の放屁男の如く、奇々妙々に至りては、放らざる音なく備はらざる形なし。抑、いかなる故ぞと聞けば、彼が母常に芋を好みけるが、或夜の夢に火吹竹を呑むと見て懐胎し、鳳屁元年へのえ馳鼠の歳、今を春邊と梅勻ふ頃誕生せしが、成人に隨ひて段々功を屁ひり男、今江戸中の大評判、屁は身を助けるとはこれならんか。讃岐の行脚無一坊、神田の寓居に筆を採る。

放屁論後編自序

倭學先生曰く、夜はおよるの上畧にて、晝とは諸人目を寤せば小便をたれ屁を撒る故、夜晝の倭訓起れり。或は鯨淺き所に寢入りたる内、潮引きて洲となる時は、大いに困りて無術竄を撒る、故に潮の引くをも干るといふ。此の道を好ませ給ふ御神を、蛭子といひえびすといふ。えびすはへびすの間違ひにて、あいうえおはひふへの通韻より誤り來れり。又日本武尊東夷征伐の時、夷ども、草に火をかけ、大勢一度に尻を巻りて撒りければ、焔尊の方へ吹き靡き、御身に火掛らんとする時、御劍をぬいて投げ付け給へば、夷の臀をした、かに切られ八方へ逃げし故、逃ぐることをへきえきといひ始め、へきえきとは屁消益なり。屁消えて尊の爲に益あるをいふなり。十束の御劍を改めて臭雜の寶劍と號けたまふ。臭き物を雜ぎちらせしといふ詞なり。太政入道清盛は火の病を煩ひ、初めは居風呂桶に水を入れて體を浸せば、即時に湯となる故、後は大なる池を掘り、賀茂川の水を堰き入れ這入られけるに、水火激して頻りに屁を撒りしにより、屁池の大將と異名せられ、記せし記録を屁池物語といふ。後世平家と書くは當字なり。また兵衛佐頼朝卿伊豆の國へ左遷の内、貧乏にて常に芋飯を喰ひ、好んで放屁なされける故、其の所をひるが小島と號けたり。野にて放るを野邊といひ、山に

て撒るを山邊といふ。古今集の歌に、

霞立つ春の山屁は遠けれどふく春風は花の香ぞする

海邊といひ磯邊といひ、澤邊の螢は尻に縁あり。奥州に一の戸二の戸、古戸の字をへと訓せしも、家あれば人あり、人あれば撒る故なりと、倭訓の講釋聞取法問、出まかせに放り出して、此の書の序とはなりけらしブツツ。

風來山人誌

放屁論後編

世の諺に、剪選するも浪人の習ひと、御所櫻の伊勢の三郎、風俗太平記の日本左衛門など、淨瑠璃本にある時は、さて手強う侍らしく聞ゆれども、それは血臭い時節のことにて、かく治まれる時世に、そんなけびらひが有るや否や、とんだ目にあふ故に、今時の浪人は紙子羽織に破編笠、御子孫も御繁昌、猶いつまでか活き延びるほど恥の上ぬり。但し浪人のみにあらず。春さきの華臍魚と目出たき御代の侍は、段々に直が下り、工農商の三民に養はれる素餐の様におもはれ、まさかの時は侍でなければ世は治まらず、日本は小國でも、唐高麗から指もささせぬは皆武徳なりといふことを、思ひ出す者もなきは、これぞ誠に太平の世の御恩澤、井を鑿りて飲み耕して食らふ、提灯かりた禮はいへども、月日に禮はいはざるに等し。段々太平の化にあまえ、世上一統金銀にのみ目が付く故、先祖はお馬の先に進み、義は金鐵よりも堅く、命は塵芥よりも軽しと、踏み止まつて高名を顯はしたる家柄の子孫でも、又君を諫め萬民を教へ、國家の礎を堅うせんと心を碎く忠臣でも、算盤の桁には合はず、見一無頭早急の金にならねば、二一天作言語道斷、六沉が二進、雪隠が決ちん、穴のせまい仕

送り用人に乗り越され、さてはお家に由緒ある數代出入の町人でも、不如意になれば安くあしらひ、昨日今日まで手代奉公、年季野郎の成上りでも、金さへ持てば追從輕薄、御堅勝御安全、様の字までをひねくり廻して六ヶしく認めるは、地獄の沙汰も金次第、金が敵の世の中。されば歌にも、

鉦敲き金がないゆゑ鉦たゝく金があるなら鉦はたゝかじ

又それに付けても金のほしさよといへる下の句は、いづれの歌にも連屬すると卑劣千萬に覚え、富十郎が鐘入も金の供養といふ故に、若し才覺の計策にもと、味な所へ目のつく世の中。此の聞さる方にて段々と不如意に付き、一家中鐘の稽古を止めにして、鈴の稽古が初まりしとの噂、よく聞けば、鐘といふ字は金篇に遣ふといふ字、鈴は金篇に令めるといふ字なれば、遣ふ事を止めにして只々金を令めよと、あて字ながらも主命は黙止し難し。いかなる名人達人でも、金なき衆生は度しがたしと、佛もあちらむくと見えたり。いつの比にか有りけん、江戸神田の邊に、貧家錢内といへる見る影もなき瘦浪人あり。抑彼が系圖といッば、忝くも天兒屋根命の苗裔、大織冠鎌足公の御子藤原淡海公、讃州志度の浦にて海士人と野合ひ、かの面向不背の玉を探り得給ふ時、一日を六十四文で人足に傭はれ、浦人喜び引き上げたりけりと諺にも作られ、戲場でも、名もなきはいくく伎者のする浦人の嫡流なり。母夢に澀團扇を呑むと見て懐胎し、此の者を産みしより、貧乏神を氏神と仰ぎ、七

福神と喧嘩して、故郷を去つて江戸の住居。されば諸藝貳百石。無藝高なしとやらいへども、此の男何一ツ覺えたる藝もなく、又無藝にもあらざれば、どちら足らずのちくらが洋、磯にもよらず浪にもつかず、流れ渡りの瓢箪で、鯪の樺燒鰻鱈魚を欺き、見識は吉原の天水桶よりも高く、智慧は品川の雪隠よりも深しと、こけおどしの駄味噺を、千人に一人は實かと聞き込んで、教化的の報謝米で召抱へうと相談すれば、イヤ、女は美惡となく宮に入つて妬まれ、士は賢不肖となく朝に入つて惡まる。比喩を鳥で申さうなら、孔雀錦鷄鸚哥の類、高金出して弄べども、外飾のよいばかりで、鳥も捕らず晨も司らず、葱、線牛蒡の相手にもならず、又鳥の男ぶりは惡しけれども、朝は早く起きて人をおこし、吉凶を能く知りて豫め告げ知らせば、忝いといふべきを、鳥啼きが悪いの、いまくしい鳥めのと惡まる、を見るにつけ、良藥は口に苦く、出る杖は打たる、習ひ。されども御無理御尤も、君君たらず、臣臣たらず、八幡大名太郎冠者、脱活の虎見る様に、己が性根は微塵もなく、風次第で首を振つて一生を過さんは、折角親の産み付けた辜丸を無にする道理。浪人の心易さは、一簞のぶツかけ一瓢の小半酒、恆の産なきかはりには、主人といふ贅もなく、知行といふ飯粒が足の裏にひつ付かず、行きたき所を驅けめぐり、否な所は茶にして仕舞ふ。せめては一生我が體を自由にするがまうけなり。斯く隙なるを幸ひに、種々の工夫をめぐらして、何卒日本の金銀を唐阿蘭陀へひつたくられぬ

一ツの助けにもならんかと、思ふもいらざる佐平次にて、せめては寸志の國恩を報ずるといふもしや
 らくさし。其の位にあらざれば其の政を謀らず、身の程知らぬ大呆と、己も知つては居るさうなれ
 ど、蓼食ふ蟲も好きくと生まれ付きたる不物好き、わる塊にかたまつて、縁の下の方持ち、むだ
 骨だらけの其の中に、えれきてるせえりていとといへる、人の體より火を出し病を治する器を作り出
 せり。抑此の器は西洋の人電の理を以て考へ、一旦工夫は付けけれども、其の身の生涯には事成
 らず、三代を経て成就しけるといへり。阿蘭陀人といへども知る者は至つて少なく、固より朝鮮唐天
 竺の人は夢にも知らず。況んや日本開闢以來創めて出来たる事なれば、高貴の方々を初めとして、見
 ん事を願ふ者夥し。或日さる屋敷の儒官石倉新五左衛門といへる人來りて、觀ること良久しうして
 曰く、天地人の三才に通達するを儒といふ。我天下の書に眼をさらし、理を以て推す時は、森羅萬象
 明らかならざる事有るべからずと思ひしが、今これを見て始めて驚く。それ燧と石、扁柏と扁柏相激
 するか、又は日輪の水精硝子を照らし、或は鏡に映する時は火を生じ、時に臨んでは目からも出で騰
 からも出で、扱又貧なる家内へは、火の降る事も有りとは聞けども、かかることは思ひもよらず。い
 かなる理にて火出づるや、後學の爲承らんと。其の時主人打點頭き、書を読む許りを學問と思ひ、紙
 上の空論を以て格物窮理と思ふより間違ひも出で來るなり。さらば火の出る根元をお目にかげんと、

取り出す小冊に、昔語花咲男放屁論と題號せり。主人笑つて申しけるは、抑此の放屁といつば、
 四年以前兩國橋の邊にて花咲男と號け、見せものにて近年の大當り、諸の小戲場を撒り潰せし趣
 は、此の放屁論に詳らかなり。今年又采女が原に出で、三國福平と名乗る。扱此の者の身の上を尋ぬ
 るに、父は大和の國吉野の郷の狩人佐次兵衛といへる者なりしが、年來多くの猪猿を殺せし罪亡ほし
 とや思ひけん、近所の者兩人といひ合はせ、四國順禮に出でけるに、彼の殺生の報ひにや、伊豫の國
 に到りて、佐次兵衛生きながら猿と成つて、林の中へ逃げ入りければ、二人の連れは憫れ果て、是非
 なく國に歸りけり。今童謠に、一つ長屋の佐次兵衛殿、四國をめぐりて猿となるんの、二人の連衆は
 歸れども、お猿の身なれば置いて來たんとは此の事因縁なり。さて兩人は國に歸り、倅福平に此の
 譯を語れば、一方ならぬ歎きなれども、なすべきやうもあらざれば、せめては父が現世未來畜生道の
 苦患を免る、ためにとて、一切經を供養せんとおもひ立ち、鳥が啼く東路を、錢がなくくたどり著
 き、本錢の入らぬ金まうけを工夫して、いつとなく屁を比類なき、親孝行の奇特にや、兩國橋の屁撒
 りと江戸中の大評判。夫れよりも浪花津に咲くや此の花咲男、今を春屁と咲くや此の、花の都に勻ひ
 渡り、再び江戸へ歸り咲き、三國福平と名乗りて、采女が原の春霞、立つ子這ふ子も知らぬ者なし。
 扱佐次兵衛と連れになり、四國を廻りし兩人も、目前かかる不思議を見、且は福平が志を感じ、佐次

兵衛が追善供養、共に力を合はさんため、空也上人の鉢扣き、茶筌賣より思ひ付き、歌念佛を趣向して、六字を館にねりませ、うまいだ、うまい陀佛うまいだより様々の替へ唱歌。扱當世の立者は、仲藏幸四郎三五郎、また半道のきき者は、時に大谷友右衛門、最辰市川團十郎は、木場についての親父分、其の癖年は若いだ。若い陀佛若い陀と賣り歩き、大評判に預りしも、みな福平が孝行のなすところ、古今にまれなる屁柄者と語りければ、新五右衛門一圓に呑み込まず、不思議の事を承るものかな、いかにも彼の撒竄漢、先年兩國にては流行りしかど、此の度采女が原へ出でたれども、其の後は聲もなく臭もなく、今は世間に沙汰もなし。當時諸方にて評判の品々は、飛んだ靈寶珍らしき物、十月の胎内千里の車、鹿に兩頭あれば猿に曲馬あり、穢銀杏が辯説には、蘇秦張儀も跣足で逃げ、友世綱世が力には、巴、坂額干鯨持つて禮に来る。源水が獨樂は魂ありて動くが如く、鶴市が聲色はその人そこに在るが如し。新之助は一身に骨なく、どう突請身は五臟金鐵にや有らん。大魚出づれば大蛇骨出で、硝子細工牽絲傀儡、古きを以て新しく、田舎道者の目を悦ばしめ、鳥娘は名にてくろめ、人魚は人をちやかすなり。子供角瓶の取組は、河津股野が佛をうつし、鶺鴒相撲の勝負には、魯の季桓子拳を握る。馬の立合狗の藝、仕込に馴れ教へに順ふ。これを思へば人並に人別帳には付きながら、畜生に劣りたる無藝の者は、心にて己が恥を思ふべし。あるが中にも險竿の大當り、小櫻松江が笑顔

には、弘法大師筆を捨て、韓退之涎を流す。無三飛新藏が體は、龍骨車のめぐるがごとく、早飛梅之丞が一本綱は、五體を天へ釣るかとうたがふ。これ等をして珍らしともいふべけれ。何ぞや古き屁撒りを、ことごとくしき長物語、拙者屁の講釋を聞きには参らず。彼のえれきてるより火の出づる道理を聞かんとこそ望みしに、以ての外の屁あしらひ。さては我らを屁の如く思ひたまふやと、眞黒になつて立腹す。其の時錢内詞を和け、えれきてるより火の出づる道理を聞かんとお尋ねあれども、一天四海引きくるめての大論にて、一朝一夕に論じがたし。能く近く譬へを取つて教へん爲、扱こそ屁論に及びたり。夫れ佛法に地水火風空を五輪といへども、空と風とは體用にて、つまる所は四大なり。此の水火土氣は天地の間に満ちくたる故、固より人の體中に備へたれば、四の物皆體中より出づるなり。日々の食物糞と成つて五穀の肥となる。これ人間の體より土の出づるにあらずや。また小便となり汗と成るは體中水を出すなり。上に在つては呼吸、下に在つては屁と號く。これ體中氣の出づるなり。あるが中にも、火といへるが萬物造花の座元にて、その本を太陽と號け、その末を火と號く。日と火の倭訓同じきも天地自然の道理なり。されば神に天照大神、佛に大日如來、金剛界とは地上をさし、胎藏界とは地下をさす。十萬億土無量壽佛、反照自己本來空、祕密も悟道も引きくるめて、此の日輪ましまさざれば、土は皆本體の石、水は皆本體の氷なる故、草木を生ずる事なく、魚鼈を育すべ

き道なし。伎者あつても座元なければ、戯場の出来ざるに異ならず。かかる道理を知る時は、糞と成るも汗となるも、屁の出づるも火の出づるも、同じ體の小天地、固より怪しむに足らざれども、理にくらき輩は燈より出づる火は常となる故怪しまず、えれきてるより出づる火は、飯綱幻術の様に心得、又は關振手づま人形と一ツ事に覺え、慰みに呼んで見る方々も多き中に、天文曆數酸いも甘いも呑み込んだ親玉をはじめ、理に通達せるからは、問ふに骨ありて答ふるにはすみあり。人の分量智慧の程を知らざる人は、僅かの藝をいひ立てに口過ぎする浪人者や、日待月待に召さるゝ雜劇の藝者同様に心得たるぞ苦々し。凡そ天地の間に火程尊き物なく、その火の道理を目前に喩す故、えれきてる程尊き器なし。又吾が日本、神武帝より今年まで二千四百三十九年、死んで生まれ入り替る人、其の數かぞへ盡されず。其の大勢の人間の知らざることを拵へんと、産を破り祿を捨て、工夫を凝らし金銀を費し、工み出せるもの、此のえれきてるのみにあらず、これまで倭産になき産物を見出せるも亦少なからず。世間の爲に骨を折れば、世上で山師と譏れども、鼠捕る猫は爪をかくす、我よりおとなしく人物臭き面な奴に、却つて山師はいくらもあり。人は藝を以て山の足代とし、我は山に似たるを以て藝の助けとす。顯はるゝと隠るゝとは、譬へばあん餅とあんころ餅の赤小豆の如し。まこと金をほしく思つて、これまでの精力を一圖に金銀許りに凝りて、一生鷹鼠見る様な親父と成り、生爪は

もがれても握つたる金は放さず。徒然草にある通り、假にも無常を觀すべからず。人は悪しかれ我善かれ、義理も絲瓜も瓢箪も、沉香も焚かず屁も撒らず、上手名人といふは扱置き、下手といはるゝ藝もなく、食うて屎して寝て起きて、死んだ所で残る物は骨と證文ばかりなりといふ様なわかちも知らず、彌出るなら無間の鐘の蛭は扱置き、蝮蛇や龍盤魚を糞でこくしやうに煮て食はせても食ふ氣になつてためる時は、盲でさへも出来る金、出来ざる事もあるまじく、近い例はえれきてるを兩國か淺草の見せ物に出す時は、押へ付けたる大金、豪猪綿羊などの例もありとす、むる者も多けれど、陰陽の理を盡せし物を、勿體なしと合點せず。されば曾子は節を見て老を養はん事を思ひ、盜跖は錠を明けん事を思ふ。それ相應の料簡。我は綿羊を見て、日本にて羅紗らせたころふくれんしよんとろめんへるへとあんさるせ毛氈類の毛織を織らせ、外國の渡りを待たず用に給せんと心を碎き、人は手短に錢をせしめんと計る。いかに物いはぬ畜類ぢやとて、毛を織りて國家の益にもなる物を、らしやめんなんど、あてじまいな名をつけ、繪具で體を塗りちらし、引きすり廻して恥をさらす、綿羊の手前も氣の毒なり。世にある人は錢をほしがり、錢なき者は意地をはり、渴しても盜泉の水を飲まず、道理で南瓜が唐茹にて、いらざる工夫に金銀を費す故に錢内なり。夫れつらく、惟みれば、骨を折つて譏らるゝは酒買つて尻切らるゝ、古今無雙の大だけは、屁の中落とはこれならん。けふよりえれき

てるをへれきてると名をかへ、我も三國福平が弟子となり、故郷をかたどりて四國猿平と改名し、屁撒藝の仲間へ入り、芋連中と參會して、尻の穴のあらん限り撒り習はばやと存するなり。臭い者の身知らず、以來御用捨下さるべしと、屁撒つて後の尻すほめ、まじめになつていひければ、新五左衛門あきれた顔にて、兎角これは古方家に下させずは、此の癩癬はなほるまいと、つぶやきながら歸ると見て、眠らぬ夢は覺めにけり。

放屁論後篇終

追加

去る申の歳、菅原櫛といへるを工み出し世に行はれける時、好人より狂歌を賜ひしその返歌、竝に序を爰にしるす。

用るれば鼠の子も上尖竿をおほえ、用るざれば虎の皮の禪も地獄の古著店に釣るざるとは、とつと昔の唐人の寐語。眞實で呵らるゝより、座なりに譽めらるゝが快きは人情なれば、虚言と追從輕薄をいはねば、人當世を知らぬといふ。抑此の當世といふもの、今ばかり有るにあらず。祝鮓が倭有つて宋朝が美あらずんば、難いかな今の世に免れん事あれば、昔より有り來りの當世にして、八百藏が助六は栢筵が助六なれども、人今更の様に心得るも片腹いたし。我も此の當世を知らざるにはあらねども、萬人の旨より一人有眼の人を思つて、假にも追從輕薄をいはざれば、時にはあはぬは持前なり。されども人の生まれし冥加の爲、國恩を報ぜん事を思つて心を盡せば、世人稱して山師といふ。予戯れて曰く、智慧ある者、智慧なき者を譏るには、馬鹿といひ、たはけと呼ぶ、あはうといひ、べら坊といへども、智慧なき者智慧あるものを譏るには、其の詞を用るる事能はず、只山師々と譏るより外なし。又造化の理を知らんが爲、産物に心を盡せば、人我を本草者と號け、草澤醫人の下細工

人の様に心得、已むに賢るのむだ書に、淨瑠璃や小説が當れば、近松門左衛門自笑其磧が類と心得、火洗布えれきてるの奇物を工めば、竹田近江や藤助と十把ひとからの思ひをなして、變化龍の如きことを知らず。我は只及ばずながら日本の益をなさんことを思ふのみ。或は適大諸侯の爲に謀りしことども、國家の大益なきにしもあらざれども、狡兔死して良狗烹られ、高鳥盡きて良弓藏る、細工貧乏人寶、嗚呼薄いかな我が耳垂珠と悟りを開き、露命をつなぐ營みに、當時賤しき内職にて、其の糟をくらひ其の錢をせしめんと思ひ付きしを、早くも卯雲木室君に尻尾を見出され、おくり賜はる狂歌に、

酔うて来て小間物見せのお手際は仕出しの櫛もはやる筈なり
實にや己を知らざるに屈して、己を知るに伸びるとなんいへば、此の御答へ申さんとて、我儘八百を書きちらす。固より己を知らざる人に見せるにはあらず。嵐音八が曰く、ア、氣が違うたさうな。かかる時何と千里のこまものや伯樂もなし小づかひもなし

風來山人誌

跋

風來山人放屁論後編をひり出して、予をして尻へに跋せしむ。按ずるに放屁字典に曰く、屁ブブウの反し、音ブウ、去聲に發して音スウ。論語に所謂、舞雩に風して詠じて歸らんとは、それこれこれをいふか。此の書や、始めには狂言綺語のすかし屁を放り、中は萬物の理を掌に握り屁の極意をこき、末又合うて一ツ屁の尻をすほむ。讀者その臭きを逐はば、高きにのほる階梯屁の一助たらんと云爾。

葛西土民姑射杜老糞船の中に書す

自序

夫れ本覺の佛は形なく、法性の神に姿なしといへる如く、寔の通といふものは、面に通をぶら付かせず、能くない髡態をもオ、いと讚め、左までなきことにても有り難いと育つる故、人の照れるといふ事なく、立引を専らとする心より、金がなくては娼妓は買はぬがまし、聲花をせぬくらゐなら、大門をば潛らぬが能しと、天の岩戸に閉ぢ籠れば、世は常不變にお先眞暗、わいだめもなき虚に乗つて、神や末社の濫吹共、神集ひに寄り合つて魂膽咄の意氣ちよんを、聞いて居るのも無益しく、殘口翁が口眞似に、勃然としたる悪口は、世上の通を壁と見て、達磨大師のはりこみを、おきやアがれ小法師といはばいへ、頭を振つて構はぬ而已。

下界隱士 天竺老人誌

力 婦 傳

都鳥は吾妻の隅田川に名高く、すみだ川諸白は淺草の名物、眞先の狐は稻荷の社をはなれて、汐入神明の地内にお出でくと呼ばはる。元柳橋に柳ありて、柳橋に柳のなきたぐひ、何とも其の意得ぬ事に存すると、苦に病んだ所が大の無那なり。柳の絲の、かかる事は打遣りておくべきこととて、諸事柳の名あり。名にしおふ兩國の涼みも、大橋の新地にけおとされ、千ふね百ふね、皆三ツ叉を臨んで走れば、岡涼みの千萬人は各石垣にそうて進む。銀燈萬樹のはなの穴もふすぶる許りの燈の光、陸は安藝の宮島の本店かと疑ひ、川は天満祭のふり賣りかと怪しむ。硝子細工は逆さにつるさねども美しく、汲みたての氷水ぬるけれども涼し。鯉の雉子焼夜の鶴市、子を思ふ親仁も口に涎を流す。隣むべしお跡眞闇にして、間部河岸鍋より黒く、元矢の倉素より暗し。此の時に當りてさんけくは岡に居て唱ふとも、見咎むる者も有るべからず。境葺屋の兩町も、今年は五月雨と共に垂れこめて曾我祭の沙汰もなく、土用休みに引續けていと寂寞たる様なり。それが中に樂屋新道の賑はひ、いかなる事かと見れば、大坂下り女ちからわざ、ともよと染めぬきの大幟、木戸口のやつさもつさ、大入とは云

ふもをだまき、くるく車に依の曲持、つくく感ずる白のれんまん、うつ、をぬかす棊盤のかねあひ、響める聲は高けれど、安いは木戸錢二十四銅、四人合はせて百せんの雷一度に落つるが如くなり。抑此のともよは、此の度大阪表よりお江戸見物のために罷り下りしを相頼み、各様へお慰みの爲御覽に入れ奉ります、といふは表向きの口上にして、實は大阪の者にあらず。北陸道の北の方、越後の國のかたほとりに、山岡が末葉にもあらず、酒呑童子の親類にもあらず、上杉家の臣下にもあらず、弘智法印の檀家にもあらず、高田近郷の産まれなり。其の容貌美にして膚は狗背の綿の如く、ほちや／＼やは／＼としかも雪國の白きを見せ、皮薄なることのし縮みの如く、湯上りの姿は鹽引の色を帯びたり。越後の國の大坊主も、首のありたけ延ばしつべき風情、更に力者のあらくれたるさまにあらず。故ありて江都に來り、大根畠に住すること又故あり。

凡そ力婦は、日本にては巴板額を親玉として、清水上野が妻以下、近江のおかね奴の小萬に至るまでも、其の數あまたありといへども、目前の事に非ざれば、くらべ物にはなり難し。男子の力量といへども、書の上に形容し、狂言綺語にまなびて信しからぬこと多し。故人栢筵、五郎の役にて、せり出しにて、家を片手にさし上げて出でたり。訥子これを諫めて曰く、「時宗もとより大力の士なれども、家をさし上ぐるを片手わざにせんや、重ねては兩手にて指し上げ給へかし。」と。栢筵答へて曰く、「非

なり。時宗いかに大力なりとも、いかんぞ家をさし上ぐる事を得んや。これをさし上ぐるは則ち狂言戲藝の情なり。これ剛強の甚しきを見るのみにて尤も虚なり。されば兩手にてさし上げて強く見せんよりも、片手にてさし上げたらんは殊に強く見ゆべきなり。其の實を正さば、兩手にてもさし上ぐべからず。」と云ひしを、訥子深く感じけるとぞ。況んや唐土の萬八卷の書籍に力婦の沙汰ありとも、それはそれに片付けて置かんものなり。詩邨風簡兮篇に、有レ力如レ虎とは、大磯の虎が事を言ひて、大磯の虎は漢宮三千第一の美人、夫狭手彦が不老不死の藥を取りに日本へ歸る時、李白王維等と共に明州の津に別れを惜しみ、きこえませぬぞ狭手彦さんと追ひかけしに、股野五郎景久が、山の上より投げかけし重さ三萬三千三百三十三貫目の大石を請け留め、目より高くさし上げたり。深川の三井先生筆を揮つて、三圍の繪馬堂に此の額有り、石はあづまの森の内に有り、則ちとらが石これなり。夫狭手彦此の勢ひに恐れ凝り堅まつて石と成る、今淺草の地内に久米の平内これなりなどと、書いて置かれても、見ぬ事は口が利かれず。されば水滸傳に一丈青扈三娘あれども、ともよが心には豆腐小半挺とも思ふべからず。故に盡く書を信せば書なきに如かずとは、諸事杓子定規にするなどの教へ、さればとて無性やたらにはり込みをくはせて、書物を片つぶしにもなりがたし。傾城に誠なしといへばとて、どうぞ節句に來ておくんなんし、外に頼む所もありいせんと切なるは、詐りのないことなる

べし。詐り多きは見せ物の看板、かんばんにいつはりのないと云ふが則ち詐りなるに、此のともよが力は實に往古の巴にも賢りつべし。民部省に主税寮あり、仁王様に力紙あり、腕に覺えは力瘤、鷹の爪は力艸、馬具に逆韉あれば刑具に萬力あり、祇園に一力伍長に與力、山伏に強力苗字に高力、コシコ、リキコ、マカリキまでは聞きしが、女にかかる大力ある事を聞かず。奇なるかな妙なるかな。狭たる彼の淫行黨が、大根島に豆の萌がござると唄ひしは、此の地開闢の比の口調にして、大根ばたけ豆藏を蒔くと武玉川にも見えたり。時なるかな、今此の島を探して力もちといふ餅を得しは、未代力者の鏡餅、くもらぬ御代のしるしとして、田に出来る餅米を畑へ植ゑても熟しつべく、畑へ作る餅粟を田へ蒔いても實りつべし。此の時に當つて、木に餅の生るといふ譬へも餘り旨過ぎた事とも聞えず、島の中といへども、田螺をも取り得べく、赤貝をも取りつべし。環を提けて木場に起き、提籠をかたけて樽河岸を過ぐるも、木に據つて魚を求むるともこじつけてん。孟軻は泰山を挾んで北海を超ゆると、力業にも及ばぬこと錠の下りたたとへに引けば、貫之は力をも入れずして天地を動かすと、敷島の道廣く溫和に説きかけし、此の國のきまりなるべし。さればよみ歌の上には自然と其の姿のあらはる、ものから、小町の歌を評しては、つよからぬは女の歌なればなるべしとも書いて、三十一文字のことくさにも媚々たる風情は見ゆるを、婦人としてかかる力者に生まれたるは何ぞや。

私かに按ずるに、扶桑武を専らに尊む事、鎌倉の右幕下、總追捕使の職に補せられしより以來、天下盡く武威に伏して今猶かくの如し。治世に亂を忘れざるは専ら武道の本意なるに、今時の息子株、安樂に居て安樂に厭きたらぬ事をいかん。こゝに江都の自由自在なる事、試みに其の一二を擧げば、鷹鴨のあてがひ賣り、冬瓜南瓜の切り賣りはまだなことにて、短尺梶の葉の裁ち賣りあれば、鳶の請合賣り有り、鯨のふり賣りあれば、鐘の出来合ひあり。風鈴そば切り夜發そば、田樂鳴焼やき肴、一ぶく一錢の荷ひ賣り、結納の突きかけ買ひ、葬式の損料貸し、切りぬきの地紙には古骨を世にいだし、張りぬきの似面はむだ骨とも聞えず、よかれあしかれ捨てるものなく、何でもかでも十九文と、何闇からぬお江戸の繁昌、イヨ秀鶴有りがたいと、めつたむしやうに有りがたがるかと思へば、かかる御代に生まれ出でしを有りがたいとは思はず、夏は晝寢して居る座敷まで屋根船が著かぬとの小言を云ひ出し、冬は火燵の前へ芝居があるいて來ればよいとの我がまゝ、たゞいきなことをのみ尊み、欣々通々として、鮫鞘のお太刀は煙管より軽く、藁の帯入は七ツ道具を兼ねておもし。弓馬合戦たしなむ事は武士の道めづらしからずと、今川狀の真中を一寸許り切り抜いて己が行ひとし、只新らしい事好み、象牙の撥の眠は手綱の眠より高く、弓手の爪の絲道は鞆の弦道より深し。役者の身振を學ばずんば、いかに奢りの腹をへらさんと、怠懈放侈の心より、親仁の尻は祖父様より重く、

息子又爺様より弱し。只通を以て義とし口を以て勇とす。弓矢神かかるのら者の多きを歎き給ひ、武士は天が下の神物なり。すべからく静め謚まる事を掌るべし。それに何ぞ今の若さに武藝をも語止めて、天の岩倉に居つゝけし、伊豆の千別に千話文の手跡さへ拙く、遣手若い者への祝儀は紙拂ひにはらひくさり、ちくらの置き藏にひどい工面をしてにけ、耳にもろくの意見を聞いて心に此の頃の不孝を思はず。こゝに於て八百萬の神たち神議りにはかり給ひ、中にも大力持尊、ともよが體にやどり給ひ、世上のなまけ男に見せしめ給ひて、勇氣に引き入れ給ふか。何にもせよともよが力量、ハテいぶかしやナア。

傳に曰く、登毛與越の後州高田城邊の農夫の女なり。父が收むるの田六十畝あり。六十畝は大畝なり。家極めて貧し。今年黄金十片の爲に、六反の田を失ふに及ぶ。晨昏歎息す。登毛與父が悲歎を見るに忍びず、鄰家の主を憑んで我が身を十片金にうつて、二月十日東都の蘿蔔島に至り、柳家某が半物となり、六年奉仕の約をなせり。一日登毛與、四斗酒一樽を酒局に納るゝに、一毬を捧ぐるが如く、微歌して常の如し。衆皆驚いて初めて力あることを知りぬ。猶試みるに其の力あけて量るべからず。こゝに於て主人五年の給仕を免し、期年にして故郷に歸らしめんと約し、且其の力を千萬人に見せしめんことを求む。登毛與期にして歸卿するの歡びに堪へず、辱めを千萬人に忍んで遂に此の業を爲

す、其の孝あること見つべし。誰か是れを憐まざるべけんや。

力 婦 傳 終

跋

先に風來先生、はななき男の爲に放屁論を戯述して、其の屁海内に響き、其の文は淀の川屁に水車の廻るが如し。書林は錢を積み上げて、階子屁の尊きを知る。此の屁の臭味を忘れ兼ねて、又ともよが事を著せよと我が門人涓滄浪を責む。彼は屁の可笑しき物をとらへて天下の才子に握らせ、是れは力業の可笑しからぬ者を以て、井の内の蛙に物真似せよとは、屁つぴり儒者にもあらばこそ、誹の力もない者に、さりとは／＼と云ひながら、其の後に書して書肆浮龍軒に與ふ。ナント榮良軒采老。

蛇蛻青大通

大通は人の心を種として、萬の言の葉とぞなれりける。花に行く無駄人、月に通ふ遍鋌も、いづれか通を知らざりける。夫れ大通といふ文字は唐の俗語にて、大いに人情に通じたるを稱したる字の通りの詞なり。近頃世上一般の通語と成りて、晝三買ひの意氣人より、切店そりの俠客にいたるまで、假にも通を唱へざるはなし。彼の通に差別あり、極眞の大通は上方の達衆に等しく、くつきり立ちし水際は、水道の水の名物男、意氣地の立引男氣は、くだ／＼言ふも緒環なり。夫れより次へ落ちて來て、木葉通といふ溝飛びありて、彼の大通の大びらに錢金遣ふを鈍漢と譏り、熱鐵のぐひ飲み高慢の脂をさけ、我慢己惚の鼻高く、四ツ手の翼の自在を得ざれば、ばつち屁端折の悋惜を用る、羽折は長きを厭はず、身幅はひろきを嫌はず、流行物の仕出しに追はれて、工面の兜巾に額を痛め、常に意氣過ぎの梢に架を高くして、江戸節の横噤へをじぶくるを天狗倒しと唱へしが、近頃號けて横倒しといふ。扱言語も跡を詰め、笑話の受賣に、稍々口拍子が廻つて來ると、おれは餘程通だわえと、我と我が手に印可を許し、人の話の腰折つてお先眞暗に洒落散らすを、心ある人々はさけすん

で苦笑ひすれば、扱はおれが口には楯突く者こそ無ツかりけると、仕たり顔する癡漢共、智慧は三文番椒の袋より狭く、高慢の高きこと前引の月躍はそこ退けなり。彼の殘口翁が小言に曰く、未熟柿が己熟せりと甘味を付けけれど、根からの美味ならねば、何所ぞに否なる味の出るは腐りのつけるなり。腐り付けば萬の物も臭し。臭味の付く族に眞物はなしと知るべし。味噌はみそながら味噌臭きはわろく、粹も粹くさきは粹ならぬ物ぞとは、誠に古今の通言なり。かたの如き鈍漢めらが盡した衆の魂膽ばなしを、得手の道へ引ツかけて、とかく女郎を買ふなら魂膽が第一にて、一文なりとも引きすと出ねば、手に入つたといふではないと、手前勝手な横ぞつばう、馬鹿の上盛、鈍間の下積み、能く積ツても見るがよし。女郎に無心を言ふととも、折と時とがある物なり。れつきとした通達でも、遊郭の金には詰るならひ、遣つた上の金詰り、切刃詰りし才角に、膝とも談合男づく、頬を捨てての無心には、女郎の心は知らねども、其の苦は誰がさすことごと、氣の毒餘ればいとほしく、人の譏りも顧みず、裸にも成り年をも入れ、身を粉に碎く黄金心中、貸人の手柄借人の名聞、氣の切れた女郎ぢやと立つ浮名には客が殖え、客が殖えれば金もでき、首長はまる借金の、淵は瀬となる陰徳陽報、遣ふ丈の金も遣はず、何が癖やら寝がつかつてやら、まだ氣も知れぬ傾城に、かう一雙から魂膽とは、穴の貉の盆暗共、適登樓の後朝には、先づ友立の所へ驅け込み、態と睡たい顔付にて、マア聞いてくんなさ

エ、斯ういやアどうか味噌を上げる様だが、つがもねエ有り難てエ句が有りサ。どうしたもんかめつきりと晝が付くよ。マア斯うだ、夕ア少切ッ懸のある傾を張りやした、所で牀が納まると、サアつがもねエ銘句を吐きやす。そかア又恐ろしい櫻田が狂言に高麗やが魂膽で、二十五點といふ所をゾドンゾドンと當てた所が、先刻承知の山櫻、裏ア身揚りである筈だが、隙ならお前もあいばねエか、連れの一人や二人ア口鋒で働かせる、何んでも強敵に引きみんたんのソレ、ほん突き出したが、とりえぢやねエかえと、襦袢で咽をぬめながら、唇反らした自慢貌、約束の夜にいて見れば、女郎の方でもぬかりなく、夕ア貰ふ筈の客人が来いせんから、今夜はどうともしておくんなんし、今度はきつと働きます、ホンニ滲々お氣の毒でござんすと、どうしいせうの二ツ三ツもやらかして、明け透けらしく見せかくれば、今度はくと思ふより、木乃伊取るとて蜜人己が手に蹴返して、良に懸る白癡共、さりとては世に多し。これより段々悪業が入り、金のとれぬ腹いせに、無理にせこめて髪を切らせ、墨彫らせて嬉しがり、坊主にも俗にもござれくの起請文、又は盗人證文の當名は誰でもお望み次第、指の先の厚皮でも刎がせれば早手の物と悦ぶは、さりとて狭き料簡ならずや。近松翁が傾城請狀に、文には啞を書きならひ、牀にて人を焼きならひ、ねむたくとも居眠らず、泣きともなくとも後朝の、別れに泣かせ申すべし。起請誓紙に身の内の、血をば惜しませ申すまじと、書きたる如く、思ひまる

らせぬといふ文もなく、替りませうと書く誓文もなきものにて、臨機應變御縁次第、小股くゞりの書人に見れば、主に苦勞は懸けいせんと、夫れ相應の調子に合はせ、所詮いうても錢にはならず、三度来たなら三度だけ客帳の駄目を差し、賣れの込むのが得なりと、十把ひとからけに見縊られたる心、恥かしきことにあらずや。大通の元々文魚先生が茶飲み話に曰く、今の浮世の女郎買に、まだしもに見ゆる物は新吾左の遊びなり。買ひ切つた上からは、傾城の五倫五體は我が物と決定し、假令名染の客にもせよ、貰ひ引きを聞き入れず、少と牀が不勤か又は牀廻りが悪いと、忘八を呼べと切刃廻し、あたり構はずがなり出せば、心の内では親の敵のやうに思ひながらも、何でも一夜の賜顧なれば、お許しなんしと誤つて小言いはるゝ右流左きに、まんぢりともせず勤めても、商賣冥利かうする筈と、客といふ字を眞向に差駈し、腹一杯に權威をふるへど、定式の入目の外格別の金が入るでもなし。また聞いた風の通どもが、書人とか魂膽師とか名を付けて、諸事控へ目に立ち廻り、面白くさえて居る最中に、件の如き客が来て、差合ならば貰うて出せと、言譯聞かずだ、け散らせば、まだ貰ひにも來ぬ先に、爰が通だと氣を通し、ありやア手前が客人か、つがもねエとんちきだの、したがあんな奴が爲に成る、おりやアエエから勤めたがいい、あんな横倒しやア座敷をあけるといふだらう、口を明かせねエやうにこけエ入れたがえエと、うぬが方から引けを取り、氣を通す心遣ひ、誠に粹が身を喰ふ

とは、是れらが事を言ふなるべし。此の調子にてばんじけちくくと立ち廻るを、色仕立と號くる由。どこの仕立やが仕立てるか、去りとはきう屈な仕立様、我等が様な肥満つた者には、尻がへばつて著悪しと、笑はれしも理なり。斯くの如く引けを取るも、一體の下心は女郎の内股へこび付いて、一度ぶりの勤めなりとも、引きみんたんにせんと欲する、むさき根性より起る事なり。蓼くふ蟲も好き好き故、一概には言はれねど、左程身錢がだしとむなくば、たかで遊びに行かぬがよし。一度ぶりの勤めさへ工面の出来ぬごくだうなら、假令氣のある女郎でも、あいそを盡かすは知れた事なり。行き著くまでは遣つて見ぬ不甲斐なき魂にては、傾城は扱置き、何事に寄らず行くものではなし。又席狭き遍鋌が、傾城に誠なしと、四角な卵を引事にて無面目に言ひ破れど、女郎の子が女郎にもならねば、傾城の種ちやとて禿の黄卷が有るでもなし。我は親兄弟の爲に沈みし戀の淵、一頭の朱唇萬客嘗むと聯ねしごとく、入り替り引き替り來る客が、惚れられまいと思ふもなければ、鍾愛可愛の情を述べ、惚れた惚れぬの臺詞にもけつづをして居る矢先なれば、めつたに惚れぬも道理なり。其の又惚れぬ傾城を手に入れようと思ふには、誠の一字を以てすべし。鹽治判官高貞の家士大星由良之介が、啞から出た誠でなければ末が遂げぬといへるごとく、魂膽狐のすつとの皮、釣り留めんとする狩人は、度々の良に金銀を費し、果ては直化實の化、實が啞にて啞が實、心の誠がまことに顯はれ、身の油の

揚鼠で、眞の甘味を喰はせたら、どの様な白藏主でも、しん實の尾先を顯はし、手に入る段に成つたなら、懐春の處女や、男ほしい侍女の、卻舎切つた浮氣より、垢抜のした色事なるべし。併しかやうに申せばとて、親の譲りの家を潰し、居屋敷を打込んで、深はまりはいらぬもの。只女郎は遊物、遊君遊女の遊の字は、遊ぶといふ文字なれば、一步ならば一分だけ、二朱ならば南鐐だけ、客といふ字の位を落さず、買といふ字を心に込め、悪穴を言はず、悪酒落を決してせず、見えをいはず啜をつかす、男氣を専らとして、座敷の敷を重ぬる時は、需めずして通となり、態とならざる仕打の中に、おのづと出づる面白みには、傾城も思ひ付き世間でも有り難がるべし。よしやそれは千差萬別に、女郎殺しの魂膽にて、お手に入るのも有るべけれど、高が疵坂ない女郎の才角、拾兩遣つて五兩は引けず、假令五兩引けた所が、心盡しがいくらの事。なれども是れも得手勝手、吉原でかいた恥が、家の瑕瑾に成るでもなく、女郎に不實をしたればとて、一家親類に見放されもせぬものなれば、詰る所が理窟もいらす、何して見るも楽しみなれば、差徒に千年似た山に千年、すつとの皮に千年の、ぬりくりの劫を歴て、青大通の殻を脱け、浮世くるめて丸飲みの、蝮蛇となり給へと、叢探しの穴賢穴賢。

序

やまと歌は、たけき心をも和け、鬼神をも感ぜしむ。男女の中をも和ぐるは歌なり。されば憤鼻禪もて、らといへば歌にもよまれ、下紐といへば雲の上人の口號みともなりなんかし。ものは言ひ様言ひ品にて、仇し仇浪寄せては返る波、淺妻船のあさましやといへば、さも麗しく聞ゆとなん。取りもなほさす今の世に船饅頭ともてはやす、此の道の蒼妓、肥滿々々の阿千代てふもの、新飛てふ白拍子に見えて、生活の不祥を説き破り、浮世は下和が替玉となりて、女閨の寓店に目下見し兩瓦三舎の荒唐を口かたましくも言ひたるを、慣熟の奴が供待の聲高に語りしを、予物陰より立聞きしが、言葉のはなはひくしといへども、見識は水道尻の火の見より高く、彼の泥郎が得難にしたる踏婦傳の趣にも、をさく劣るまじと、筆にまかせてかいつけ、太平樂の卷物と號す。希はくは四方の君子、鼻の孔の行き届かざる所は、瘡深い奴が脱漏たることも多からんと、萬事茶にして見給へかしと云爾。

名物の饅頭は皆様御存じのほちやく
川端の苦船は普賢菩薩の御縁起

柳腰の取形は江都妓女のしやなく
縮緬の二布は尻喰観音の御戸帳

太平樂卷物

阿千代之傳

泯江の源は傷を浮ぶべし。楚に入るに及んでは、舟船にあらすんば渡るべからずと。毛唐人の陳奮漢を三十一文字にやはらぐれば、

よし野川その水上をたづねればこけの岩間の雫なりけり

此の歌の心をやはらぐれば、水のながれと人の身は、よるべ定めぬ川竹の、あるが中にも取り分けて、浮きふししけき浮れ舟、苦もる名代かくなき、ほちやくの阿千代といふ船饅頭の品者あり。おちよだアなア、こうよつていきねエ、なアこうとよびかける、鼻聲もどうやらあぢに可愛らしく、これに打込む折介は、心の竹光うち割つて、うつゝをぶんぬき誠をつくし、そゝり手合の俠客は、手ぬぐひのあひそめてより、日和下駄の鼻を落さうと、まゝよてんほのかは財布、そこを拂つて通ひつめ、永久ばしのこまよせにて、磨墨のまつくろに成つて、いきつきあらし戦ひに、われぞ先陣われ一陣と、梶原が逆櫓にひとしく、舟軍のかけ引にて、喧嘩口論たえざれば、所の番人さし置きがたく、

六尺棒にておつ拂ふ。是れ辻ばんから棒が出たと童謡にいふ所なり。頃しも三伏の夏の夜なりしが、お江戸にその名立花の新飛といふ藝者あり。客人は四季庵から仲町へはしけて仕舞ひ、相仕の小まきと舟にてもどる其のをりから、新飛「ナント小まきさん、この比名代のおちよとやらいふ船まんぢうをはなしの種に船へ呼んで、なぶつて見ようぢやアあるまいか。」といへば、小まき「ホンニこれはいい所だねエ。」とまはしにたのめば心得て、たれだ〜と聞くうちに、おちよが舟にたづねあたり、酒のあひてに此の船へと、のりうつらせて見た所が、むきみしほりのもめんのかたに、黒もめんの手拭を、端とはしとむすび合はせ、帯と見せるは仕似のいでたち、やき付のかんざしで頭をかきながら、おくめんなく座になほれば、新飛取りあへず、「おちよさんとはおまへのことかえ。佛千人神千人、世間をちつともひろくするは、わたしがつとめのならひ、これをえんに心やすくしてくださいせな。かういへばどうやら團子らしいが、あつたら器量もちながら、さりとはいやしいおまへの商賣、とてもつとめを仕なさるなら、せめて女問の河岸へなりとも出なさつたが、よからうではあるまいか。おしたてならみめかたち、あつばれお職といつても、たれか點の打手もあるまい。もしまた藝者になる氣なら、わたしが妹分にしてひき廻して上げやんせう。ちつとはなへ聲のぬける所は、新内のふし落しにうつて付けでござんせう。すべてわたしが商賣は、うぢなくて玉のこしとやら、身はいやし

うても能い衆のまへなどへ出られて、面白いことやをかしいことを見るばかりはつとめの一徳。又さもしい事ながら、うまいものは年中くひあき、これもみんな藝のおかげ。ナント今から船まんぢうをやめにして、藝者をして見る氣はないかえ。」と、むだ半分にいひければ、千代くつ〜とふき出し、「ホンニ夏の蟲がこほりをわらふとは、おまへがたのことぢやわいな。ふなまんぢう〜とおしきけていはんすけれど、ふなまんぢうの尊いこと、あらましつまんではなしやせう。後學のために聞いておきねエなア。こう唐の詩經といふ本に、漢に遊女ありといふことがある、漢とはひろい川の事、遊女といふはうかれめのこと、川中のうかれ女なら、船まんぢうではあるまいか。さうすりやアわしらが商賣は、人のをしへのもととする、五經のなかにも出てゐるぞえ。また朗詠にも、秋の水いまだ遊女の珮を鳴らさすと、四角な字で書いてあれば、きつとしたけいづぢやアあるめえか。定家卿うかれめに寄する御うたにも、

心かよふゆききのふねのながめまでさしてかばかりものは思はじ

これ川中にふねをうかべて、客をまつ風情をよめり。すべて遊女といふ文字をうかれめとよみ、うき川竹のながれといひ、越後の國ではうきみといひ、またひや水となづくるは、ひつふかいといふことなり。大坂の新まちでは、太夫に付くを引舟といひ、はじめて客にあひそめるを〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇、はじめて勤めにいづる者を新造となづくるは、あらたにつくりし舟によそへて、〇〇〇〇〇〇〇といふことなり。なじみを深き浅きといひ、るつゞけをうつをながすといひ、心がはりを水臭いといふ。なんでも女郎の身のうへは、たいてい水によそへてあれば、ナント遊女のはじまりは、船まんどちうではあるめえか。そのかみはあさづま船といひたりしを、まんぢうぶねとなづくること、つくづくとかんがふるに、むかし西行法師にまみえ給ふ江口の君、三十二相のすがたをけんじ、普賢ほさつとあらはれ給ひ、めされたる御ふねは白き象となりたるよし。象はもとよりまんぢうをすくもの故、うかれめの乗る舟をまんぢうぶねとぞなづけけん。また一切を三十二銅にきはめしは、三十二相のえんをとりしものならん。なんぢややらお前がたは、いろざとぢやのくるわぢやのといはんすが、それも燈籠の時分か、にはかの時、お客の供でゆかんして、おもてむきばかり見さんすゆる、溫和らしう思はんせうが、ないしようへまはつて見ると、精霊さまのもり物どうぜん、内と外とは大ちがひでござんすぞえ。わたしもかへ玉になつて、まる三年あづけられてるうちに、とつくと見て知つてをりやす。昔から替らぬものは、引四つに大あんどん、もめんかぶろのとりなりは、菱川がむかし忍のぬけ出でたるかとうたがはれ、正月の伊達ぞめは、一蝶が名所遊女を眼前に見るがごとし。つるべ蕎麥はほそきをきはらず、やまやが豆腐は白きをいとはず、竹むらが巻煎餅は、齒當りのかたきをしや

うし、なかの街のこぶまきは、齒ごたへのせざるを感ず。甘露梅は下戸くらうて舌うちし、袖の梅は酔潰服してゲツプノす。八朔のしろ小そでは、時ならぬに何の雪ぞ。七月のとうろは、やみなるに何の月ぞ。内へむけての松かざり、あらごものさふに餅、庭の焚火に草市小そで、春の櫻は秋のはかと替れども、かはらぬものは家々の格式、どうしようはま屋におざんす、松かは屋にいんすりんすのことばのはしに、昔の風がのこつてはあるけれど、變りはてた娼妓衆の體たらく、いにしへは十八樓の揚屋より、名ざしの女郎の名をしるし、おくに御法度の客に御座なく候といふ文言をした、めるを、あけやさしがみと名付けたりとぞ。かかる蕩々たる花街の粉頭が、相手かまはずつとめの外の樂しみも、人めをしのぶ閒夫ぐるひ、それも昔の高尾に島田、あけまきに助六、小むらさきに權八ともいふやうな、末の世までもうたはれるやうなことはなく、唯わけもなくちわるもあり。又近ごろのはやりもの、爰かして見た人や、つき合ひにくる客人の、あたゝからしう見える相手に、惚れ身でかける色じかけ、どうぞ一度なりともつれ申して来てくんなんしと、身上りの二三度もはりこめば、こけはむしやうに嬉しがり、あしが付いたがさいご、ぬしにやアなにもかくしいせんと、うちかぶと見せかけて、白化の金太板ごき、下でもぬしに目をつけて、外の客人のじやまになる故、二階をとめると申しすから、なんぞ主のしてくんなんした分にして、こしらへて見せいでせんでならぬやうに

なりいした。じつに主の外はつとめることがしみる、いやでおざんすから、ねつから客衆ははなれて仕舞ひ、どうもしやうもおざんせんが、半金ぐらゐるはるなかのお客人にどうとも仕て貰ひいすから、どうぞ寢道具をしておくなんしと、のつびきさせずく、り付ければ、身あがりのことはうまる。すつぱり寢道具のできた時分、貰ふあてがまちがひしたと、もらつた金はあたま、まり、どうも顔が合はされいせん。さうく、如在でない事は、これで許してくんなしと、指のさきをすこしそぐか、髪の毛の中でもすかしてやれば、童子格子がたんのうすると、胸の算盤のけたを合はせてはじきこみ、爪のながさ心の内のさもしきこと、口にては言はれもせず。さりながらそれも道理、入江町に居さんしたお路様が、断婦傳の三浦屋の高尾様にいはんした通り、傾城のものとは、錢が一文楊枝が一本さになし、みな客人のふところをあてにする境界、どうしてこれが正直に情をたつて暮さるべき。心は山瓜どうぜんに、どうかなしてく、り付かねば、たちまち借金の淵にしづみて、てんく舞ひのをどりの拍子、これを来て見よ河岸へさけられ、または女護の島の總雪隠かとあやしまる、伏見のつほねへおろされ、夜晝わかたぬ鐵砲責めの苦しみ。書三ツのつけまはしのと、くらるが付いて全盛するほど、座敷代が月に壹まい、しんざうまでに使はせる、みすの紙からおはぐる代、茶屋の付け金、買ひぐらひ、さまざまのもの入りが多くなり、もの入りの多いにしたがつて軍用金におはれて来て、

おつつめは手くだへ落ち、かうすれば客がせきこむ、どういひかければのほせて來ると、あけてもくられても狂言のすぢをかながへ、正月の元日から、しはすの三十日まで、こ、をしきつて、かうせめてと、ゆらの介が夜うちまへといふ氣になつて暮すことゆゑ、なかく優なことや情らしいことに頓著してゐられぬはず、こけおどしの唐様や歌書のことばをひねくるを、やさしい事と見給ふな。有りていの所を申さうなら、古人の句にいへることく、

にしき著てた、みのうへのこじきかな

これ今の世の傾城の身のうへなり。さてわたしがつとめのいきかた、心いきのいさぎよきをはなさうから聞きなんし。江口の君のながれはたえず、三十二銅のすがたを顯じて、此の河岸端のこまよせを、まがきとも格子とも思つて居れば、いろざとのみせつきも、さまで格別のことも思はず。内をば船でのり出す時、冬ならば炭團二ツにかた炭一升、淺草紙の四ツぎりを、親方から請けとれば、小づかひに追はれる氣ぐらうなく、二階の小用所はくるわばかりと自慢らしくいふけれど、それはお客の小べん所、むしろが船の重寶は、あれ見なさえ、苦のわきの四角に明いたところから、おいどを川へつき出して、しやツくとはじく氣さんじ。ゆく水の流れはたえず、後は綺麗な潮をくんで、てうづ水にも事かかず。また行燈のないうろく船や、一せん二六の舟蕎麥が、毎夜こ、をうり歩けば、

むかうの人をよばずして、ゐながら萬事の用がたる。三十二文ときまりはあれども、五十六乃至は百、なけ出して行く客もあれば、上端はわしがほまちにて、かひぐらひの仕拂ひ。明くるひるまへ勘定すれば、もの前の苦勞もなし。おせき様の身のうへも、わしらがつとめもどうぜんにて、おもてをはるむだがなければ、紋日物日のとんぢやくなし。錢がほしいとおもはねば、客衆をたらしいつはりなく、ちよんの間のことなれば、いろ男ぢやとてうれしくもなし、ぶ男ぢやとていやでもなし。心にまかせてふるといふわがま、なし。わづか三十二文で情をうれば、くぜつをじぶくる野暮もなし。いやなれば來ず、客にうそなければ此方に手くだもなし。詐らざるよりは眞なるはなく、眞なるより正直なるはなし。サアこれでも船まんぢうが卑しいかえ。又これからおめへがたのたなおろしぢや。まづおとび様のさしてゐるさんす、斑なし鼈甲のむなたか櫛に、しのぎの笄、まへかんざしの銀匁から、安積りに見たふして、十八九兩が物はある。柳ちやの緞子のおびに、縮緬ひとへのぶつかさね、蝦夷錦のどんぶりぐるめ、これも十兩からが物はしつかり。サアそのかねの出どころをたづねれば、おめへがたの晝夜のつとめが、二人しばつて三步づ、た、きわけにした所が一步二朱にしかならぬえぞえ。月三十日うりつめて、あぶみふんばり十兩あまり、そのうちを百助が、枸杞の油に下村の舞臺香、あぶら元結かみゆひ代、たなちんから飯米から、と、さまか、様まはしの仕著せ、うちを出る

時うちかける、火うちがまにひうち石、こつほり下駄によせ緒のうらつけ、諸しきくるめて勘定した引きのこり、おめへひとりの身じんまくにも足りようかえ。さうしてみれば定式のほかに貰ふ客が、たんとなくては一日も暮されうか。また金をくれる旦那ぢやとて、むしやうにくれるものでもなし。そこがかのころぶとやら、けつまつくとやら、只は起きぬつかみ金山、寢ずにとる藥とはほつてもゆかず、うはべばかりは娘の命でも、御本地は正はちまん、賣女からつりをとるは、おめへがたの身のうへぢやぞえ。そうじて世間のことわざに、どぢやうのことををどり子といふは、汁がおもぢやと云ふことなれど、いま時のをどり子に、汁氣があつたらそれこそほんに二ツとない鼻ツかけぢや。またい、衆の前へ出るのを、見えらしう言はんすが、とりも直さず狎ころや猫の子を、お膝のもとへ引き付けて、なぶり物になさると同じこと。それをよい子のふりをして、ひつかける鼻の高でうし、五分ながのいたじめ襦袢で、座いと三をきゆつといはせ、きく岡がつぎ三味線に、千枚ばりのつらの皮、さりととはばちあたりのさいじりは、ろくでもない聲じまん。春はさくらの向島、客の羽織をひつかけて、置き手ぬぐひの鼻唄に、裾はばらくばら緒の草履、けまはしの裏模様、もれ出る淺葱のちりめんは、しりくらひ観音の御戸帳が、羽織のかんばんとおもはれて、このもしけは微塵もなし。夏は納涼のやかた舟に、二度の月見をく、りつけ、冬は雪見の二軒茶屋、酔潰どののつぐ酒を、新川

の前垂まくだれどうぜんに、酒さかびたしになつた著替きかへの膝ひざへうけこほしてざつぷりいはせ、平氣へいけいで袖そでで拭ぬぐつて見せるは、かはりの小袖こそでをしてやらうと、りづめでいはせる下したご、ろ。ある時はまた座敷ざしきもなく、ねッからひまな時じ分ぶんには、御機嫌ごきげんうかッひとこしらへて、お得意方とくいがたへおして參上まゐりあがり、御祝儀ごしゆぎなしのた、まりは、打うツちやつてもおかれやるまじと、舌したなめずりのあつかましさ。またちつともひけさうな息子むすこと見れば、あしだをはいたまゑひの如ごとく、ころぶやうでころばぬやうに、おもしろをかしくだましかけ、モシわつちが内うちへ來きなさせと、めりやすの稽古けいこはおもてむき、仕つかだし茶屋ぢやへいひ付けて、くひたい物ものをとりよせて、あとの拂はらひは息子のふところ。又そのうへに小釣こづりはみんな手前てまへへかきこみ、また用もちをいひ付けるのを鼻はなにかけて、茶屋ぢやのおぢ様さまに飯めしの菜さいをねだつてやる。さす手てひく手がみんな慾よくつら。その内うちにもうちつといひ鳥とりがかゝると、さきの息子をとらまへて、けさも湯屋ゆやへ行く道みちで、おまへの來きなさせるのを近所きんじよの若い衆しゆがいろ／＼にどくづきやす。あれでは喧嘩けんかでもしかけやせうから、これからはこつそりと屋根船やねぶねで出でやせうと、あぢにもてなし、むすこが足あしがあがつたあとへ引ひきすりこみ、今度こんどのお客きやくはからあたまから惚ほれ身みで仕しかけ、おやぢは用事もちごととおもてへはづせば、おふくろは念佛ぶつがう講かう、ついそのうちにちよ／＼けまちよけのこんたんで、疊たたみがへをもねだり出し、竹格子たけこうしがすかし窓まどのくろ塀べいとかはれば、そのあと變へんじておちまのくり石いし、隅すみにちよつこり布袋竹ふていちやく、ひかり手合てあひがもつて

來た、不動ふどう様の御えん日ににかつた鉢はちうる、藥師やくしさまの御えん日ににかつたせきだいなど、むかうの方かたへずらりとならべ、たけすのえんに擬寶珠ぎぼうしゆのやきもの、はんどうはんざふみ、だらひ、樂屋鏡臺がくやかうだいが立派りつぱにでき、手てまへ雪隠せついんのふしんもすめば、一夜いちやけんぎやう半日はんじつ乞食こじき、だん／＼榮耀えいぎやうに實みが入いつて、とりつけひつつけねだりごと、顔かほにしるけがある中うちばかり。目元めもとにしわよるちりめんの、三十振袖さんじゆせんになつてくると、仕つかおくり客きやくもはなれて仕舞しまふ。又さま／＼な男をとこをくつた上うへは、一通ひととほりなはいやになり、兄あに分ぶんとやら子分こぶんとやら、どうやらかうやら亭主ていしゆにしても、綻ほころび一ツ縫ぬいはれねば、こそくり物ものにも人ひとだのみ、ぬかみそへ手てを入いる、がいや、飯めしをたくも手ておもいと、けんどんそばで腹はらをつくろひ、菜さいはいつでも取りつけの、ひしほうりがもつてくる座禪豆ざぜんまめや菜漬なづけで仕しまふ、當座たうざのがれのじだらく世帶せたい、まんまと身のうへ持もち崩くづして、末すえはでいしの流れの身み。よく／＼運うんに叶かなうたところが、よび出し茶屋ぢやのむすめとばけ、又はそこ、の水茶屋みづぢやぐらるで、貧みしい暮くしをするもあり、おめへがたもその通り、いつまで若い身みではなし、今いまからそろ／＼身の納まりを分別ぶんべつしておきなさせるのが、よささうなものではないかえ。さういふもお前方めがたが、うそにもわつちが爲ためを思おもつて、深切しんせつにいつてくださんした御禮ごれいながらのあてこすり、良藥りやうやくは苦にがいとやら、むしにさはらば許ゆるさんせ。又おめへがたが高尾たかおさんぐらるな人で、わつちがお躰せみさんほどな器量きりやうのものなら、まだいふ事もあらうけれど、何をいつても讀よまぬど

し書かぬどし、今夜はとまりの客もある筈、モウお暇申しやす。」と、おのれが舟へのりうつり、ふなばたをたゝいていはく、「大川の水すめらば髪をあらふべし、濁らば脚布をあらふべし。よしかく〇〇〇〇。」と、鼻聲でうたうて去る。あとに二人は顔見合はせ、「なんだかねつから分らねえの。アハハ、、。」

後序

傾城傾國は唐人の付けたる名にして、白拍子ながれの女は我が朝のやはらぎなるべし。昔より品類あまたかぞふるにいとまなからん。國々の名目當世の洒落、柄杓干瓢白人巾著のたぐひ、大むね一種より出でて、位階の高下は金銀の相當なるべし。たつとからずして救撰に許され、貴人のかたはらに侍るゆるにや、ちと子細過ぎて多くはふるみに落ちたり。爰に天竺老人のいへる如く、遊君有つて終に人の魂をとらかすいきはりも見えず、まして歌よむほどの戀にてもなし。たゞ物くひ月落ち烏啼くの吟も、此の君にあはぬうらみをのべ、江口の泊りに宿かさぬ君もなくなりて、今はたゞの所にはなりぬ。伊勢路の彩色はあかめがちにて、大津草津は少しうすかるべし。冬枯れのまばらなる頃はいつとなくよわり果てて、鼻の下の煤氣もさむく、木綿所の小車の音もさびしくくれて、水風呂のほかけに足袋さすわざも侘し。片田舎は法度きびしく、表向きはつとめせず。されど哀れなるかたには心ひかる、ならひ、夜更けてあるじしづまりぬればぬけいで、しのびやかに書院牀の小障子あけて、神のいがきもはゞかりなくて大股に打越し、終に一夜の枕を並ぶ。出替りは年の暮を定め、給分の加増は赤まへだれをこぎる。物皆終りあれば、古筵も鳶にはなりけり、此のものの行方何にかならん。

昔は普賢ふけんほさつにもなりたる先例ためしもあれど、今は少しの違ちがひありて、果はては駕籠かごかきの妻つまになり、瘦やせ子こ産うみ捨て生涯しやうがいを終はる。未來みらいとても覺束おぼつかなし。八萬地獄はつまんぢごくあれば素人しろうとの地獄ぢごくあるをきくも、たゞ一生いっせいの福ふくひをいのる。諺ことわざにいへる、運うんは天てんにあり牡丹餅ぼたんもちは棚たなにあり、まんぢうは船ふねにありといふ。

嵩す 天てん 坊ぼう 誌し

自序

むかしく其の昔、祖父ぢいは山やまへしばかりに、娘むすめは川がはへ洗濯せんたくに、其の娘のほた餅ほたもちを、萩の花はぎのはなと聞き違ちがへ、美うつくしからうと思おもひしやら、久米くみの仙人せんじん目をまはし、すんでんころり山椒味さんせうみ噲せ、からき命いのちを漸だうと息吹いきふき返し、娘も共に雲くもに打乗うちまり消え失うせけり。それ故ゆゑ末世まごころに行方ゆきかたしれぬ道中だうちゆうの竹輿たけこかきを、雲介くもすけとは名なづけたり。叔祖父ぢいぢいは山より立ち歸かへり、おらが娘が飛んだとんでくと立ち騒さわぐを、近在きんざい近郷きんかう聞き傳つたへ、飛んだ話とんでをお聞きだか、飛んだ事ことだくと、だんくといひ傳つたへる、是れ飛んだことことの始まりく。

戊の九月

風來山人誌

飛んだ噂の評

我も亦徒然なる儘に、日ぐらし硯にむかひて、心にうつり行くよしなし事を、そこはかたなく書きつくと、は謙の皮、折角ない智慧の底を叩いて工夫し出した金唐革も、度々の雨天に差間へ、隙あれども錢なければ、せう事なしの別荘に、風雅でもなく洒落でもなく、浪人の侘び住居、喰はず貧樂のみなれども、主人が欲しけりや飯粒を二百石か三百石に負けてやれば、何時でも出来ると思へば苦にもならず、二朱か一步工面すりや、四海皆女房なりと悟れば寐覚めも寂しからずとはいへ、一人できよろり、關々たる雌鳩は三股の洲にあり、窈窕たる妓女は中洲にも好き速ありと口ずさみたるをりしも、表の方に人聲して、飛んだ事だ、市川の團十郎色事の大評判、又彼の後家も後家でござる、惚れるにも程が有る、ほれて惚れてほれぬいた、飛んだことだ、と追ひくの賣り聲は、例のたはひもなき事ならんと、つぶやき居たる處へ、或人來りて曰く、「世間一枚飛んだ噂は、市川團十郎或夜後家に喰らひ込み、段々ともめ出して、既に市川の苗字を削られ、芝居も構はるべき程の事なり。ああ慎むべきは色事なり。」と吐息ついでの話聞いて、予笑うて問うて曰く、「市川團十郎とは何人なる

や。」彼の人腹を立てて曰く、「知れたこと役者なり。役者も役者による物なり、元祖團十郎一天下に名を揚げてより、初めの栢筵後の海老藏、今の團十郎に至るまで、都鄙遠近三歳の小兒も知り、親玉といへば團十郎と覺えたる、此の道の名家なるを、此の度の不埒故、數代の名家に疵を附け、市川の苗字を穢し、世上の口の端に掛る事、言語道斷の事なり。扱彼の後家といへるも、さのみ美人の聞えもなく、いか物喰ひの噂とりく、江戸中の物笑ひ。」と、眞黒に成つての話。予又笑うて曰く、「扱々先程飛んだ事の讀賣り、其の譯の分り兼ね、今亦飛んだ事のお物語、初めはほんに飛んだことかと思ひしが、能く話承れば、これ程飛ばぬ事はなし。夫れ役者の身の上は、貴賤上下の最賤を請け、諸人愛敬を第一とするなり。わけて立役ぬれ事師、女に最賤せらるれば、棧敷の入りが多いとて、給金も上るなり。或は女の櫛笄手拭浴衣煙草入に、最賤の紋を付けること、これ等は不届千萬なれども、付けさせる親や亭主がべら坊といふ物にて、役者の方に科はなし。また奥勤めの女中など、傳を求め縁にたよりて、扇楊枝差に役者の手跡歌發句を書いて貰うて、是れを尊ぶこと祖師の御筆定家の色紙よりも勝れりとす。それには千差萬別蓼くふ蟲も好きくと、おのれくが最賤々々、或は西の下棧敷、通りながらの捨詞、それから熱に浮かされては種々様々の夢を見る。中にも後家の明き重箱、借人の仕合貸人の歡び、されば奴が土手店で買つた鞆には事替り、さりととは能く仕た細工にて、

どれにもしつくり相生の、松茸賣とは是れならん。こちらの後家も素人なれば、よい野鴨の類に成つて、さのみ目にも立たねども、名高い役者の後家ゆゑに、大そうなる評判すれど、若しも彼の團十郎代々の儒者ならば、相手の後家に貞女兩夫にまみえずの女の道を破らせ、其の身も定まれる妻の外に他の女を犯し、江戸中の口の端にかゝる不埒を仕出して、言語道斷ともいふべけれ。相手も役者の後家なれば、たとへ殿御に別れても、又の夫をまうけなよ、主ある女の不義同然といふ事は、芝居で聞いても耳へは入らず。どうで只是居ぬ者なれば、團十郎がせしめてもせしめいでも亦同じことなり。扱又器量のよし悪しは、天此の人を生ずれば、不男でも悪女でも餘りて打ちやつたためしもなく、それ相應に片付く物にて、人々の物好き次第、鼻のひくいが鬢と見え、毛深いが天鵝絨の手さはりに覺えるは、外より少しも構はぬことなり。不器量な女と色事したを笑ふなら、美人を女房に持つた者へは誤り證文を書かねばならず。此方に一切喰ふ氣がなけりや、人の女房と枯木の枝ぶり、よからうが悪からうが、してやんしてどうしようかと、やつさもつさペンペン、いらぬおせわのかば焼なり。扱々飛ばぬことなるを、飛んだ事だくと江戸中の沙汰に成るは、大そう過ぎた比喩なれど、君子の過ちは月日の蝕のごとし。過つ時は人は是れをやるのはしくれにて、此の道の名家ゆゑ、少しのことも仰山に、飛んだことといはれるは、江戸生拔きの名代の家柄、當團十郎に至りても株を落さず、江戸

中の最良が多き故なりと、我は却つて頼もしく思ふ。」といへば、彼の人大いに腹を立て、「後家と契りて斯く取沙汰に及ぶことを、無體に理を付け取りなしをいふ人は、其の身にも後闇き下心が有る故なり。」と、以ての外の腹立。其の時詞を和けて教へて曰く、「小善なりとて捨つべからず、小悪なりとてなすべからず。是れは一通り知れたことにて、寝ても起きても飯と汁と香の物許り食つて居れば、病氣も出ず勘定にもよけれども、うまい物のほしくなるは、お定まりの人欲にて、百病は口より入り、諸事の災ひ彼所より起る。是れも親父の呼んでくれた、女房ばかりかじつて居れば、黴瘡もかかず錢も入らず、結構なことなれども、我も人もさうはつゝかず、踏みはづしは有る物なれども、同じ様な踏みはづしでも、することとせぬこと有り。此處が分らねば、必ず災ひに逢ふ物なり。我が門人何某が、古郷へ歸る餞別に送りたる一書有り。」とて、取り出して見せにける。

門人何某に示す

予若年の時漢書を讀み、高祖關中に入つて秦の苛法を去り、法三章を立つ。我も自ら法三章に約して血氣の禁めとす。盗み博奕密夫なり。此の三つの悪しきことは小兒も知りたる事なれども、我知らずおかすこと有るなり。常に心を禁むべし。

大石内藏介も、遊里に在りては面白きこと、世の風流の士とさのみ替ることなし。只敵を討つことを忘れざるなり。主親の敵のみ敵と思ふべからず、人々志す處家業藝術皆敵を持ちたり。討たずんば有るべからずと、行住座臥にこれを思へば、あちらの物よりこちらの稱鍾が重き故、面白きことになつまず、思ふ敵を討つと知るべし。早く其の本にかへれ。

興に乗じて酒を呑むとも、酒に乗じて興を呑むことなかれ。

友人何某大いに家計を失して、來つて我に談ずること有り。或人傍に在つて問うて曰く、「汝が首有りや。」友人曰く、「有り。」予が曰く、「首あらば何の憂ふる事かあらん。」と、大いに笑うて去る。これを聞いて論實に過ぎたりといふ人有り。予答へて曰く、「大丈夫事をなすに、時に臨んで狐疑猶豫すべからず。然れども其の事固より善惡有り、只々遠きを慮つて首の落ちざる用心すべし。幸ひにしてまぬかる、は道にあらず。人々心に問へば、首のぶらつくこと多かるべし。孟子の國に入つて大禁を問ふと、首の用心と見えたり。」と、諷にしるして禁めの一助とす。

右は善の善たる教へにはあらねども、いかなる扁柏の上材木でも、初手から鉋は掛けられず。先づ手斧にて荒削り、盗み博奕密夫の朽りさへ入らざれば、いつでも鉋は掛るなり。彼の團十郎が爲人、家業の敵も討ちおほせ、書籍を集め歌誹諧を樂しむとし、是れまであしき沙汰もなく、木場に有つての親父分、其の癖年は若けれども、闇夜に放す鐵砲汁、當ると死ぬる色事ならず。いはばぶぐもどき

を食つての食傷、明家で棒を振つた許り、誰に當り障りもなければ、天竺まで持ち出しても彼の首の氣遣ひなし。隠す／＼と思へども、天道といふ目の玉が、不斷上から見てござれば、首の有る人間と首のない人間は、誰が見ても知れるなり。かういふ心に成つて居れば、與風うまい首尾が有つて、人の女房の手を握る、其の時はモウ首筋に墨打をされたと思へば、こそばく成つて止めるなり。團十郎もいか程に氣丈でも元氣でも、首がなければ狎ころがうんこ踏んだ様な顔をして、だまつて居ねばならねども、首が有る故舞臺での口上も男らしく、さりとて氣象が面白いと、江戸中の諸見物、見増の絞所、己も神田の最貞組、悪くぬかすたうへんほくは、どいつでも相手になる。あゝつがもねエ。時に安永七の年、飛んだ噂と菊月上旬、風來山人清住町の別荘に、獨りきほうて是れを評す。

序

不時に吹くを天狗風といひ、當なく打つを天狗磔と呼ぶ。天狗頼母子、天狗誹諧等、みなあてじまひより號けしなり。予が拾ひ得たる異骨を、天狗の髑髏といひそめしも此の類なるらん歟。しかるを風來先生筆を採りてより、普く世上に隠れなく、見ん事をねがふ人多し。我も亦これを見せて、錢を取るべき工みもなく、只持ちあるき隙をつひやせば、諸共によき見せものなり。

人の目をくらまさんにもあらばこそもとより山の天狗でもなしと口ずさみて、一座の笑ひ種としけるを、今書林のもとめに應じて寫しあたへぬ。

大 場 豊 水 誌

序

我が風來先生、戯れに筆を採り、多くの小説世に行はれてより、近世開板の俗、文名をかすり文意を贗せ、或は直に風來山人と記すもあり。是れ皆書林智慧もなくて錢を欲しがり、謾に先生の名を騙ること、言語道斷不届千萬なり。まだしも評判茶臼藝は、寐惚先生の作にして、筆勢頗る相似たれども、つくれる花の匂ひなきが如し。其餘紫の朱を奪ひ、莠の苗を紊る而已ならず、炭團を名玉と欺き、夜鷹を晝三と僞る者少なからず。今より後堅く制して可ならんといへば、先生笑つて曰く、我が飯を喰うて人の聲色を遣ふも、皆人々の物好きにて、盲萬人目明三人、賣れるも本屋の渡世なれば強ひて咎むるに及ばずとて、其の儘に打ちやり置きぬ。頃日書肆清風堂大場氏の方より、天狗髑髏鑑定縁起を得て櫻木に鏤む。是れぞ真正銘の風來先生の作なり。善いと悪いはお手にとりて御覽じやれ。

戲 蝶 謹 誌

天狗髑髏鑑定縁起

明和七ツのとし菊月末の四日、門人來りて藥物の眞僞を論ず。折ふし扉を叩く者は大場豊水なり。一つの異物を携へ來りて曰く、「昨夜天狗を夢む。今朝夢さめて思ふに、けふは二十四日にて、愛宕の縁日なればとて、芝の愛宕に詣でけるに、門前櫻川と號する小流の中に怪しき物あり。拾ひ上げて泥土の穢れを洗ひ去れば、しかくの物なり。」とて筐を開いて取り出し、「けふ此の品を得て歸るさの道にて、見る者皆天狗の髑髏なりとて市をなせども、固より俗人の臆見、證とするに足らず。希はくは先生眞僞を辨ぜよ。」と。予諾して門人に告げて、各其の志をいはしむ。一人が曰く、「これ大鳥の頭なり、阿蘭陀のほうごる、すとろいすならん。」と。又一人が曰く、「蠻夷の大鳥たりとも斯くまで大きには有るべからず、これ大魚の頭の骨ならん。」と。反覆上下の論、異説區々にして衆議一決せず。予曰く、「これ天狗のしやれかうべなり。」門人驚いて曰く、「夫れ倭俗の天狗と稱するものは、全く魍魎を指すなれども、定まれる形あるべうもあらず。然るに今世に天狗を畫くに、鼻高きは心の高慢鼻にあらはるゝを標して大天狗の容とし、又嘴の長きは駄口を利きて差出たがる、木の葉天狗溝飛

び天狗の形状なり。翅ありて草鞋をはくは、飛びもしつ歩行きもする自由に象る。杉の梢に住居すれども、店賃を出さざるは横著者なり。羽扇は物入りを厭ふ吝嗇に譬す。これ皆畫工の思ひ付きにて、實にかくの如き物あるにはあらず。聖人も怪力亂神を語らずとこそ宣へ。今これを天狗の鬪骸なりとは、我々を欺き給ふや。予曰く、「諸子の疑ひその理なきにあらず。さりながら我が微意を悟らずんば、いざさらば語り聞かさん。古人の曰く、薬を賣るものは两眼、薬を用る者は一眼、薬を服する者は無眼とは、とつと昔の譬へ、今時の醫者といふは、武士の子なれば懦弱者、百姓なれば疎懶者、町人なれば商ひを爲得ず、職人なれば無器用ものにて、糊口を爲兼ねるもの、醫者にでもならうといふ。これを號けて、でも醫者として、頭ぐるりの長羽織、見えと座なり許りにて、薬の事は陳皮も知らず、長屋も露路も踏むもすべるも、そこらだらけが醫者だらけ、藥種屋も盲、醫者もめくら、病家は猶盲故、臭橘を枳殼とし、鼠麴草を芫花とし、鯨の牙をうにこおるとし、氣蟄を麩蟲とし、翻白菜を柴胡とこゝろ得、廣東人參を人參と思ふ。其の外千變萬化の大まちがひ、されども浮世は盲千人、はくらんの薬ははくらん病みが買ふ習ひなれば、是れを賣るもの家藏を建て、これを用るもの四枚肩に乗り、これを呑む者往生の素懷をとけながら、恨みもせねば氣の毒なとも思はず。嗚呼悲しきかな文盲なるかな。予これを憂へて藥物の眞偽を正し、世上の醫者の目を明けんとて千辛萬苦すれば、

うぬらが心に引當てて山などとの取沙汰、智者は水を樂み、仁者は山を樂む。后稷は農を教へ、禹王は水を治む。過ぎたるを省き足らざるを補ふは聖人の功なり。山のやまなる山の芋、鰻鱺とならで朽ち果てなば、薯蕷とも甘藷とも、旨い奴等が口の端に、かかる浮世に産まれ来て、牛の糞やら胡麻味噌やら、やみらみつちやの流れ渡り、海參の尻やら頭やら、蟹の豎やら横道やら、にうががにうへとちりあべこべ、錢ある者は利口に見え、出る杖は打たる、習ひ、天狗のあたまたまの眞偽を論じ、時を移せば腹がへり、日が重なれば店賃がふえ、月が延びれば質が流る。儒者は本田あたまたまの通り者をとらへて堯舜の民たらしめんとし、賢女兩夫に見えずと、女郎屋の二階で講釋をするは、蠮螋が蜈蚣をとらへて、我に似よといふがごとし。動と止との文字は合うても、馬めが合點いたさねば、世話やぐがたはけながらも、腹へはひる薬は人の命の存亡に預れば、聞かぬまでも赤目引きはり、某時珍になりかはり、一問答せねばならねど、呑みもせず傳けもせず、目を歡ばすばかりにて、毒にもならず薬にも、何のお茶とうにもならざれば、諸人自ら甘んじて天狗というて嬉しがらば、其の波を揚げその醜をすゝりて、天狗にするが卓見なり。そのうへ縫目の蚤虱さへ悉くは見盡されず。まして天地の廣大なる、萬物の際限なき、一人の目を以て極め難ければ、若しは繪に畫く天狗殿がお出でやるまいものにもあらず。有つたとて天狗ぐらるにさらはれる男でなければ、微塵こはくもなんともの

く、無いとて小遣錢の切れた程に不自由にも思はねば、只造化といへる細工人のお心持次第なり。若し又天狗が何故死んだと根問ひする人の有るならば、餘り高慢が過ぎて、科なき者を悪くいうたり、人を食つたり抓んだりがかうじた故、天狗の親玉太郎坊殿怒りをなし、木の葉天狗を引捕へ、首ねぢ切つて捨てたるを、豊水が見つけて拾ひ上げしものならん。これ皆餘所のことならず、今時世上に目がなければ、おとなしう爪をかくせば鳶かと思つて、たはけどもは茶にしたり馬鹿にする故、謙退辭讓は間に合はず、高慢いはぬは損なれども、又其の高慢が過ぎる時は、天道からがたまをへさへ、必ず憂き目にあふものなり。人々慎み給へかし。」といへば、皆尤もとうなづきぬ。

天狗さへ野夫ではないとしやれかうべ極めてやるが通りものなり

風來山人誌

跋

天狗髑髏鑑定縁起といへるは、一とせ予が戯れに書きちらし、大場豊水に與へたるを、此の頃書林開板しけるを、或人見て、予に謂つて曰く、嗚呼子が人を譏ること甚しいかな。彼の文中醫者と藥店ともに旨とし、陳皮も知らずとは何事ぞや。陳皮は蜜柑の皮にして、三歳の小兒も能く是れを知る。まして醫者藥屋をや。此の書行はれざる以前、此の文を削り去りて、世の嘲りを免るべしと。予答へて曰く、陳皮の事、神農本草經には橘柚と有り、後世二物自ら別なり。或は方書に橘皮と記し、陳皮青皮の分ちあり。然るを香川氏が藥撰に讒言をついてより、古方家と稱する文盲醫者ども、陳皮を捨てて青皮而已をつかふ。陰陽造化の理に暗く、藥を知らずして療治するは、坐行にて轎夫と成り、達磨が串童を勤むるに似たり。蜜柑の皮より腹の皮、日頃笑止千萬と思ふ息が鼻へぬけ、戯れまじりに書きちらせしなり。こけおどしの大言にあらず。習ひたくば教へてやるべし。若し此の惡たいを無念と思はば、藥屋にもせよ醫者にもせよ、遠い藥はさて置いて、陳皮一味のことなりとも、わかるといふ人有るならば、來りて我と議論せよ。所は神田大和町の代地、一月三分の貸店に、貧乏に暮せども本名も隠れなし。時に安永五ツの年、尻真赤いな申の極月、借金乞にいひ譯の暇、風來山人識。

里のをだまき評自序

莊子が寓言、紫式部が筆ささみ、司馬相如が子虛烏有、弘法大師の兔角龜毛、去りとては久しい物なり。予も亦彼の虚言にならひ、氣のしれぬ麻布先生、古遊花景の人物を設へて、訛八百を書きちらす。針を棒にいひなし、火を以て水とするは、我が持ちまへの滑稽にして、文の餘情の譎言なり。或は所々の地名などは、人の耳馴れたるに便りて、直に其の名を出せども、もとより作り物語なれば、實に此の事の有るにはあらず、見る人怪しむべからず。安本元年手狐のはつ秋、有頂天皇九代の後胤、風來散人、居續けの風呂揚り、宿酒の夢中に筆を採る。

吉原里のをだ巻評

賢を賢として色に易へよと、唐の親父がむだをいひ、外面如菩薩内心如夜叉と、天竺のすつとの皮が思ひ入れにはり込みても、面白いといふ事を呑み込んでゐる凡夫ども、氣短にいうてはいけぬと、闇雲に踏み破りて、あしびきの山の手に一ツの艸庵を構へ、自ら麻布先生と號する人あり。されば賤しき諺に、牛は牛連れ馬は馬連れ、同氣相求め同類相集まるの習ひにて、古遊散人といへるしれもの、残暑の見舞に來りし折節、麻布先生の門人花景といへる當世男來掛りて、四方山の物語、三人寄れば文殊の智慧はどこへやら、そろく〜と理に入つて、例の遊びの魂膽話。花景しかつべらしく懷中より小冊を取り出し、「先生達も御ぞんじ有るまじ、これこそ吉原細見の一枚摺、里の緒環といふものなり。抑此の一卷といつば、土橋中丁樓下の腐艸化して螢と成り、今五丁町に光を争ひ、全盛いはん方なし。京の娼妓に江戸のはりと、それは昔の喩草、今ぞ吉原深川をもみませば、兩の手に梅櫻、遊びのきつする喜見城、此の上の有るべきや。」と、我ひとり呑み込んで力み返つて味噌を上げれば、古遊散人熟聞いて、彼のをだまきの一枚摺、白い所も黒い所も一面に涙をばらく〜とこほし、山の

手から吉原まで届きさうなる吐息をついて申しけるは、嗚呼笑止なることを承るものかな。我が日本は小國なりといへども、五穀豊饒に金銀多く、萬の物に事を缺かず。繁華の地甚だおほし。京に島原大阪に新町長崎の丸山をはじめ、諸國の色里かぞへ盡しがたく、各土地の風流有りて、何れも面白からざるはなし。有るが中にもお江戸の吉原、一とて二のなきことは人々の知るところなれば、今更にいふがくだなり。世上にて目に立つ器量も、此の里の女と競べては、思ひの外に見おとすなり。近き證據は、山下にてとんだ茶釜と聞えしは、一頃の大評判、よく聞けば吉原にて何とかいへる女郎なりしが、吉原に居た内は本の十把一からけ、さして目に立つこともなし。郭外へ押し出せば、掃溜の鶴砂の中の金、飛んだ茶釜の掘り出しものとは評判に及びしなり。斯く吉原の女郎の勝れて宜しう見ゆることは、幼少よりの育てがら、立居振舞髪容、第一氣取を大切とし、禿の時より姉女郎の仕込み方あることなり。就中其の古、太夫格子の上品に至りては、琴三絃はいふに及ばず、詩歌誹諧香茶の湯、碁雙六騷方、何れの道にも闇からず。諸藝を知つて知つた顔せず、見識有つてべた付かず。上方の女郎などの真似てもならぬが吉原なり。今のさんちや付け廻しは、以前の太夫格子に劣らず、意氣地あり風雅あり、各たしなみの藝術あり。これ昔の風儀残り、古川に水絶えず、假令菩薩の影向あり、天人が天降つても、負けぬが此の地の女郎なり。岡場所の賣女ども、奴となりて來りなば、や

はりかへ玉同然に、一月一貫八百づ、で預け捨てにして置くか、さんとか松とか名をかへて、鑿妾傳婢にして使ふか、いつそ鐵砲店へでも追つ下し、兎許の遊所と岡場所は雲泥萬里の違ひある勢ひを見せてこそ、吉原ともいふべけれ。いかに末世に成ればとて、岡場所の土娼共に大造なる名を付けて、二人禿座敷持ち、歩行きもしつけぬ道中、其の癖稽古に骨を折り、あひるの足どり南絲傀、中の町の人立に氣を登して眩轉せば、跡のいざこざ面倒なり。又下地から吉原に居る女郎もふがひなし。親方は金さへとれば、幽靈をとらまへても商ひさせ度き心なりとも、イエわつち等は岡場所の土妓衆と傍輩には得なりいせんとつづけばれば、此の相談はじやみる筈なり。吉原中に智慧がなく、女郎に氣がなき故、斯くの如くに成り行きて、剩へ自慢さうに細見までを拵へて世上へ恥をさらすなり。岡場所の客までを引付けうといふ氣をやめて、客が來いでも吉原ぢやと、古流の角を崩さぬ様に、じつと守つて居る時は、奥ゆかしく見ゆる故、自ら繁昌するなり。移り易きは人心、上方にても、一頃は祇園町島の内北の新地が繁昌し、新町島原は不景氣なりしが、近頃は又そろ／＼と餅は餅匠へ復るなり。思ひつきにて流行ることは、一花許りでさめ易し。當年の俄なども、初めは手がるくてをかしかりしが、後は段々おもくれて、役者の聲色門をどり、何やらに似て氣の毒なりと、心ある人々の評判も有りしぞかし。病に應かぬまや藥は、るやひを抜き獨樂をまはし、いろ／＼にしやべらねば賣れぬ

故にもがけども、眞まことに病まに應こたく薬くすりはだまつて居ても買かひに來きるなり。料理りょうりで落おちを取とらうとしたり、さま／＼の思おもひ付ひは、まや薬くすりを賣うる同どう然ぜんで、女郎ぢやうらうの恥ちと心得こころえべし。又また藝ぎ者しや幫た間まも、岡おか場所ばしよにまぎれぬやうにと、不ふ斷だんの心得こころえ第一だいいちなり。かくいへばとて、必ずしも大きな面おもてはせぬがよし。米こめが安やすうても江戸えどは江戸えどなり。買かひて來きぬは地ち合あが悪いわるいか、染そめ様やうが氣きに入いらぬか、模も樣やうが當あ世よにむかぬかと、代しろ物ものに氣きは付つけず、あぢな所に骨ほねを折をり、今いまの樣やうに段だん々たんと思おもひ付ひがかうじたら、中なかの町まちに男おとこ倡まじや茶ちや屋や、大だい門もん口くちで夜よ鷹たかが引ひきとめ、大だいどぶに船ふねをつなぎ、船ふね饅まん頭づが出いようも知しれず。モウそろ／＼と此この節ふしは、岡おか場所ばしよが吉きち原げんか、吉きち原げんが岡おか場所ばしよか、我われがおれかおれが我われか、女め郎らうと賣う女めのつかみ賣うり、何なにでも擇えり取とり十九じゅう文ぶん、扱あ苦く々々しき事ことなり。」と、眉まゆをしかめて申まをしける。其そのの時とき花はな景けい煙えん管くわんを取とり直ただし、灰はい吹ふをくわち／＼と敲たたき、あざ笑あざわらつて曰いく、「古ふる遊ゆう子この論ろん高たかきに似にて甚ひどだ低ひし。されば古ふる歌うたにも、

植うゑて見みよ花はなの育そだたぬ里さともなし心こころからこそ身みは賤いやしけれ

おなじ天地てんちの間に生なずる人ひと間ま、國くにをわけ郡ぐんをわけ、村むらをわけ里さとをわけて、其そのの品しなを論ろんずるは僻ひがことなり。いかにも吉きち原げんは日本にっぽん第一だいいちの遊ゆう所しよにて、女めの姿すがた勝かれたりと雖なも、百ひゃく人が百ひゃく人にんが千せん人にんながら能よいと定さだまりたるにも非あらず。細こ見み嗚な呼わお江戸えどの序じよに有ある如ごとく、成なは骨ほね太ふ毛もむくじやれ、猪ぶ首くび獅し子こ鼻はな柵たつ尻しりの類たぐひなきにしもあらず。吉きち原げんの女め郎らうなればとて、代しろ々々其そのの家いへ筋すぢ有あつて、女め郎らうが女め郎らうを産うむにもあらず、

腹はらの中なかから誂こしらへて拵こしらへさせるにもあらず。又また岡おか場所ばしよの女め郎らうとて、下くだり細こ工こうの出來でき合あひにもあらず。つまる所ところは親おや兄あに弟い榮え耀えう榮えい華わで賣うりもせず、爲しょう事じよなしの廻まわり足あし、吉きち原げんへ行き岡おか場所ばしよへ行くも、皆みなそれ／＼の因いん縁えんづく、能よきも有あり悪わるいもあり、江え戸こ前まへうなぎと旅たびうなぎ程ほど旨うま味あじも違ちがはず、下くだり酒さけと地ち酒さけほど水みづの違ちがひもあらずれば、吉きち原げんにも絲へちま瓜うり有あり、岡おか場所ばしよにも美うつく女め人にんあり。又また幼せう少せうからの育そだてがら、立た居ゐふるまひ髪かみ容かたち、第一だいいち氣きどりを大だい切きと、此この詞ことば亦また非あらなり。習なひ性せいと成なるといへば、鉢はち木のきの梅うめうけぢの松まつ、仕し込こみにもよるべけれど、堯たうの子こ丹たん朱しゆ不ふ肖せうなり。舜しんの子こも亦また不ふ肖せうなり。三さん年ねん磨みがいても無む患わづ子こは黒くろく、十じゅう年ねん煮にても石いしは硬かたし。又また龍りゆう文ぶん鳳ほう姿さとて、生なまれながらによきものあり。八はち丈ぢやう島しまで八はち端たんがけを織おり、王わう子しから菊きく之の丞しやうが出いたれば、土つち橋はし中ちゆう丁ていは扱あ置ちき、根ね津つ音おん羽う菜さい菴あん圃ぼにも、楊やう貴き妃ひ西せい施しが有あらうも知しれず。扱あ又また當あ世よに疎そき族ぞく、深ふか川がわの風かぜ流ながる事ことを知らず、只ただ一口ひとくちに岡おか場所ばしよとのみ覺おぼえたるは、傍かたはらいたき事こと共ともなり。吉きち原げんの地ちは北きた陰かげにかたより、一方ひとかたにして道みち遠とほく、くはだてざれば行くことならず。深ふか川がわの地ちは陽やう氣きにして偏ひとらず、船ふねの通とほひ路ぢ自由じゆうにて、牡か蠣かき店たなの牡か蠣かき、文ぶん蛤がく町まちの文ぶん蛤がく、鰻うなぎは黒くろ江え町まちに名な高たかく、鴈かり金かね燒やきは萬まん年ねん町まちに隠かくれなし。竹たけ子この調てう味み、升しやう屋やが洒しや落れ、二に軒けん茶ちや屋や二に軒けんに限かぎらずして榮さかえ、鹽しほ濱はま鹽しほを燒やかざれども賑にぎはふ、角すまひ力ちからあり開あ帳ちやうあり、山やま開あきあり夜よ宮みやあり、木き場ばの岡おか釣つりには太たい公こう望ぼうも歩あみを運あび、三さん十三じゅう三さん間ま堂だうの大だい矢や數すうには養やう由ゆう基きも汗あせを流ながす。新あらた地ちの名ないつとなく古ふる石いし場ばの人ひと自おのら和やはらき、おひ／＼客きやくの入い船せん

町、遊びの跡を直助屋敷、表樓裏樓、裾繼やぐら佃新地。中にも土橋中丁には全盛の君多く、川には船後を組み、陸には轎夫の屯をなす。送りむかひの提灯は宇治の螢の飛びかふが如く、茶屋に持ち込む寝衣は鳴門の濤の寄するがごとし。間毎の座敷はれやかにして、山海の美味刻めを正し、藝者の調子尋常に勝り、騒ぎの小歌天下に類なし。世上の女の羽織著ると、サツサオセノの浮き拍子も、皆この里を始めとす。又女郎の氣象をいはば、夜店といへる退屈なく、或は裏の三廻目のと、わけ隔てた仕打なく、新造袖とめ座敷の普請、箆笥長持夜具諸道具、抱への仕著せ茶屋船宿、牽頭末社の付届、紋日の数々暮のやりくり、無心工面の責めもなく、同じ勤めといひながら、内證の苦しみ薄く、自然と心のびやかにて、氣象に微塵もいやみなし。今吉原へ押出しても、餘り跡へは下らぬなり。是れでも岡場所と賤しむや。」と、顔を赤めて論じければ、麻布先生莞爾と打笑みて曰く、「御兩所の争ひ最前より承る、各一理なきにしもあらず。さりながら井の内の蛙大海を知らず、夏の蟲氷を笑ふの論なり。夫れ古より著しきは、江口神崎野上の里、大磯化粧坂の類、其の名残りて今はなし。實に治まれる御代の御恵み、繁華の地は都鄙を限らず、色里おほきその中に、押出したる免許の地あり、擬へ者あり、かくしものあり、地者有り、はんかあり。其の品々をいはば、傾城湯女白人踊子、比丘尼飯盛綿つみ、夜鷹蹴轉し舟饅頭の類は小歌にも出でたれば人々の知るところなり。近年提籃と稱す

るは、持ちはこびの手軽きよりいひはじめ、山猫と名づけしは、化けて出るといふことならん。又地獄とあだ名せしは、其の初め清左衛門となんいへるもの、此の事を企てけるを、箱根の清左衛門地獄にもとづきて、仲間の者の合詞に、地獄々々といひしより、今は其の名とは成りけらし。物の名も所によりて易るなり。浪華にては總嫁といひ、伊勢の鳥羽阿濃津にては走りがねと呼び、古市にてはあんにやといふ。伊豆の下田にせんびりあり、松崎にくねんほあり、丹後にしやらかう、越後には冷水浮身あをのごあり、長門の萩にかごまはし、下ノ關にて手拍とは、船を見掛けて手を叩くより號く。肥後にきぶし、長崎にはいはちあり、小女性有り、信州上田にべざいあり、松本に張箱あり、加賀に化鳥、名護屋にもか、出羽奥州に根餅とは、其の初めの女共蕨餅を賣りける故、其の名とは成りけるなり。津輕にてけんほといひ、南部にておしやらくと呼び、松前にて藥鐘といふは、尻が早いといふ事なり。尊きと賤しきと善いと悪いの差別はあれども、情を賣るは一ツにて、極意に至り至りては、粹もなく野夫もなく、無中に有あり有中に無あり、尊きと美しきが面白きにも限らず、賤しきと醜きが面白からざるにもあらず、それ相應の樂しみにて、撮干魚は石菖鉢をめぐり、鯨は大海をおよぐ。牡丹も花なり野菊も花なり、夜鷹船まんちうを樂しむ者は、鼻の落ちるをこととせせず、岡場所に遊ぶ人は、岡場所を最上と心得、吉原よりも勝れりと思ふ。花景丈の味噌を上ぐる、女の羽織は世の風

俗を亂り、跡先しらすの浮き拍子は、遊びに風情ある事を知らず、是れ岡場所の惡風儀なり。又内證の苦しみ薄く、自然と心のびやかにて、氣象に微塵もいやみなしとは、鮑魚の肆、臭き事を覺えず、深川に遊んで深川の穴を知らず。夫れ彼の地の女郎は鞍替へ者あり、つき出しあり、甚しきにいたりては、人の女房を賣るもあり。或は女郎の身で新子をかへ、我が身を買うてめぐりを打ち、掛金百落しの下卑有つて、いけもせぬ癖人を茶にし、客の前にて囁き合ひ、一字はさみであて付れたり、歌の唱歌の耳こすり、亭主の身替りのれん替へ、前の家名は風呂敷に残り、大工はしがく所に工夫をこらし、一二三王玉と名付く。流れ渡りの岡場所と、萬代不易の吉原をくらべ物にはなり難し。又吉原の裏三廻は扱置き、詞つきからもの日の作法、仕著せ衣裳の模様まで、古風を少しも易へざるが、此の地の尊き所なれども、未熟の人の知る所にあらず。又古遊子の議論尤もなることながら、これもさりとはいらざる世話なり。いま吉原の女郎少なしといへども、三千人に餘れり。岡場所より來れるは多しといへども、五十人に過ぎず。孟子に所謂、諸の楚人これを嚇しうせば、多勢に無勢叶ひ申さず。岡場所の惡風儀もいつとなく徐々と吉原風に變ずるなり、必ずしも厭ふべからず。山は塊を辭せず海は細き流れを辭せず。日の輝らすが如く鏡の映すが如く、廣大無邊の取り込み勝負、六十餘州の人所、千差萬別の物好き、粹は粹だけ面白がり、鈍漢は鈍漢程嬉しがる。萬兩も一夜に使ひ、百

疋で二度も行かれる、勝手次第の衆生濟度、廣いが吉原、つかへぬが吉原、花は三吉野女郎は吉原、他所の櫻を吉野へ植ゑても、即ち吉野の櫻なり。岡場所の私娼でも、吉原へ來りたれば直に吉原の娼妓なり。美しいと悪いは手に取つて御覽じやれ。」

甲午の初秋

風 來 山 人 書

跋

童謠どうたうに曰く、五尺體しやくからたが三尺解とけて、跡の二尺はちぎる様ような。謹つしんで按おさずるに、解とけるが如ごとくちぎるがごときもの、海參なまこに藁わらあり、人に人あり。或は新五左部いしべ金吉きんきちも、一度吉原の風に當あれば、其の柔なほかなること山屋の豆腐のごとし。我が風來先生嘗かつていへることあり、豆腐は軟やほかなるをいとはず、遊びは和わするを厭いとはず。しかはあれども、若し豆腐に膽水にがりを入れざれば、練酒ねりざけのごとく米糶水しろみづのごとく、遊びの節々ふしづに極きまりなければ、闇夜やみよに鐵砲てつぱうを放はなすに似たり。我に極きまりあれば、先の是非おのづか自ら明あけし。酒の失しつを知らざれば、酒を呑んで酒に呑まれ、遊所の是非わきまを辨わざれば、遊所に行つて前後を忘わすると。宜むべなるかな此この言こと。手前に一箇いっこの曲尺まがりかありて、能く人の長短ちやうたんを知り、今此このをだまきの評ひやうを著あらはす。彼の義士大星由良殿の敵かたきほどにはあらずとも、人皆願ねがひあり望のぞみあり。望のぞみは本もとなり、遊びは末すまなり。本を外にし末を内にすることなく、身の分限ぶんげんを知りて程々に遊びなば、一時いっときの榮華ちやうわに千年を延のぶるとやいはん。

安永三年甲午秋七月

門人 無名子誌

飛花落葉序

春の朝中あしたなかの町ちやうにちる花を見て、山屋豆腐やまやとうふの雪かと疑うひ、秋のゆふべ正燈寺しやうとうじの落葉おちばをわけて、淺茅あさぢが原の露はらをあはれむ。こゝにどこのか風來山人ふうらいさんじん、一文紙もんた鳶とびの絲いときれしより、かきおかれたる狂言綺語きやうげんきぎよ、讚佛さんぶつならぬ六部集ろくぶしふなど、すでに書林の櫻木さくらぎにほひて、茶屋ちややにことわる紙花かみはなのごとし。たゞ相對あひたいの紙かみ花は風前の塵ほことひとしく、根なし草ねなしくさの根ねに歸かへらず、廊下座敷らうかざしきの帚はきにはかれて、終つひに砂利場ざりばのすぎがへしとならんことを悲かなしみて、千早ちはやぶるかみ屑くづを、くれ竹くれたけのよくひろひあつめ、近ちかからんものは目に見みなんし、遠とほからんものは音ねにきく、耳搔寮みみかきろうの腰張こしはりの張り交まぜとはなしぬ。

てんつる天明みすぢの絲の長き春の日

四方山人

飛花落葉序

風來先生のかいやりたる戯れのくさくさ多かる中に、ありとは見えてさだかならず散りもてゆきしを、四方やま人のよもに求め、いそのかみ古ふんでは、きぎにかきあつめて、飛花落葉となづく。其の文は飛んだことの華やかにして、落ちの來る言の葉なれば、見る人無常を觀ぜずして只無性に感ず。遙かに察す風來の面目何ものかこれに過ぎん。固より觀と感と音相混じて、お慮ぐわいおかんだいのカン則ちかんのんさんのカンなれば、佛におどけの相通あり、髮に本田の大通あり、牛込にはえぬきの圓通ありて、かれたる板の櫻木に花咲かせ、よしてくれ竹のふしみやをして微笑せしむ。それは禪錄これは書六、所は下谷池のはた、黄泉の客の讚岐圓座に、換へしはちすの絲口の、尻も結ばぬ序幕の口上、飛花落葉のおことわり、左様にと云つてやみぬ。

天明卯のむ月はじめ

喜 三 二 識 す

序

四方山人、こゝに故人何がしが遺草を集めて専ら世上に售りつけんとす。されば現金阮宣が杖にぶらつく風來先生、百家にわたりし百の口は、きなかもぬけめのない人にて、波の文章たくみなるや、眞鍮錢の左氏司馬子長も、恐れをなして三舍を避くべし。けにや先生、一杯機嫌の咳唾は玉の杯となり、そこで着に千金の裘、一狐の洗鯉なり。そのいり酒に酔の過ぎたる、二三兄弟ひざぐみにて、おいらも一口のかうかと、あんときつ口さし出すにぞ。

あ げ ら 菅 江 題

序

悉是吾子は釋迦の世話やき、教而不倦は孔子の世話やき、拍子木をうつ神會の世話やき、耳に數珠ある後生の世話やき、口を酔くするおきな、腰をた、く姥、大小のたがひあれども、終に肝煎の名のがれず。風來子きたさのさぬきの志度浦より、めつほふこはいの玉をもち來り、匱にをさめてかくしたり。あらめやく、大根の切りほしと等しく、容奇家の總菜となりて、漸う百匁三文の價をまつ。其の紙袋のうらを見れば、憤激と自棄なひまぜの文章なり。風來子もまた吾が黨一人の世話焼なりしを、今は此の土の世話に厭きて、無何有の郷の講頭とやなられけん。その書き捨てもなつかしとて、四方山人の世話によつて、此の小冊とはなりけらし。

へづ、東作書

飛花落葉

江戸男色細見序

餅好き酒中の趣を知らず、上戸は又羊羹の旨きを憎む。寒暑晝夜はかはるくをなし、春の花秋の紅葉、何れをか捨ていづれをかとらん。男色女色の異なるも亦しからんか。吉原に細見あれば、堺町木挽町には四季折々の番附有つて、世の人普くありがたがれども、恨むらくは此の道の盛んなることとを知らざる愚癡無智の凡夫もあらんかと、巖眞の腕をさすりつ、みづから有頂天に登り夢中に筆を採りて、ところ斑の謔言を、そこはかたなく書き付くれば、馴染の名に至つてその顔ちらくとし、て目のあたりに出でたるは、ア、ラ不思議や生靈にあらずんば是れ親玉のかたまりならん。ヤイ餅好きの衆生ども、みだりに是れを笑ふことなかれ。ナント一番誤つてその粕を食ふに至らば、漸くにして酒中の趣を知らん。きのえ申葉月の比、水虎散人惡寒發熱中に書す。

はこいり 漱石香 はをしろくし口中
はみがき 漱石香 あしき勻ひをさる

二十袋分入 一箱代七十二文
つめかへ四十八文

口上

トウザイノ、抑私住所之儀、八方は八ツ棟作り、四方に四面の藏を建てんと存じ立ちたる甲斐もなく、段々の不仕合、商ひの損相つき、澀團扇にあふぎたてられ、跡へも先へも参りがたし。然る所ざる御方より、何ぞ元手のいらぬ商賣思ひ付くやうにと御引立て被下候、はみがきの儀、今時の皆様は能く御存じの上なれば、かくすは野夫の至りなり。其の穴を委しく尋ね奉れば、房州砂に勻ひを入れ、人々の思ひつきにて名を替へるばかりにて、元來下直の品にて御座候へども、畢竟袋を拵へ候の、板行をすり候の、あのものにて手間代に引け候。依之此の度箱入に仕り、世上の袋入の目方二十袋分一箱に入れ、御つかひ勝手よろしく、袋が落ちちり楊枝がよごれると申すやうな、へちまな事の無之様仕り、かさでせしめる積りにて、少しばかり利を取り下直に差上げ申し候。尤も藥方の儀、私は文盲怠才にてなんにも不存候へども、是れも去る御方より御差圖にて、第一に齒をしろくし口中をさわやかにし、あしき臭をさり熱をさまし、其の外しのゆくさつた、富士の山ほど功能有之由の藥方御傳へ被下候。應くかきかぬかの程、私は夢中にて、一向存じ不申候へども、高が齒をみがくが肝心にて、其の外の功能はきかずとも害にもならず。また傳へられた其の人も丸で馬鹿でもなく候へば、よもや悪しくはあるまいと存じ、教への通り藥種をえらみ、隨分念入れ調合仕り、ありやうは

錢がほしさのまゝ、早々賣出し申し候。御つかひ被遊候て、萬一不宜候はば、だいなし御打ちやり被遊候ても、高のしれたる御損、私方は塵つもつて山とやらにて大いに爲に相成り候。一度切りにて御求め不被下とも、御恨み可申上様は無御座候。若し又御意に入り、スハ能いはと御評判被遊被下候へば、皆様御最眞御取立にて段々繁昌仕り、表店へ罷り出で、金看板を輝かせ、今の難儀を昔語と御引立のほど、隅から隅までづらりつと奉希上候。其の爲の御斷り左様に、クワチクワチノノノ。

てつばう町うら店の住人

丑霜月日

川合惣助元無

本白銀町四丁目南がは是も同じくうら店にて

賣弘所 えばすや兵助

くわんおんのむかうろち口に安かんばんあり

出店は勿論無御座候、せり賣等一切出し不申候、折々私自身出申し候。

長枕褥合戦後序

孝弟忠信を口に稱し身に行ふ君子有りととも、當世是れを號して野夫といひ、武を知り國家を守る者を、人嘲りて新吾左といふ。又此の譏りをまぬかれんと思ふたはけは、ぬしと呼びわつちと稱へ、顔

は白きをいとはず脇指は細きをいとはず、今の浮世に交はらんもの、此の境を知らずんばあるべからずと、案じの鋼鐵棟へまはり、ま、坊が弟子と成つて斯くべら坊とは成りけり。しかれども又かかる中にも、おのづから孝弟忠信の意備はれるは我が筆力の妙なり。若し目王の明きたる人ありて、其の妙を知るに至らば、こいつ話せる奴なるべし。或は知らずして譏るもの有りとも、我々へちまの皮とも思はず。

申のはつ春

道行虱の妹背筋

悟道軒書
夫瓜本加久太夫直傳

戀すてふわが名はまだき立ち出づる、襟の縫目やはだ著のうら、なれし故郷をふり捨てて、何國を
あてと定めなく、おちて行く身は人のみか、虱の身にも戀のふち、深き妹背の二疋づれ、生まれ付き
たる數々の、あし手まとひのはかどらぬ、大椎峠天柱の原、風門が谷うちわたり、いとかうくたる
けんべきの、峨々たる峯をよそに見て、背筋海道とほくと、たどり出づるぞうざし。見上ぐれ
ば遙かのみねに生ひ茂る、木々の梢や烏羽玉の、夜晝わかぬ所にも、頭しらみはすむとかや。世上の
人のわる口に、花見虱と浮名立つ、身の楽しみもいつしかに、きのふはけふの瀬とかはる、あすやさ
つてやもえ出づる、くさのにそよぐ風さへも、もしや知死期のつかひかと、世をしのぶ身の一筋に、

千手の御手につくくと、杖とたのみし七九の里、四くわくわんおんを打越えて、鳥のそらねや帯の
關、十四十六初戀に、思ひ亂れし物心、血汐の酒のゑひまぎれ、縫ひめの絲のたまさかに、綻びそめ
しころび寝の、そのむつ言にいひかはし、取りかはしたる誓紙のからす、かはい男とだきしめて、た
とへ野の末山のおく、虎ふす野邊の足の毛や、爪の地ごくへ落つるとも、はなれはせぬといはしやん
した、その言の葉がしみ付いて、わたしが背の入れほくろ、苦勞する身のうき旅も、みんなわしから
おこつたこと、こらへてやいのとよりそへば、男もともに打ちしをれ、親のゆるさぬ不義いたづら、
襟の住居も叶はねば、かく落ちぶれし二人が中、心はやたけにはやれども、走らうにも飛ぼうにも、
のみならぬ身の悲しさと、そら涙にくれけるが、ハア、まようたり誤つたり、實に數ならぬ此の身
にも、先祖の譽に王猛が、傍若無人と名をつたへ、不思議を殘す節穴に、恨みをむくいしためしもあ
り。又水中にうかんで、磁石にかはるの徳あれば、ゆびにひねられ灰吹の、底のもくつとしづむと
も、戸に響有明の、つきぬ妹背の旅づかれ、いざや急がん夜明けなば、東しらみと人やとがめん。兎
に角に身の用心の腰眼や、雲のかけはし白たへの、加賀越中の國境、ふんどし谷のかたほとり、肛門
寺とて名にしおふ、大師の古跡ふし拜み、蟻のとわたり打過ぎて、金だの宿にぞ三重著きにけり。

神靈矢口渡跋

樽ぬき澀柿を笑つて曰く、汝我が身の澀きを恥ぢず。澀柿答へて曰く、汝も澀を抜かずんば澀く、我も澀をぬかば甘からんと。善悪は本不二なり。一日吉田冠子來りて、淨瑠璃の作を請ふことしきりなり。されば旨は蛇に畏ぢず、小戸はほた餅に逃げずと、不稽無上の筆任せ、只初段の切三段目の口のみ予が筆にあらず、其餘は闇雲に綴り合はせども、今をはじめの作者の巢立、しかも初日の急なれば、引書を閱るに違あらず、校合も足らざれば、其の誤り多からん。澀のぬげざる澀柿の、澀き所は容したまへ。寅の初春中旬、作者の甲拆福内鬼外まじめに成つて誌す。

嫩寮葉相生源氏後序

古語に曰く、寸も長きことあり、尺も短きことありと。されば木綿を買ふ者は、價少なうして其の丈長しといへども長しとせず、錦を買ふものは、價多くして其の丈短しといへどもみじかしとせず。予が戯れに作れる嫩寮葉相生源氏、九段續きなるを、東都の芝居の習ひなれば、末の三幕をのこし置き、評判しだいに猶追ひ／＼に出さんと、先づ六段目まで取り組みけるに、當る正月二日より如月下旬の今に至るまで、引續いての大入、棧敷切落はいふもさらなり、二の手をのけて見物雲の如く集まり、舞臺の後人の山を築く。入るにあまえ勝に乗つて、末三段は趣向のみにていまだ筆をさへ採らず。しかるを淨瑠璃をこのむ人々しきりに正本を望むと、本屋が錢をほしがるとにふががにふに止む

ことを得ず、物足らぬ正本を出しぬ。手織木綿の地太にして、しかも丈の足らざるをも、ひいきの目には蜀江の錦とも見違へて、跡の出づるを待ち給へかし。

安永二年癸巳二月三十日

福内鬼外誌

きよみづもち

りやうごく橋の邊
新見世びらき仕り候

口上

世上の下戸様がたへ申上候、そも我が朝の風俗にて、目出たき事にもちひの鏡、子もち金もち屋敷もち、道具に長もち魚に石もち、くるわに座もち牽頭、家持は歌に名高く、惟茂武勇かくれなし。かかるめでたき餅ゆゑに、この度おもひつきたての、器物もさつぱり清水餅、味は勿論よい／＼と、御最辰御評判の御取りもちにて、私身代もち直し、よろしき氣もち心もち、噂もやきもち打忘れ、尻もちついて嬉しがるやう、重箱のすみから隅まで、木に餅のなる御評判奉願候以上。

未四月

ゑかうるんまへ

音羽屋多吉

清水餅口上書第二番

風來六々部集

流餅酒論

私餅店の儀、町中御下戸様方御最眞御取立を以て、段々繁昌仕り、あり難く奉存候。然る處此のあひだ底貫鱒右衛門様と申す生酔様御出でなされ、巻舌にて御意被成まするは、ヤイ亭主、清水といへば水に縁ある酒をこそ賣るべけれ、何ぞや野夫な餅店を出し、下戸めらをうまがらせ、錢をせしめんとの謀、言語道斷の次第なり。汝が口上書を見るに、皆身勝手のせりふなり。我が上戸の眼より見れば、餅ほど穢らはしき物はなし。先づ瘵持は胸を苦しめ、疝氣持はきん玉にもてあつかひ、女郎の末は癩持となり、かけまの果ては痔持となる。子持は女の色氣をさまし、やきもちは愛をつかす。不器量のあくたいを柵から落した牡丹もちといひ、蒲團ばかりの獨寢をかしは餅と異名せり。とりもちは殺生戒を破り、むぐらもち植木をそこなふ。高望王は下總に朽ちはて、持氏は鎌倉に亡ぶ。秩父におほさき持あり、四國に犬神持あり、賤しきことを荷持歩行持と言ひ、無首尾なことを手もち無沙汰といふ。身持氣質は附合を知らず、餅喰は相手がいやがる。槍持は槍を遣はず、金持は金をつかはず、辨當持先へ食はず。かかる不埒の餅ゆゑに、下戸の建てたる藏はなし。早く相止め然るべしと、青筋はつてぞ申しける。

右の返答に、上戸を一まくりによりこめ、餅の利運に相成候文談、跡より出し可奉入御覽候、已

上。

後日 矢口 荒御靈新田神徳口上

軍は勢の多少によらず、芝居は水物とは、昔から負けをしみに能く申す事なれども、終どこれまで芋がらで足ついたためしもなければ、止めるに相談きはまりしを、さる方様の御意見に、ざりとはお江戸の廣いことを知らないか、二丁町を聲色を使って通り、吉野丸でさわげばにたりでも諷ふ。主水の表で駄菓子を賣り、越後屋の門を切れ賣が通る。晝三から夜鷹まで、夫れ相應に賣れるといふが、お江戸の廣い證據なり。裸で物は落さず、女角力で鞆丸をつめたためしなしと、闇雲にす、められ、運は天にありほた餅は柵にあり、下りは鄰にあり、此方にはなんにもなければ、其代金の出し人もなければ、請子をしてはるやうな心持にて、はたいた所が元直なり。入らぬ所が平氣なりと、申すもやつぱりへらず口。やねの破れた一徳に、寝ながら月を見るといって、味噌を上げる理窟にて、ろくな事ではなけれども、只御見物様の御最眞を、下りの太夫三絃とも、守り神とも金主とも、是れ許りが頼みにて、心一杯の思ひ付、福内鬼外先生の新淨りを出せども、衣裳もなければ道具もなし。江戸のお氣ではお目まだるし、おほ山御参詣の道すがら、旅芝居を見るお心にて、悪い所が面白い、不出來な所もこいつはよい、やりそこなうてもこいつはよい、いけない所もけちな所もこいつはよい

よいと、委細構はずお譽めなされて、御見物の程奉希上候。

同じく口上後日

先達而奉申上候通り、貳文四文のはした芝居、誠に海老雑魚の魚まじり、一寸法師の背くらべ、さりとては厚かましい、ねりま大根で、太いの根と来た萬八芝居と御呵りも可被下處、判官最眞會我最眞、弱い者を見捨てぬは、實に頼もしきお江戸の御氣象、有り難いのてつぺんにて、屋根の穴から雨の漏るをも御厭ひなく、御出で被下候御最眞御憐愍を笠に戴き、どうやらかうやら芝居の様な物に成り懸り、偏に御蔭御取立故と、難有仕合に奉存候。何をがな御禮御慰みに相成候様にと、心はやたけに逸れども、ない袖は振られず、瓢箪から駒も出ねば、金主から金も出ず、提灯で餅つく様に、氣ばかり焦つて埒明かず。鏡ぶんばり身代限り、えいやつとの思ひ付にて、來ル二十七日々七ツ目の泥仕合、八ツ目九ツ目大切まで、追々出し奉入御覽候へども、是れ以て道具衣裳そこらだらけが不都合だらけ、御目まだるきは勿論なれども、悪うてもよい、負けても勝ちやと、御町中様御最眞の御蔭を以て、此の度の四幕目、瀝團扇の氏子をはなれ、リン／＼／＼に引きかへて、えいたう／＼と御見物、幾重にも奉願上候。

三月 日

ふきや丁

結 城 座

荒御靈新田神徳後序

近松老翁、世を戯場に避けて數の淨瑠璃を作りけるに、筑後播磨の名人有つて、普く世上に行き渡る。勸善懲惡世を教ふるの一助たること、是れ近松氏の本心なり。中頃千前軒文耕堂が類も、また近松氏の意をうけて、作れる所正しければ、此の道甚だ盛んなりしが、いつの頃よりか衰へて、今時の作者は固よりそこ所ではなく、文法を知らず手爾於葉を辨へず、嘲りを遠近に傳へ、恥を千歳に残す。讀めぬ同士書かぬ同士、金雷をこはがらず、盲蛇物におぢす。されども五年か三年に一度、犬も歩行けば棒に逢ふ、闇夜の鐵砲まぐれ當り、はくらんの藥ははくらん病みが買ひに来る、遅牛も淀、早牛も淀、それも作者、是れも作者。鴈が飛べば飛んで見たがる石龜仲間のぢだんだ組、すつべらほんの鼈作者、泥水を足を踏み込み首をすつこめ、敬白。

亥のとし卯月上旬

福 内 鬼 外 書

木に餅の生る辯

つれ／＼なるまゝに、日ぐらし硯に向ひて、心にうつり行くよしなし事を、そこはかとなくかき付くるといへば、向上らしう聞ゆれど、借金の斷り手紙や質の利上げの書物に、ほつと精をつかせし所

へ、門人無名子なるもの來つて曰く、「けふ藥を葛西の邊に探る、至つて珍らかなることあり。木に餅のなりたるにて、人々市の如くいたりつどひ、猶此の説街に滿つ。願はくは先生の説を聞かん。」と、一枝を携へ來れり。予答へて曰く、「天地の廣き、かかる異物も有るまじきことにしもあらず。然れども、これは餅といへる名ばかりにて、食らふべきにあらずれば、眞の餅といふべからず。又我が家別に木になりたる餅ありて食すべきものなり。」門人驚いて曰く、「先生既にかかる異物あらば、幸ひに我に見ん事を許せ。」と、ねもごろに是れを乞ふ。よつて箱を開き取り出せば、門人笑つて曰く、「これ初春をことぶく餅花にあらずや。」爰に於て予是れに教へて曰く、「世人の愚昧なる今に始めぬことなり。試みに是れを論ぜん。夫れくのぎ類數種あり、譜殿にてくならかしはあり、一にかしはといふ、くのぎあり、又大なるといふ。又一種あへくのぎあり、櫛あり、柞あり、小ならあり。皆同類異種にして、漢名實の大なるを榲はそといひ、實を橡實しやうじつといふ。實小なる方を榲かといふ。小ならは榲中の小さきものにして、詩經の檇ぼく、鎮江府志の寧落葉はいつく是れなり。實おのゝ苞ありてその半ばを包む。花は栗の花に似て短し。又此の花實の外に毬あがありて、形松かさの小さきごとく、櫛はりのきの實のぶの實のごとし。是れ亦別に一物なり、其の名をならがうといふ。今餅といへるは、ならがうの初生木の、勢いきほひ悪くして一ツ處にかたまりたる物なり。是れ畢竟は木の病なり。吉にあらず凶にあらず、餅にあらず實にあら

ず。又今年のみ有るにはあらず、年毎にあれども、常は氣を付けざれば只に止むのみ。今年はからずも俗人の目にふれしより、一犬形に吠えて百犬聲に吠え、己が愚を賣るとは知らず、木に餅のなりたりといふ者少なからず。只是れのみにもあらず、國の吉事としてこれを祝す。その祝する下心は貪欲よりおこれり。佛を頼んで極樂へ行きたがるも、先の世の榮華、身には金箔をぬりながら、蓮花の腰こしかけに半座を分けて、鼻かと戯たはぶれをなし、耳には二十五菩薩の音樂に、豊後ぶんごぶしの艶なるを聞き、口には百味の飲食金翅鳥おんじきこんじてうの燒鳥、天の邪鬼じやくきの糟漬かすづけ等を食はんが爲なり。木の餅を祝するも、國家の安全を祈るにてはなく、國の吉事といへば我が身の上うへにふりかゝる仕合もあらんかと思ふより、知るも知らぬも祝して曰く、木に餅のなりたるは古今無雙の吉事なりと。夫れ天吉凶を知らしむるに、何ぞ小兒の戯れの如きを以て是れをしめさんや。或人曰く、しかれども又其の理もなきにはあらず。萬物陰陽に造化す。陰陽不順なればよのつねならぬ異物生ず。異物の生ずるは吉にあらず凶なり。後醍醐帝の御宇龍馬を獻けんぜしを、中納言藤房の卿評せしも理に當りたるにあらずや。予謂へらく、是れも亦陰陽の大なることを知らざるが故なり。造化の限りなき、億萬を以てはかるべからず、豈悉く全きことあらんや。五瓣の花六瓣に咲き、茄子の巾著形なる、釋迦如來の黃疸色なる、福祿壽の天窓の長き、鎮西八郎爲朝が弓手の腕の長きも、皆同じく出來そこなひなり。六瓣の花は必ず其の實雙仁ありて

人を殺す、二子茄子を孕み婦食らへば二子を産むといふも俗説なり。又眞眞の方から押して理を付くる時は、釋尊の黃疸は黄金の肌と號す。いかに佛なればとて體が金ならば、風呂に入り火燧にあたらば、五體なま金と成つて病者と成るべし。又指を切つて兩替にもやられねば、正眞の金の持ち腐らしなり。殊更夜道の獨り旅、盗人の用心悪かるべければ、損有つて益なし。故に我は佛は生まれ損ひの病者と見ること理なきにあらず。また福祿壽の天窓が長きとて、南極星の化身といへるも、見て來たものなければ請合ひがたし。爲朝が腕の長きは、弓取と盗人には重寶なれども、つまる處は出來そこなひなり。此の類の出來そこなひ今も世に多し。生まれ付の片輪者、葉替りの草木、棊盤娘、熊女、馬に角あるの類皆出來そこなひにして、ならごうの餅に似たるも、同じ造化の細工屑なり。何ぞかか小物を以て國の禍福を論ぜんや。(此の開闢)又吉凶を知らしむるならば、天地といへる名人の作者に、春夏秋冬といへる上手の細工人の手が揃つて居れば、まだ外に尤もらしき趣向も有るべし。是れ衆人のまどへる事、言を待たずして明らかなり。去年の春にてか有りけん、江戸西が原といへる所に木に餅なりたりとて羣集せしも、櫛の木に付きたる瘤の如きものにて、今年物とは少し異なり。去冬家内に餅のなりたる木は柳なり、此の外に餅のなる木の有りやと問はば、只稻と答へんのみ。門人笑うて去る。

寶曆十一辛巳年彌生上の九日

麥飯の報條

高からうよからう、安からうわるからうとは、やほの時代の喩へにて、今どきは御合點なされず。ひつばりみせて二の膳にすわり、安札で棧敷へ上る。賣人のやすり買人のかすり、やすりかすりと云ふことを知らねば、いまごろの商賣はならぬと、さる御方の御說法。聞くとそのま、早合點、かしこまり子のとろ、汁より、むぎめしの思ひ付、南鐮一片六進が三進、二一天作の御一人前、つもり上げて見れば、サアやすい、伴頭殿のそろばんちがひか、ぬすみ物か、ひげ物か。但し又狐をつかひて馬糞でも喰はせはせぬかと、御うたがひの御方もあらうが、そこがかのやすりとかすり、かひての仕合、うりての悦び、すたつた所が南鐮一片、儲けた所が五十か七十、みぢんつもれば山をなし、頭巾と見せてほ、かぶり、いかな御客も足かるくと御出で成されて、めしを出せ、コリヤ酒をだせ、ヨウイ得意にならしやんせよ。

追加

吉原細見天の浮橋序

天地開け始めてより、天の浮橋のもとにて契りをこめ給ふは、夜發の濫觴ならんかと、ある物しりに問ひければ、いや／＼それは三ッ蒲團を知らぬ神代の物語、お江戸の女郎に長崎の衣裳をきせて、京の揚屋で、元祿年中の譬へ。今のお江戸の吉原は、梅が香を櫻にうつし、柳につきほしたる如く、そろひにそろひし繁華のてつぺん、それがうそなら來て見給へ。

右の一篇は、此の書編集の折柄、四方に求め侍りしが、得がたくてやみにしを、北里にすめる魚躍主(駿市)の記憶して、口づから傳へしまゝ、此の書の末にくはへしるしぬ。

四方山人識

跋

筥根から此方に何やらのなきこのかた、狂文戯作の弘まりしは、此の風來子に止めたり。首創は功をなしがたく、因襲の業は致しよく、近頃は其の糟を食らふ者多く、作者で目をつく様なれども、光

る物は飛んで天月となり、黒いものは泳つて水虎となる。何耶今の通眼世界、可止可止かの志度浦、吹き出す風來山人、筆をとればよく世上の毛の穴を捜し、舌を出せば阿蘭陀南京までも只一嘗め、筆の花は梅さくら、舌の長さは三千丈。その風の吹き來るたびに、隨筆したる穴さがしと、太平樂の短文あり。四方山人その天徳寺とならん事を惜しみ、集成ねて飛花落葉と題す。これむかしは羅漢の觀想たれども、今は書肆の巾著の工面となる。意味は播州三箇月味噌、讀む者覺えず舌を鳴らさん。さあさあ活之哉々々買つたらばよかんべい。筥根から先にはないぞや。

天明三年

八百里野

天放山人

跋

易に曰く、雷は來なり。能く百里を驚かし、聲あれども形はなしと。昨日聞く風來山人、飛んだ噂も七十五日、今は昔と成田屋の、人の噂や我が身の上、この人にして斯の疾、六道の辻駕籠にのり、極樂淨土の居つゞけとは、御釋迦も御存じあるまいと、留守の閑庭を覗き見れば、飛花落葉のちり塚のちり、多くの人の目にふれば、見ぬ世の友ともなれかしと、さる御方の思ひ付、わがむだ口も跋の

心、やうやくこ、に□作けたり。時に天も明るき三の年、兔の耳の長き春の日、虚言八百里の野の片端、逃げ水の流れにのぞみて、三平二満藏磨になつて誌す。

跋

佛は衆生の爲に花を降らし、勇士は戰場に火花を散らす。大盡は末社のために紙花を飛ばし、折介は夜鷹の爲に鼻を落す。これ等は落しても散らしても懸替も有るべけれど、此の花の外に此の花なきは、いはずと皆様御存じの作者の巨擘風來山人、盛りを見する程もなく、遮陽版の岐穴から、賊風の心なく、吹き散らしたる花は根に、復花となせしこと、惜しむべきことにあらずや。此の頃嘗て四方山人、彼の風來の書き置かれし、劇本の後序新様物の報條など、敗紙に紛雜れ込んで還魂紙とならん事ををしみ、編つて一部の小冊となし、櫻木に花と開かしむる事とはなりぬ。飛花落葉と標題せるは、春は櫻の花の雨、秋は落葉の村時雨、徒然を慰むる端香の強い茶飲みばなしの、はなしの主兒にも換へ給はば、故人の鼻を高くして、亡名に花を咲かする心で、名をつけた物で御座るてやと、四方山人の話にいはれたりしを、鼻紙に書き留めて、此の書の跋とはなし侍る。

天明三年むつきの頃

風來山人遺弟

下界隠士天竺老人述

細見嗚呼御江戸序

女衞、女を見るに法あり。一に目、二に鼻すぢ、三に口、四に生際、膚は凝れる脂のごとし。齒は瓠犀のごとし。家々の風好きくの顔、尻の見やう親指の口傳、刀豆臭橘の祕術ありて、これをえらむこと等閑ならねど、牙あるものは角なく、柳の翠なるは華なく、智あるは醜く、美しきに馬鹿あり、靜かなるははりなく、賑やかなればきやんなり。顔と心と風俗と、三拍子揃ふもの、中座となり立者と呼ぶる。人の中に人なく、女郎の中に女郎まれなり。貴きかな得難きかな。或は骨太毛むくじやれ、猪首獅子鼻棚尻、蟲喰ひ栗のつ、くるみも、引け四ツの前後に至れば、餘つて捨つるは一人もなく、ひろいところがア、お江戸なり。

午のはつはる

福内鬼外戲作

序

抑この風來假名文選といつば、錠前鐵物なほしの秀句と聞ゆれども、其の様な茶なる事ではなし。是れ我が先師の筆進にして、狂文戯作を書く人には、白氏の文集紫清が艸紙、夫れにもまさる至寶なり。夫れ先生の文たるや、活々たること龍の如く、彼の唐山の文選莞筵を、はるか足下に掛川莞筵、詞に咲かする花莞筵は、堅いやうにて和かく、浮世莞筵の世話にわたる、いふに云はれぬ味い事、あたかも天にあらば比翼莞筵の、飛んだはずんだ筆拍子、又地にあらば連理の枝の、寢莞筵を掘りても悪落に類せず。かへすくも世上の戯作者、草履をぬいで下座莞筵に手をつかね、此の書を拜して筆を採れと、我がものよしの先生自慢、書して序文の明地をふさぐ。

于時天明八の歳霜月二十日、他所へ出懸の追つとり筆、出たら目に述之。

萬 象 亭

佛法 菩提樹之辯自序

舊板其の砌大に行はれ、所々磨滅に及び、見易からねば、斯程の文章埋木となるを悲しみ、このめる人の望みに任せ、再刻なしてこゝに加ふ。

或人南無阿彌陀佛の六字を註釋して曰く、それ南無とは南無と書きたる文字にて、死んで仕舞へば皆身なし、後生を願へといふ心。阿彌陀とは世の人を救はせ玉ふ綱だ程に、随分頼めとの御誓願。佛とは念佛を高聲に稱へる名聞なり。口の内にてぶつくと申せよとの事なりと、しかつべらしき傍より、如來とは扱如何。是れには殆どこまりながら、いひ掛り引かれもせず、嗟峨の釋迦でも善光寺でも開帳に出ることは、衆生濟度は勿論なれども、二つには參詣の散錢をによらふ故、そこで如來と申すといへば、一座どつと笑ひけるを、此の書の序とはなしけらし。

風 來 山 人 誌

菩提樹之辯

今年六月朔日より、本所廻向院まつかうめんにおいて、信州善光寺如來の出開帳でがいちぢょう、參詣羣集前代未聞のことは、人々の知る處なれば、今更いふもくだくし。ほどなく日延ひのべの日限もみちけるにや、閏七月十七日の曉あかつき限りに閉帳へいぢょう有りける。然るに十七日の日中より、誰たれいひ出すとなく善光寺如來の奇瑞きざるによつて菩提樹を降らし給ふと、我先と是れを拾ひろふ。三十年前開帳の時も降らし給ふ。又今年もふらし給ふは、誠に世は澆季けうきに及ぶといへども、佛法の奇瑞きざる有りがたとしと、諸人益ます渴仰かつげうす。おひく高貴の御方より、予に是れを鑑定めいさきせよとて見せ給ふこと七八ヶ處に及べり。予皆眞の菩提樹なりと答へける。或日門人何某來掛りて問うて曰く、「先生彼の品を以て眞の菩提樹と答へ給ふ事、甚だ以て不稽ふけいの言なり。夫れ菩提樹のことは、翻譯名義集ほんやくみやうぎしふに、佛其の下に生じ成等正覺じやうとうしやうかくし給ふ、因つて是れを菩提樹といふと、其の形狀潛確類書けいじやうせんかくるゐしよに出でたり。又元亨釋書げんかうしやくしよに、千光國師榮西せんくわうこくし入宋の時、菩提樹の種たねを傳へて筑前國香椎かしのひの宮の側かたはらに植ゑしより、京都泉涌寺六角堂、同寺町、又叡山西塔やまのとうにありと、貝原先生大和本やまもとほん艸さうに詳つまじらかに出されたり。又筑後國鎮西本山善導寺中に、昔より大木有り。東都にては東叡山の寺中

に有りて、先生固より能く知れる所なり。其の實大豆粒より大にして、念珠に作る物故に號けて菩提樹と云ふ。今降る處は麥粒の如く、何か得しれぬ木の實にて、念珠に成るべき物にも有らず。降つた所が役にも立たず、降らぬとて不自由にもなし。扱舊記を考ふるに、粟を雨らし麥をふらし、石をふらし土をふらし、灰をふらし毛をふらし、血を雨らし肉をふらし、虫をふらし魚をふらし、或は沸湯紅雪をふらすも、皆譯のある事なれど、つまる處なきにはしかず。若しも佛の靈顯ならば、虚空に花降り音楽聞え、天津乙女の羽衣の曲にて、諸人の心を慰むるか、同じく降らす物ならば、錢金か麥米なら、下のくつろぎ、如來の御蔭と有り難く思ふべきに、江戸中から近在掛けて一萬兩餘もせしめて置いて、けふ閉帳の名残とて、降らす物に事缺いて、役にも立たぬ菩提樹の、しかも質物をふらすとは、さりととはあたじけ如來なり。又熟案するに、日本書紀第十九の卷、欽明天皇十三年冬十月、百濟の聖明王、釋迦佛の金銅の像一軀、幡蓋經論等を獻す。小墾田の家に安置す。國に疫病行はれて、治療すること能はず。物部の大連尾輿、中臣連鎌子同じく奏して、佛像を難波の堀江に流し棄つと。此の説に據る時は、實の善光寺如來といふは、釋迦如來なるべけれど、夫れは先づ差置いて、釋迦にもあれ、彌陀にもあれ、浪花の堀江へぶち込まれ、鯽や鼈と相店の住居なりし。これを川柳點の前句附に、善光も初手は水虎と申うて居といへることく、纒と見付けて笈に入れて、處々方々

負ひ歩きたる佛といふは、何にもせよ一體にて、觀音勢至のさたはなし。是れをも又川柳點に、二菩薩は歩行かつしやいと本田いひとは、後世三尊に作り直せる杜撰を笑ひたる句作なり。扱又晝は善光如來を負ひ、夜は如來善光を負ひ給ふといふも、有り難い事のやうなれど、さりととは聞えぬ仕方なり。晝の内長の旅路、重い佛を負ひ歩行き、草臥れて居る善光、せめて夜はとつくりと足踏み延して休んでこそ、旅の勞れも直るべけれ。夜がな夜一夜金佛に負はれては眠る事も成るまいし、寒い時には冷え渡つて、さりととは困つた物なるべし。扱又極樂海道の切手なりとて御印文を戴かす。若し地獄極樂ある物にしてからが、一生涯佛を念じ善根を積んでこそ極樂へも至るべけれ。夫れさへ上品上生より下品下生に至るまで、九品の淨土の別ち有つて、護に極樂へは行かれぬと聞きしに、壹分に壹貫賣る時も、壹貫五百賣る時も相場に構はず、百文で極樂の切手の安賣り、世智辛い人間ども、二百出して蹴轉を買うては、ちつとの間の樂しみなり。其の半分の百だして、億萬劫が其の間、百味の飲食振舞はれ、天人を揚げ詰めにして蓮の臺に店賃入らすの活計歡樂、是れ程安いものはないと、我一と戴いて、只さへ善事は嫌ひにて、惡作りたがる凡夫ども、御印文を楯について、額に極印がすわつたからは、つがもねエどんな悪い事しても地獄へ落ちる氣遣ひなしと、衆生の心を安堵させるは、跡をかまはぬ肝煎が、判賃取らう許りに、どこやらへ遣るべき宿なしを奉公にありつかせ、主人の難

儀かけまくも、忝くも如來ともいはる、程の身を以て、さりととは不埒千萬なり。斯くの如く一ツとして取り處もなき佛なるに、先生も雷同して、菩提樹なりと極めること、以ての外の見識、言語道斷のことなり。」と、苦り切つて申しける。其の時山人莞爾として笑つて曰く、「子が詞一々理あるに似たりといへども、一概の論なり。先づ日本紀にどうあらうが、善光寺でも阿彌陀といひ、世間一統阿彌陀なりと、覺えて居るが阿彌陀にて、何の邪魔にもならぬこと。小刀細工の青表紙、いらざる所へ骨折つて、法界愷氣岡焼餅、さりとは無用な穿ちなり。さて御印文といふ事も、あさとい様なることなれども、佛とも法ともわきまへぬ、人間の皮かぶつた猫また姥や、きやん／＼わん／＼の類には、仁義禮智は間に合はず、百位なら極樂へ往つても見ようと、思ひ立つが取りも直さず仁の端、佛家でいふ結縁にて、めぐりに負けてはだかに成つたり、夜たか買うて鼻を落すほど氣の毒にも思はぬことなり。また晝は善光如來を負ひ、夜は如來善光を負ひたまふとは、陰徳あれば陽報あり、善のむくいいちじるく、負へば負はる、といふ比喩なるべし。こゝらをあしく心得ると、牛馬にむごくあたる人は、死んで牛馬になる故に、佛にむごくあたる人、死して佛に成るといふ間違ひも有る物なり。扱三國傳來の閻浮檀金は藏して置いて、新たに三尊にせし譯は、客の多い女郎の名代をだす、まづ其の如く、引手あまたの御手の絲、來る人多きも一方ならぬ閻浮檀金の名代に、新造如來を出されたり。そ

れもしよんほり只一人では、と見た所が寂しい故、歩行かしゃいの二菩薩は、二人禿の心なり。扱又開帳の名殘狂言、いかにも花降り音楽聞え、東遊ひの羽衣の曲が相應といふことは、如來をして喰ふ身の上で、知らぬ事はなけれども、五々の菩薩の管絃天人の舞といふも、やはり昔の通りなれば、土佐の芝居見る様で、甚だ古風なこと故に、慶子路考杜若が所作、嘶町の手合には寄つてもつけず、言はれぬ出来し立てをして味噌つければ、極樂の株仕舞と思ふ故、是れもさりとやめしと見えたり。又錢金をふらしては、此の廣い江戸中へ、五千兩や七千兩では、どこのはなへも行き届かず、出開帳も權兵衛ごんにやく、こゝは一番錢入らずに、軽く刎ねる仕方が有らうと、如來も茶番をする氣に成つて、思ひ付かれた菩提樹なれども、さう／＼は有り合はさねば、えしれぬ木の實を取り雜せて、ちやらくらをやらかされたり。とは知らずして凡夫共、めつた無上に有り難がれども、聊かも害にならず。若しも腹へ入れる藥ならば、辨じ様もあるべけれど、天狗の鬮、同様に、何の絲瓜の可愛さうに、落ちを取つて居らる、物を、我一人知つた顔にけちを付けるもおとなけなしと、菩提樹にして置くなり。是れにも議論有りや。」といへば、門人も憫れた顔にて、詞なく歸りければ、山人も閻に入つて、とろ／＼とまどろみける。然るに夜更け人静まりて後、表の戸口をとん／＼／＼、叩くは秧鶏の聲にもあらず、節季でなければ借金乞の氣遣ひもなく、誰と答へてぐわらりと明くれば、思ひ掛け

なき善光寺如來、金色の光を放ち、近うくと招かせ給ひ、こ、は一番、善哉々々、我はこれと言ひさうな處なれども、近年雜劇で不斷するゆゑ、古い趣向と笑はれんが恥かしさに、しら化と出掛けたり。其方最前菩提樹の辯、茶にしたるいひまはし、近頃以て痛み入り、面目もなき次第なり。勿論我等が方便で、山事をやらかして人の目を晦まさうと思へば、竹田の關振出羽の手づま、藥研堀の龜丈が工伎ぐらるはやり兼ねもせまいけれども、正法に奇特なし。夫れも開帳が不當りで難儀にも及ぶならば、又思案も有るべけれども、流行り過ぎて困つた位、何に不足のない仕合、菩提樹をふらして入りを取るにも及ばず。又重ねて出る時は三四年も後の事、今の人間はぐわらりと替れば、跡の仕込にも迂り遠し。殊に降らせた菩提樹といふは、其方も知る通り正眞のものではなく、倭名水木、又俗に水草ともいへる木の實を、烏が好んで喰ふ物にて、彼の水木の實の肉は烏の腹中で蕩けても、中の核は其の儘に糞に雜りて出でたるが、度々の雨に能く漂射れて、そこ爰に落ちて居るを、一人が見付けて菩提樹が降つたといへば、百犬聲に吠ゆるなり。眞の菩提樹とは形狀も違ひ大きさも違ふなり。いかに衆生が文盲なとて、如來ともいはる、者が、座頭に熱湯浴びせる様に、贗物を掴ませう筈はなけれど、愚癡無智の凡夫ども、おれを眞眞の引きだふし、却つて恥をかかせるなり。成程一圖に祈るものは、奇瑞もある筈の事なれど、千人に百人も誠の信心で來るは少なく、衣裳自慢器量じまん、見

せに來る人見に來る人、納涼ながらの參詣やら、負けるが嫌ひの日參講中、提灯の伊達前後を争ひ、念佛の聲遠近にひゞく、人そばへの朝まりり、鄰のかゝをそゝのかし、門前の茶屋で出合ひ、おれを出しに大それたことをして、日比の思ひをはらしたも如來様の御蔭、有りがたいといはる、時は、身をそがる、よりもせつなけれど、一々罰も當てられず。實に此の度の菩提樹のことは、臺座後光をぶちこはされ、とつかへべいの飴賣が手へ渡る徳もあれ、おれは夢にも知らぬ事なり。都て世上の習ひにて、何ぞ變つた事があれば、名高い人の名を立てて、牛若が切つた石ぢやの、辨慶が捻ぢやの、片目の杜父魚武文蟹、石芋、石蛤、白の目切つたも弘法大師と、あられもない名を立てらる、おれも善光寺の如來というてや、佛仲間での立物のゑ、此の度の菩提樹の様に、無い名を立てらる、も常不斷ある事なり。叔父おれを安くして、引け四ツまで見世さらしの新造ツ子の様に思やるさうな。成程天竺より渡つたるには觀音勢至の脇立もなく、閻浮檀金に違ひなければ、無法の族奪ひ取らんことを慮つて、祕佛として藏し置くなり。然るをなま物じり共が、いや名代ぢやの前立のと、色々理窟をこねるは、さりとて若輩千萬なり。抑實の無量壽佛と申し奉るは、有るがごとく無きが如く、遠きがごとく近きがごとく、草木國土引きくるめて、皆如來の細工なれば、廣大無邊いふ許りなし。閻浮檀金も焼付も、聊か形容を標する許り、皆同じ前立なり。人間の目から見れば、金は尊く焼付は

賤しい様に思へども、佛の目より見る時は、金も銀も銅も皆一圓の土にして、佛の照らす光明なり。斯く廣大に説く時は、本尊も念佛もいらす、儒者の獨りを慎み、神道者の正直許りで濟みさうなものなれど、譬へば弓の稽古する者、すびき藁碇許りで手前さへかたまれば、的に掛るに及ぶまじけれど、我が身を我が心で試すには、其の手前のかたまりしか、かたまらざるか、委しう分らぬ物故に、的に掛けて射て見れば、今の矢は上だ下だと、的を目前に手前を直す。本尊に向つて念佛申し、惡念を去つて善心に立ちかへるも、彼の的を射る心にて、閻浮檀金でも焼付でも、目當許りの事なれば、貪著はなきことなり。只人々の力相應、弓は強くも弱くもあれ、的は金でも焼付でも、一心不亂に願ふ時は、風やんで埃なく、浪靜まりて水清し、惡念邪氣の雲晴れて、硝子の如くすきとほれば、心が即ち火珠にて、誠の如來映らせ給へば、其の時悟りを開くなり、宣ふ聲の耳へ入りしは、是れも我が鼻にて、如來と見えしは有明の、行燈幽にちらつきて、夜はほのくくと明けにけり。

跋

さる御方、善光寺の緣起を聞きたまひ、夜は如來善光を負ひ給ふといへるを論じて宣ふには、閻浮檀金の尊像は小像なるよし、善光が五尺の體を一寸八分にておひ給ふとは、甚だ以て心得がたし。或人答へ申されしは、そこが佛の通力にて、一寸八分の尊像を、五尺にも七尺にも忽ち變じたまふなりといへども合點し給はず、左程通力自在ならば、尊像變じて負はんより、竹輿を雇ふが近道なるべし。斯く智慧のなき如來にて、衆生濟度は覺束なしと。ある人又申しけるは、一應竹輿は借られしが善光路錢を持たざれば、なんほ神の通力でも、柿の蒂では合點せず。爾の時如來の小言に曰く、嗚呼錢なき衆生は度しがたし。

門人 無名子 慎書

風來六々部集跋

千里をはしる馬ありといへども、これを知る伯樂なければ、四ツ谷街道の屎取馬と共に引かれ、人を知る識なければ、共に遣つて見ようのはなしも出来ず。なんでも一番やつけべいと、やたら骨を粉にして、命を縮める程の思ひをしても、残るものは借金。ソコデマ、ヨ今年はちやうど庚申、何事も是れから先のえんぎにもと、ふじ參詣の思ひ立ち。牛は牛づれ馬は馬連れ、同氣相求める友二三人打伴ひ、行手の道も笑ひ艸、探樂しても漢名に、また蠻名もむづかしく、調べた所がひまづひえ、費えるまゝにさしかゝる、御山の廣大靈異なること、今更いふもくだくし。昔語にふじ山で、近江の湖水を埋めたれば、餘程の新田ができるとは、やつぱり是れも山ばなし。また金銀銅の出るやうも見えず。物廣大なれば手が届かず、手のとゞかざるは金のたらざるなり。こゝにおいて止むにはしからじ。止むに至りては古人を友とするにしかず。友としてこゝろを慰するものは、風來六々部集にしきものなし。先生元より世に用ゐられず、世をすつとのかはに引込みしも、その智の餘れるなり。智餘れば人々恐れをなす、恐れられれば用ゐられず。嗚呼難いかなこゝをもつて今六部を増補して、十二

部の利を得んと欲すと云ふ。

小 膽 山 人

四方のあか

蜀山人

四方のあか

このふみや、四方の赤の一本氣いっほんきにして、かりにも水くさき駄酒だざけをまじへず。もとより巴人亭はじんていの本店につみて、かつて呑口のみぐちをだに開ひらかざりしを、おのれひそかにこれをうれへて、こだみ琉球りゅうきゅうのかゞみをひらき、樽底たるぞこのおくをさがし、徳利とくりのかけたるをおぎなひ、四斗樽しとうずのもれたるを集めて、しるしの杉のはん木はんぎにのほせぬ。もしきき酒さけの口巧くちがうしや者ものあらば、來りて名酒なざけの味あじをなめよ。暖簾のれんにしるき扇巴あふぎとま、これを居酒屋いざやの門かどにかけて、一字いちじの損益そんえきをまつといふ。

宿屋飯盛しゆくやいひもしるす

四方のあか上

達磨贊

拈華微笑の牀花は、正法眼藏の帶をとかせ、教外別傳の正傳節は、文字大夫が流をたてず。蘆の葉の猪牙に乗つて、九年面壁の居つゞけとは、汝が尻のくされ縁か。金がふんだんだるまなるか。からから喝。

遊女贊

九年酒のつまりざかなの座禪まめほかに本來一物もなし
誠はうその皮、誑はまことの骨。迷へばうそも誠となり、悟ればまことも誑となる。うそとまことの中の町、迷ふもよし原、さとるもよし原。

傾城のまこともうそも有磯海の濱の眞砂の客のかすく

車どめ

たれこめて、小春の行方も知らぬまに、まちし櫻の花をかざれる、御影講も程すぎぬらん。今日な

ん霜月朔日とかや、雪は跡にふりぬ、軒の氷柱のつらみせとて、世にある人の浮かれ出る日なめりと
 思ひ起して、やをら枕を擡け、夜のものすべらし、西おもての障子、二三寸ばかり押しやりたれば、
 さなきだに秋の野らと荒れにしまゝの、人めも草も枯れはてたるに、ふり積る木々の落葉は、夢にだ
 も帚といへるものを見ず。南天の實の二房三房、ひえどりのついでにばみ餘せるをか。あたり近き家
 の、棟の板間のいたみて、ところ／＼筵やうのものうち著せたるに、晝けの煙たちのほりて、さな
 がら苦船のけしきをうつせるも興あり。なまな前前の主の物すきしおける、ぬりだれめきたるもの一
 つもちて、去年なん修理くはへたる用心土の、無用心に泥にすさこね合はせたる、栗栖野の柑子に
 も恥ぢぬべし。杏こそ孔子の家にもあなりと聞けば、これのみ博士めきたりなど、誇らひみるに、
 長き繩を梢にかけて、かたへの柱に結びつけたるは、あなあさまし、二つになれる童の、しと／＼濡れ
 たる露のしめしの掛けどころとは。すべて冬がれの庭の景色、しだれ桃のしだれんとするに、葉なけ
 れば木振あしく、柘のつめだちて、やがて節分の用にたたんと、癡めきたるも憎し。牡丹の花は
 根にかへりしやら、春のまゝにて便りもなく、籬の菊も萎みつきて、菊煙草のよきむしり比なり。松
 ふぐり朝霜にちゞみあがり、竹藪のふ風にばさけたり。三徑荒れに就きたるなど書けるも、僮僕の種類
 あれば、かかる不掃除のきにはあらし。誰がかみ捨てし鼻紙のくづ、えぬの子のえも言はぬものま

り置ける、いとむさき中にも、梅ばかりは折をたがへず、枝ぶりしやんと、蒼り、しくくび出せる、
 けに一陽の動く所と、うちうめきつ、猶も空見出でんとするに、窓につるせる手習の草子の風にふ
 らめき、軒端に掛けしかけ竿の、蒲團の香も悪くさきま、もとの如く障子引きたて、ついそれなり
 につい臥しぬ。

はやり風ひきこもりたる車どめ御用の外の人を通さず

雪見のことば

わすれては夢かとおもふといひし、宮様の御隠居所でもなく、佐野の渡に駒とめし、半合羽の旅
 人にもあらず。またたちあがりて、梁王の園で、賦といふ所も氣づまり、さればとて、簀子のはしに
 鉢の木の股火も、あまりなるべし。鶴筆を著て立ち出でんも、加賀蓑の見え坊にひとしと、鷺毛に似
 たるとんだ料簡より、ふるめかしいが、王子猷が興に十たんばかり乗り勝ち、剡溪の船を膝栗毛にか
 へ、草鞋うつ藁店の軒に、白と鹽のけしきを見、むつの花の江戸川のはたを、えぬの子とともにさま
 よひつ、お寺の茶の木にちよとまれとうち誦し、こりては思案にあたはざる、たはれ歌のつどひ
 所にまとるしつ、風雅でもなく洒落でもなく、詩とも歌とも連誦とも、えしれぬことを書きちらし
 て、二月の雪の降り損ひを、大目に見てやることとはなりぬ。

いざさらば團めし雪と身をなして浮世の中を轉けありかん

西行法師をとぶらふことば

あたら櫻の咎といひて、大木のはえぎはから、惜しけなく切り倒したる人は誰ぞ。清水流る、道のべの、柳かけに小便したる人はたぞ。あるはしろかねの猫はかはねど、江口の里の飯盛に心をとめ、あるは鳴たつ澤の鳴焼の三茄子より、一富士の初夢にまさしく見えし姿さへ、むかし今戸の夕煙、いづちの風にやなびきけん。ねがはくばこの狂言綺語、三文ばかりの布施ともならば、花のもとにて春死なれし和尚の、今日祥月命日、一ぺんの廻向をなさんといふことしかり。

山ノ手閑居ノ記

わが庵は松原とほく海ちかくと詠みけん、武藏野の廣小路にむすべる、芝のはてにもあらず、ちはや振神田淺草の賑やかならぬも、よしや足引の山の手になん住めりける。春は桃園の花に迷ふ外山の霞たたぬ日もなく、夏は江戸川の螢をみる目白の瀧の音たえず、秋は高田のかりがねに、民の貢の未進をあはれみ、冬は富士を根こぎにして、わが鉢の木の雪とながむ。四季折々の美景をいはば、番町の道の一筋ならず、大木戸の駒のひきもきらざるべし。ふる寺の薨やぶれて、書無盡の講を催し、神の宮居も所せく、夜遊女のふしどとなれり。頭に置くしも屋敷守、憂きをみるめのうら貸屋まで、た

だ何となく鄙びたり。むべも富みける殿づくりに、みつばよつばの蔓をもとめ、よききぬ著たる身のほども、いさしら壁のいちぐらを羨むともがらは、この地の住居はなりがたからんか。さはいへ、ひとへに深き山にかくれん坊をし、とほき海に沖釣をせんとにはあらず、吏にして吏ならず、隠にして隠ならず、朝野の間にのがれんとならば、いづこか此の山の手に如かざらめやは。

窓の内に富士のねながら眺むれば只山の手にとるを見れ

遊女高尾朱椀ノ記

此の器や、山谷わたりに名だたる遊女、三浦屋のもと何がしとかや、最上氏に從良せし時、百の椀器をつくりて、親しき限りに分ち與へしとなん。時移り事さりて、原富の子香玉子の家藏となり、美人の形管にも換へざるべし。原富は、むかしあし引の山の手の名だかき、三絃の妙手なり。今も世に名のみ高尾の紅葉ばは朱椀朱をしきむかしなりけり

土偶人ノ畫ノ贊

こころは巧畫師の如く、畫は泥塑人のごとし。靜かなる時は硯よりもかたく、動く時は筆よりもはやし。

あらがねの土人形のあねさまを見ていたづらに動く畫こころ

鯉魚贊

吾が朝にてはかつをと呼び、もろこしにては松魚といふ。「東醫寶鑑」、北狄西戎、四維八荒、天地
けん好が「つれく草」に、大根おろしのおろしかけ、先を辛子にかかれても、「延喜式」には供御と
なり、「萬葉集」には水の江の浦島が子が、かつをつり鯛つりかねて、七日はおろか七十五日生きのぶ
る、三千本の初物を、誰か一本買はざらめや。

鎌倉の海より出でしはつがつをみな武藏野のはらにこそ入れ

又

人と名所は古きを求め、肴と器物は新しきを求む。卯月ばかりの初がつを、皿に盛りたるいきほひ
は、鯛もひらめも鱸も鯉も、首尾をおそれて鱗を正し、ひれふしてこそ見えけれ。むかし天文六年の
夏、北條氏綱すなごりを小田原につらぬ。鯉躍つて船に入る。氏綱勝負にかつをと稱す。同じき七月
十五日、上杉朝定と戦つて利あり。然りしよりこの方、諸士戦場の門出に、専ら鯉を食ひしとなん。
今太平の御代にあひて、武を忘れざる左ききども、庖丁のきれ味を試み、辛子のかけひき、大根おろ
し、さしみのさしもの箸とりて、酒のた、かひ必ずかつうを、大いに納屋の商人に利あり。兼好かさ
ねて勝をた、かば、われ生櫓桶を洗ひて待たん。

兒戲賦

ひとり邵堯夫が枕を高うして、わらはべの戯れをみれば、こよなう心なぐさむ業なれ。年立ちかへ
る旦の空、松たてわたす大路に、千年の緑を手にむしりて、散りうせぬ葉をうち散らし、や、春ふか
き垣根のうち、雪間の草わかやかなるに、桃の木、柿の木と、呼びもてゆくは、己がふたばの生先も
と頼もし。午まつりの鼓は初がみなりに先だち、いかのほりの絲遊は大人も心ひかれたり。ほと、ぎ
す鳴くや五月のあやめうちは、幟の紋のあやめもわかず。行きかふ空の天河、星の手向の短冊には、
草紙にあらぬ硯を洗ひ、菰の上葉の風よりも、唐獨樂の音のかすかに、博多ごまの手に取りあへず、
貝まはしの鞭うつ間なく、降り積む雪をまろばしては、消ぬべき罪もむくいもなく、碎くる氷の上を
すべるも、世わたりの危きには勝りなん。鬼ついほに追ひつめられて、ひとあしがきの間近きにとら
まり、かくれん房はかねてより、ふし柴部屋のすみにかむ。草履かくしのはなをたづねて、便りな
きところ迷ひ、手拭の目かくしは、しるべなき闇もあやなし。勇む心のこまどりは、子取るくくと
わな、き、つるくといる名にめでて、籠目々々とうたふ。片足立して、ちんがらこと云ひ、た、む
きをか、けて、てんぐるまとす。竹馬は車にひかれ、蛇の貝は片足にかゝる。雲居の鴈を詠めては、
鴈々みつ口とよび、水にすむ蛙をうづめて、茅苴殿のみとぶらひを營む。しけき往來の街に立ちて、

大道めぐりのめぐる／＼も危く、ふもとのちりの掃溜にのほりて、山のぬしはおれ一人とうち誦したるもをこがまし。西どつちに方の名を知り、履を蹴あけて陰晴をうらなふ。蝸牛の角あらそひも、稚き指きりにやはらぎ、むくろけのむくつけき遊びも、穴一のいちはやきかけごとにかはれば、孟母が三度店をかへ、墨子が絲のくりごと、お萬が紅の色々に染み、べろ／＼の紙の向き／＼なるを、手習草紙大ざらへにさらへて、鳥の跡の千二郎、久しく留めんことは、濱のきさごの爪弾きして、笑はれんもうしろめたけれど、ひい／＼たもれ、ひとりこち／＼ぬるわざになん。しかはあれど、泥の美、塵の飯のまゝごと、韓非子が筆に残り、ふれ／＼小雪の唱歌も、鳥羽院の御詞に傳はれる事のなつかしければ、いでや富貴利達の交はりにめかこうして、孩提嬰兒のしやうに入らんとこそ。

庭湖石記

芥子の中に須彌を入るゝとは西域の虚談、大佛の鼻の穴へ傘さしてはひるとは南都の實説。大は小をかね、實は虚のごとし。こゝに攝津國豊島郡櫻井谷水原氏の庭中に一の奇石あり。その凹かなる所おのづから琵琶の湖に似たればとて、庭湖石と名づく。水を掬すれば杜甫が月を手玉にとり、口をす、けば孫楚が齒みがきに流れをからず。此の石もとは三草山の麓にありしを、民草のふかきめぐみの露の玉、轉ばしあへぬ心をはこびて庭中の物とはなしぬ。これもまた石より重かるべし。

手水鉢ひくや千びきの石山にむかへばこゝも琵琶の海づら

猫賦

鶏のあしたを司り、犬の夜を守る、なべて斯様のなれ養ふべきその類、あまたなるなかに、鳥は心をなぐさめども、摺餌まきゑの煩はしく、魚は樂しみを知らずといへども、子子すくふに暇なく、狎は干果子のあたひに乏しく、猿は虱とるてふわざのみ。ともに飼へるに損ありて、益なきものなるべし。こゝに一の小畜あり。その飼ふや飯をもてす。蛇貝一つ鱧ふし一連にて、一年の儲けに事足りぬ。腮に逸物の毛をかくし、眼に六つの時をきざむ。あら玉の年の始めは、若水に手水つかひて、七くさ爪をとぎ侍るも、妻こふころの心まちにや。たま／＼涅槃會にもれたるは、屈原が梅を忘れたる類にやとおほつかなし。夏は牡丹のかけに眠りて、胡蝶の夢にたはぶるゝも、つひに垣根にうつまれればかまどに入りて、灰毛の名に負ふもをかし。こまと呼び、からと名づけ、虎はまたらに、鳥は黒し。しろがねの貌は西行が手に觸れ、首玉の綱は女三の宮にひかる。八蜡の祭にあづかりては、孔子の嘆きをのこし、五つの徳を數へては、彬師が戯れをつたふ。昔より國に盜あれば、將をえらびて伐たしめ、家に鼠あれば彼をやとひて取らしむ。大凡桁をはしるもの、牆に穴ほるもの、懸想文ひ

きて名をたつるもの、棗くらひて人を嚙むもの、油嘗むるもの、器かじるものも、かれを恐る、こと甚しく、一度きつと睨むときは、手足を措くところなし。彼がかたちの虎に似たるも、その武く勇めるによれるや。されど虎死して皮をとむれども、鬼の犢鼻褌にかくばかり。六乳の皮は三線となりて、なれし昔の膝枕、思ひの色音にひかる、も、またやさしき方ならずや。

童のために乳の無きをなげくことば

昔大江匡衡も、斯かる憂き目にあひしにや、ちもなくて博士の家の乳母せんとはとか言ひて、十日一步の乳附をやとひ給ひしとなん。むしろ嬌兒の乳をたつとも、郎が慇懃をたたじとは、古樂府にも見えたり。飯なくば蕎麥でもくはん。紙なくば手ばなもかまん。錢なくば使はでもありなん。地頭に譬へし泣く子を抱へて、乳のなきこそ悲しけれ。

舌鼓うつほどたとんと出でずともち、となりともち、出でよかし
日を経てかた／＼の乳いでにけり。

鼠をせむることば

偃鼠河にのめども腹に満つるに過ぎず、汝なんぞわが肉池を飲みほして、わが印石をして顔色なからしむるや。夜もあけば猫にはめなんか。日が暮れば陥しに掛けんか。地獄おとしか極樂おとしか。

罪の輕重をますおとしにはからば、漢の張湯がためしなきにしもあらねど、もし白鼠と内縁あらば、大黒殿のおほしめしもいかゞと思ひて、石見銀山一等をゆるし、鼠衣をはぎ、鼠算の過料をとり、壁の穴々、けたの隅々、のこらず追放するものなり。この趣を西寺の老鼠より、若草のはつか鼠にいたるまで、よく／＼申し聞かすべきものなり。

むらさきの外に憎きはに／＼いれの朱をうばへる鼠色かな

なつくさ

おのが五月の雨のなごり、猶霽れやらで、名高き雪も消ぬといふなる、日吉の祭も近づきぬらし。あらがねの土のこと用ゐる比は、暑氣の見參とて、世にか、づらふ生若人など、袷がさねに麻ひきはり、緞子肩衣のかたも、雨づ、みにうちひしけて走りありきつ、扇はち／＼聲づくろひし、つぎつぎしからぬ時候にごきぐゑんようなど、笑みふくめたるなりの、すくわいめいて憎しや。あなうの花の咲きそめしより、さなきだに心のすね／＼しき、すねくさてふもの、夏草と共に茂りあひて、立居るべくもあらねば、公私のことも大ながしに流い、ひたごもりに籠りてのみ過い給ふ。れいの筆まめの本性なれば、すいがへしの淺草紙の鼠いろなるに、手習の様に、

此の頃は世をすねくさのうみ果ててたゞ膏藥をねるばかりなり

ごくねちのさうやくにはあらで、頭のさうやくをだに得せねば、おどろのかみのおどろくしう、さながら大津繪の鬼かと淺ましう、月代はたゞ稗藪のごとたかうなりもてゆくに、烏賊の甲もてつくれる鷺も立てまほしう、そこらかい撫でし爪の上の垢もしるく、汗くも悪臭くも、哀れにもあつかましくも、虱まづ落ちぬべし。前栽の爲體、草木のた、すまひも、何がしのえせ受領の下屋敷だつ心地して、たどくしき木下闇に、やぶからしのいやみ絡みて、あるじのむしやうもあらはるゝに、小百合の誇らかに苔もたると、わすれ草の生ひいでたる、これもまた松ならねど、種しあればと打ちうめかる。軒近う南天の花のさ、やかにかつ散るも、蜘蛛の巣につ、まれて露おもけなる哀れなり。誰が家に濕はらふとてたきしめし、蒼朮の煙の思はぬ方になびきぬらん、伏籠にむせるしめしの香の、わる臭きに通ひぬるもむさし。裏ちかく水くむ姫の竹のかさ、阿彌陀かぶりし、かめのこに手桶うち置き、車井の繩かいくり、鄰のながしの窓見れつゝ、あなまさなのていけや。天のそこもや抜けつらめ。出で入りに辛きめするといへば、さなり、忌々しくして焚いつかぬぞ。朝毎のうれへなり。明日のみつけの實に何よけんなど、己がじ、うたへ言ふ。門守の小むすは、此方のより四つ許りもおよすけたるが、さみせのこと手まさぐりて、師にうけたる手な残い給ひそと、母の制するに畏まり、いと黄なる聲をからびたる絲にかき合はせつゝ、尾花といふもことわりやと、ほのめかしたる、よし

やあしかりとも見えず。栢走る鼠の米の櫃かぶる心地ぞすめる。此方のも聞きとりわざに、聲作りしてまねび出づるを、あなかまと母の止むれば、三つになれるおとの、同じ如う、と叱るもらうたし。あこはし、未だせじ、こちへとひき寄するに、否といひて驅け出でんとするを、辛うじて引留めつ、やをら手をやれば、例の漏らしつ。聴て濕りたるもの脱ぎかへさせ、さきの伏籠にうちきするにぞ、臭さもうち添ひ侍りて、鼻持もならぬものから。

橘 庵記

右近の橘か、江南の橘か。そもく戦陣問答の、名にたち花の小島がさきか。田道間守が植うる所か。橘諸兄公のめでし所か。そもく市村家橘が家の、目にたち花の紋所か。その狂言の種となる、工藤が庵に木瓜あり。主人の庵に橘あり。奈良の帝の「萬葉集」には、實さへ花さへとほめことばを殘し、唐人の「三體詩」には、虚橘花開と寐言をいへり。陸續がはづし物、親孝行の部に入り、司馬相如が筆でんがう、夏熟すと書きちらせり。むかしの人の袖の香は、さつきまつはなの先に匂ひ、一にたち花、二にし、牡丹とは、みつ子もよく歌ふ。橘奴は赤坂奴にあらず、橘仙は下手碁にあらず。橘町にをどり子あり、橘井に名醫あり。一日加古川行國といへる本草者來り問ひていはく、橘は蜜柑なり。虚橘ははなたちばなり。平地木は山たちばなり。同名異物いづれなりやと。主人もとよ

り麻布に住すれば、きがしれぬとぞ答へける。

右は麻布にすめる沾頂子のもとめによりて書けり。

鉤匙橋記

鉤匙橋は長者が丸の流れにかゝる。その源や六孫王經基の王、東夷征伐のかへるさ、武藏野を過ぎ給ひ、歸鴈の列を亂るを見て、鴈々みつ口、あとなが先へいたら、かうがいとらしよと宣ひて、御佩刀のかうがいを投げ給へば、化して一の橋となる。名づけて鉤匙橋といふと云々。猶尋ぬべし。その所知れずとは、昔より江戸の名所をほりかねの、いづれ作者のにけ水にや。武藏野の廣きことどもを、草のはつかにつまんとならば、いかでかは。されば「鹿子」の所まだらに「砂子」のよむにたらぬ、大方歌人の居ながら知らるゝ名所も、まづ此の位なものなるべし。物かはり星うつりて、富士の煙出も引窓を閉て、飛鳥川の瀬ぶみもかはるものから、疝の藥をもとめずして、井手の蛙をかけほしにし、大工童にあらずして、長柄のはしの木端をさらふ類もまのあたり、三股のながれ二またとなり、薬研堀もうまるなりと聞きて、此の橋のほとりに住める人の爲に、これが記つくりて、朽ちぬ柱に題すといふことしかり。

源はかくぞと人につけのくし鉤匙橋をさして聞きなば

背面達磨贊

八萬四千のお敵に對して、拜みんすにえと、後むきしは、富の緒川の流れの身、しなてる屋の片岡か。如何々々。

雪女贊

雪の白きを白しとするは、脛の白きを白しとするが如きか。脛の白きを白しとするは、肌の白きを白しとするが如きか。雪は女の肌にして、女は雪の肌なり。怪しきを見て怪しまざれば、怪しみおのづから消ゆるとなん。

名にしおふ師走女の化粧より空おそろしき雪のしらばけ

芭蕉庵桃青翁贊

身は芭蕉葉のひろきに居て、風流の細きにたどり、心は風雲の思ひをたちて、花鳥の情にうかる。僧か俗か、はた隠者か。これこの一箇の誹諧師。

から誓文

四方赤良左に杯をあけ、右に天麩羅を杖つきて、以て塵いていはく、來れわが同盟の通人。汝の耳をかつほじり、汝の舌をつん出し、慎んでわが御託を聞け。いにしへ天地いまだ分れざる時、混

沌としてふはくの如し。その清めるは上りて諸白となり、濁るは下りて中波となる。酒はこれ狂水と、天竺の古先生が一國なこといつても、また百薬の長か半かと、きれかはつたる飛目あり。鄭聲は淫なりと、宇宙第一の文に書きなんしても、とかく浮世はつてんくとは、由良殿の金言なり。凡そわが同盟、どうまるつた孝弟の實事に、風流のやつしをこじつけ、意氣でも慷慨でもなんでもかでも、よりどつて十九文、詩歌連誹のめりやすに、琴棊書畫のはやし方、拍子を揃へて打つておけ。もしきんならば汝を用ゐて禪とせん。もし酔ひつれば汝を用ゐて袖の梅とせん。もし巨川をわたらば汝を用ゐて猪牙舟とせん。今日のこと四杯五杯ですます、一杯々々また一杯、ねぢあひへしあひすることなかれ。疊にこほすことなかれ、天水桶となすことなかれ。飲食すること流るゝが如くにせよ。そら時宜をして悔ゆることなかれ。もし酒盡きば、銚子をかへて以て飲め。もし肴あらば懷中箸を出してもつて行け。つゝしめや。

この盟にあづかるもの十餘人、酒上熟寐をはじめとして、即座に酒を下すこと、瀧のごとし。時に安永三年甲午。

疊師善兵衛衣の奉加帳募縁、疏

それ大恩教主のおもてがへ、涅槃の牀をふみ給へば、一疊二疊の長き手間、あつらへつべき人もなし。こゝに御存じの善兵衛、いつまでか世をふる疊と、兩のびんごを剃りこほち、やらう疊の様をかへ、墨の衣の奉加せんと、京間田舎間おしなべて、西は琉球高麗縁、南は紀路土佐おもて、十方旦那にあふみ路や、われからさきのひとつかみ、報謝をまつ青疊、五分でもひかぬ五分縁に、さしつけがましき御願ひの、もつれぬ糸口針のめど、通れくとお叱りなく、勸進帳で世をおくる、おくり狼衣の奉加、狸のきんたま八疊敷、南無あびら纏縁と敬白。

報謝米の安く永きとし御奉加帳にみな月のころ。

大根太木塵積樓ノ記

世の中の塵し積りて山とならば、山籠りせん塵のこの身もと、見世先の柱に押し、いつも月夜につき米の、飯田町のほとりに、出格子の透間をうかひ、ひとり二階の物干に上りて、竿竹のよをのがれたる男あり。夫れ大隠は朝市にあり、雪隠は露次にあり。四つ切の出入りしけきゆふべ、日なしかしの喧しき日は、許由が耳を錢湯に洗ひ、伯夷が蕨を八百屋にとり、松風のねを菓子屋に聞き、妻木の道を眞木河岸にたづねて、人遠く水草清き所よりは、中々不自由ならず。常に堀留のほりするものは、酒のさの字もさのみにて、もちの木坂に心ひかれ、眞名いた橋のはしくれよりは、かんなの文の中坂に眼をさらし、古金の古きむかしを慕ひ、姫糊の秘め置きし巻を繕き、文車の文に車留なき

を喜び、塵塚のちりあくた、捨つべからざる世の中の、塵し積りて山田屋とも、塵積樓ともいふべかりける。

月見の説

それ月は久かたの空にいまして、地を這ふ裸蟲などの分際にて、狎れ玩ぶべきものにはあらねど、ことさへぐ唐國には、月出でて皎たりなどと、桑間濮上をそ、りしよりはじめて、漢魏六朝三唐にいたるまで、そのことば北斗をさへ、その影屋梁に満てり。また足引の大和うたには、ならのはの名におふ集より、世々の撰集に載するところ、月弓の引手あまたに、月の舟にもはしけがたし。されば生きとし生けるもの、君は三夜の三日月さまより、十九たちまち二十日宵やみの夕に至るまで、いづれか月をめでざりける。そもくこの月いかなる物ぞと、破れたる壁の隙間かぞへて、月の光に書を閲するに、その月中の混雜なること、數ふるにいとまあらず。まづ弓の師匠の何がしが女房は、老いせぬ藥を盗みてかけこみ、吳剛といへるむくつけ男は、まきわりをもちて桂の枝をこなし、うさぎは米をつき、蟾蜍は油を絞り、その名もつきの色人は、月宮殿の見通しにて、白衣になりての大一座、霓裳羽衣のをどりがあるのと、月のかつらの根も葉もなく、月の鼠のその尾にとりつき、詩人は酒家の店先に、二合半輪の秋をめ、歌人は居ながらめいづくに、てる月次の定會の、夜食にこそ

はありつきけれ。また連誹となり下つては、百韻に月いくつと安賣の煙草入の思ひをなし、月の定座は何句目などと、役棧鋪同然にあけて置くこそ淺ましけれと、如何に腹ふくる、わざなればとて、三黄湯のたてくだしにいふも、また理窟くさし。これなん宋儒の袖頭巾氣、目ばかり出して空をうかふに似たり。それ造物の大なるや、月夜よし夜よしと無上にうれしがれば、月やは物を思はすると難題をいひかけ、花はさかりに月はくまなきをのみ見るものかはと、榮耀に餅の皮をむけば、罪なくて配所の月をと得手勝手なる願ひをも、まじりくと聞いて御座るか、但し聞かずに御座るやら、音もかもなき上天のことは、知らぬが佛も聖人も、もとは一つの裸蟲なり。われ造物者の無盡に入りて、大塊われにかしつけの日なしをかせしより、詩歌連誹の紙屑拾ひとなりて、籠の目にふれ耳にきく、雪月花のことにおきては、他人のやうにも思はれず。わけて秋のもなかには、桂男へ對してもひと趣向せねばならねど、もとより五侯の門に入らざれば、洲濱にたてる松かけより、雲居の月も眺めがたく、千金の儲けに乏しければ、船のうち浪の上に、遊女の月見も約しがたし。いづれもともに猿猴が、水の月よとあきらめて、江戸の田舎のかたほとり、高田の馬場の松かけに、さらしなや姥捨山のそれならで、信濃屋なる茶屋の門に、十五郎てふ名ものかしく、三五夜中の團子田樂、枝豆のまめ人らを語らひ、芋の葉月の十三日より十七日まで、いつも月夜に米のめしの大施餓鬼をなん始めける。

御信心の輩は、詩歌連誹の多少にかぎらず。即時一杯のさかてを費して、永代不朽の盛名を、金看板にとゞめざらめや。

八月十三夜月を見侍りて

朱樂菅江

染出来ぬこんやの月をながむれば秋の最中もたしかあさつて

相場高保

十四夜高田の茶屋にて

月をめづる夜の積りてや茶屋の唄も遂に高田のぼゝとなるらん

春日部錦江

十五夜月

ぶんまはし秋のもなかへうつ針の照りとほりたるまんまるな月

四方赤良

十六夜月

ゆふ霧のまよひもいまだ霽れやらで出でし藤屋のいざよひの月

出来秋萬作

十七夜月

おもしろや月のかゞみを打ちぬいて樽もたちまちあきの酒もり

白鯉館卯雲

高田五夜月といふことを

團子夜中新月の色いつゝさしすこし焦けたはくもりなりけり

濱邊黒人

あかず見ん秋の五夜にむさしの名だかき月はそらにすめく

唐衣橘洲

病にふし侍りて高田の月のまとるにも行かざりければ

酒ならぬくすりを飲みて見る月はくもよりもうき風のかみかな

春日部左衛門尉へ遣はす感状

今度於三高田馬場ニ五夜之間乗テ月ニ而遂ニ筆戦ニ候之刻。即時ニ飛ビ越エ出雲八重垣ヲ。踏ニ破リ五言之長城ヲ。得ニ李杜之體ヲ。探リ山柿之腸ヲ。埋ニ酒池ニ焼ク肉林ニ之條。前代未聞無ニ比類ニ者歟。自古來ニ聞ク下以テ馬度原者上ニ未聞下以テ膝栗毛一degreeル原ヲ。春日部之振舞希代之珍事也。因テ爲テ恩賞ト。一期之間詩歌作リ取リ宛テ行フ者也。者茶屋之拂方感状合セテ而如レ件ノ。

赤良在判

安永八年八月十七日

春日部左衛門尉どの

詩歌兄弟對面のつらね

曾我十郎百人一首

十郎「秋の田の、かりほのいほりに横木瓜、一家そろってみな川の。五郎」主人相識らず、偶坐林泉の

ためになる、お客にはじめて哀江頭。十郎「めぐりあひて見し優曇華の、はなの色は移りにけりないた

四方のあか上

づらに、十八年の天津風、雲のかよひ路ふきや町、赤澤山のさかひ町。五郎「椎の木山月半輪の、秋の野すつたる一戎衣、風つようして角弓の、一の矢ぶしに獵馬より、射落されたる無念さを。十郎「物や思ふと人のとふ、人に心をおきの石の、人こそしらね乾く間は、なにはなる身をつくしても。五郎「あはん他席の他郷より、此の場を去らぬ三下り半、憑つて兩行なく涙。十郎「ひるはきえつ、夜はもえ。五郎「頭をあけて頭をたれ。十郎「むねに繁れる八重葎。五郎「冠をつきぬく三千丈。十郎「尉と姥とは高砂の、まつもむかしの友千鳥。五郎「小苑鶯歌やみくと、長門朝暮にくるへる蝶。十郎「蝶よ花よと花さそふ、あらしの庭の雪ならで、むらくばつとうち散らし。五郎「百萬一時につき破り、寶劍直せんべいを、ぱりくくと噛むごとく。十郎「その本望をたつた川。五郎「心をきたふ鐵嶺頭と。十郎「は、二人「うやまつてまうす。

大根太木十五番狂歌合判詞奥書

そもく和歌のうら店に借宅し、泉がそまつなる身の分にて、批判を何と正札附の符帳をもわいだめず、和歌三神をかけねなしの安賣して、十露盤のたまをみかける、句々も三五の十八と、おきまどはせる十五番の歌合に、ほつちりの判をくはふることに、さばへなすかみの町人の宿めきたれど、給金をつくば山のかげよりもしげく、宗旨は難波津のふりを慕ふあまりに、神棚の夷歌をまくらごととし

て、鼻歌はやり唄にもかへぬれば、これや三井が見世の貸傘ならぬ、六百番千五百番の判取をまねびて、溝板のあつかましく、小便無用の辯をかいつけぬれば、露ぶつかけのもり侍るとも、御免素麵のながき嘲りをのこす事なかれ。安らに永き七のとし、文月十あまり六日。

肖 柏 贊

人に三愛の癖あり、牛に雙角のあらそひなし。雲居の月の前には、玉しきの露ふかく、二十日草の花の下には、はだ巻のひも長し。後中書王に後ある事を知り、種玉庵に種をのこすと聞く。その源きよく、その流れとほし。

日くらしの日記

女もすなる日記といふものを、野郎もしてみると、梓弓やたての筆とうでて、花薄ほつきありきし野らまはりを、そこはかとなく書いつく。その懐のかみなつき、空も小春の長閑なる日、友とする人三人四人、夜があげたら詩つくらんと、からうたの礎てふ書ふところにして、物見ぐるまの牛込をおし出す。葉店の里すぎて、司天のうてなのもとを行く。空にも酒星はあなるものをといへば、かたへの人、地にも肴町ありといふ。こゝに日ごとに千句のことばをつどへて、それが判をなすものあり。そのきやうさくなるを、壁に押し置けるを見れば、石でする物石菖蒲のふとんなど書けり。清少

納言が笑本よむ心地す。津久戸明神の宮を過ぎて、冷水ばんそにかゝる。夏ならば立ちよりても酌むべきを、この寒さには御免候へかし。江戸川をこえ、立慶橋を渡り、諏訪町を北に泉松山にのほり、牛天神のみまへに額づく。かたへに一つの石の祠あり。苦むして戸ほそなし。白駒がいふ、これ貧窮をまつる。よく人を禍福す。むかし小日向のほとりに住める人、家の内の貧を逐ふとて、窮鬼のかたちをつくりて、此のところに祀れるなり。その神體は何ものか取り行きて、ほこら許り残れるとぞ。やつがれ多年祈らずとも、此の神の冥助を得ること、形の影に隨ふがごとし。法樂に、

澀團扇あふけばいよく高楊枝かみな月とも思はざりけり

千里亭白駒

澀團扇ほねも折れねば柿頭巾かぶりふるとも福やいのらん

千びきの牛石のもとより、半天の鳶坂を下る。一むれの羅綺路もさりあへず。曹司谷の影供にまうづるなるべし。そが中にいづれの深窓に養はれ給ふならん、年はあなにくの十八ばかり、長袖の地をはらふは、いまだ春ならざるに何れの花ぞ。蟬鬢の日にすぎとほるは、いまだ盆ならざるにいづれの燈籠ぞ。何やらん女の童にさゝやきて打笑めるなど、楚の國の色男が垣間見し、東鄰の名代のむすめ、阿保親王の息子株が、狩衣のすそを竹馬ぎればど切りてやられし、はらからすみも、中々もつて

數の子ならず。只懣むらくは、口もとのや、廣らかなるぞ、白きたまのすこしき瑕とやいはん。人々の心も空になりて、足はあとへくと引かれぬるをかし。傳通院のうち門を左に、小石川の馬場にいたる坂あり。名はわすれたり。赤土の上に青き苔みち、白き水のながるゝに、黄ばみ落ちたる木の葉の散りしきたる、なんでも五色に變るよと、うちうめかる。午の貝ふく比、隙ゆく駒込を経て、や日もたけ町をすぐ。こゝに似足が縁あるものあり。その門を過ぎて其の室に入らでやはあるべき。しばしの間此のあたりの酒家にて待ちたまへといふ。その名をとへば石垣何某とかや。定めて名は堅く、人はやはらかならんかしなどよみつゝ、行きノゝて、荷附馬の追分にいたれば、年あき前の傾城が窪に近し。酒ばやしの杉立てる門に似足が来るを待つ。沽酒市脯はくらはすとかなふなるを、ろにご讀みろにご知らずなどかたみにわらふ。やつがれ割籠とりいでて椎の葉に盛るとひとりごちたるに、みなひとつづゝとりて食ひけり。これより道を北にとりて、世尊院まへとかいふ所を過ぎ、枯れたる木にも花さくてふ、大悲さに詣で侍りて立ち出づれば、修行者の先だてるあり。ある疎らなる垣のやぶれより、白き腕さしいでて布施するさま、近ごろ石燕翁のゑがける百鬼夜行の圖に似たり。錦江をかしがりて、

石燕に見せたら直にかきねから手ばかり出して内に待伏

まづ足下あしもとのあかるきうち、さんさきを急いそぐべしと、行くみちの右に一つの石碑せきひあり、をうなな、おもてとかや。享保十八年丑十月十七日としるせり。これはかたるの女の死ししたるを埋うづみて、七面ななおもてにまつれるとぞ。「玉造小町たまつくりこまち」の文も思ひあはせられ侍り。此のわたり、野中のなかの清水しみづ柏木かしわぎの井などありといへど、武隈たけくまの松の木で鼻はなつつこくりし老父らふもみえねば、それとしるものなし。知れずば先の辻番つじばんに問はんか。いぶせき宿やどに、くれ竹くれたけのよをあみて、煙けむりぐさをたくはふる器うつを造つくれるものあり。莊周しやうしゅうがいへる緯蕭ゐせうの人の類たぐひひにやとゆかし。そのむかひに種樹しゆじゆの家あり。千草萬木せんそうばんぼくを植うゑて、郭橐駝くわくたうたが傳たづむ心地す。「古文眞寶こぶんしんぼう」のはなしに、しばらくむだも忉利天たうりてん、鶯坂ういさかの鶯飛ういひんで天に至りし、乙女の姿すがたもわすれたり。猶も谷中やちゆうをさして行く。笠森稻荷かさもりいなりの宮居みやゐをみれば、木立こだちものふり鳥居とりゐたてり。二坏ふたつきの土器かはらけにしろき色いろとくろき色の團子だんごを盛りて、小女こんなのききの人を見る毎まに、米こめのかへ土つちのかへと呼よぶ。あが友とも何がし秋あきの比ひより、

醫者いしやも手をとるやわれこの人にしてかかるへのこの病あること

と詠えいじて枕まくらにふしたれば、いでやこの御社みよしろに、祈いのらぬことはあらがねの、土つちのたご捧さげつ、なもかさ守まもの神かみ、あが友ともがきが、持つまへのたひらけく、藥代やくだいの安やすらけく守まもらしめ給たまへと、申まをしていでぬ。是こゝれは過ぎし明和めいわの比ひ、おせんといへるいらつめの、茶ちやを侷すめて、人の心こゝろを浮うかせし舊ふるき跡あとなり。

葛飾かどしの眞閒まゐまの手古奈てこなのたぐひにして、なら坂ならさかや兒手柏このてがしはのふたおもて、ひともとの陰かげとたのみしが、ともかくにもねぢ錠じやうの、鍵屋かぎやの錠じやうもぴんとおりて、またも二度ふたたびあひかぎなく、腰こしかけし牀しやう凡ぼんの足あしさへ跡あとかたなく、兒手柏このてがしはの根ねつこをも、いづこの里さとへ掘ほり移うつしけん。とんだ茶ちやがまが藥罐やくわんと化やくけて、松風しょうふうのみぞ音ねたかき。人間にんげん萬事ばんじ早馬はやうまのごとし。かたぐ油斷ゆだんすべからず。

笠森稻荷大明神 鍵屋阿仙稱美人 土器碎爲土團子

只今唯有三煮花新ナル

又

面楫似足

笠守神祠日暮邊 醉中相伴例諸賢

殊令拙者ヲシテ頗ニ懐ハ古ヲ

曾識高名有ニコトヲ阿仙

日ぐらしの里さとに到いたれば、七面ななおもての社やしろあり。衆僧しゆそう讀經よみきやうの聲こゑ高たかし。養福寺やうふくじといふ寺てらに、自墮じだ落らく先生せんせいの墓かぶあり。先生せんせいは江戸えどの人ひとなり。五君ごきんに鞍くらがへして志こゝろを得えず、髪かみを唐輪からわに結ゆひ、齒はをかねにて染そめ、伴狂やうきやうして誹諧はいかい師しとなる。庵いんを無思むし庵いんといひ、軒のきを不量ふりやう軒けんと名なづけ、齋さいを捨樂しやくらく齋さいと號なづけ、坊ぼくを確連かくれん坊ぼくと稱なづす。昔むかしの反古はんこ二卷にまきをあらはす。その中に歸去來ききらいの辭ことばを評ひやうして、淵明えんめい元來げんらい金持かねもちなるべし。わづかの荒地あれちをももちて、口くちをきくこそ憎にくけれと、一口ひとくちにはり込みこみし癡しれ者ものなり。鐘樓しゆろうによりて銘なづを探たづねれば、鑄ちゆう三華鯨さんげきう工こうと

いへる、鯨の字にヲの字のすて假名を彫りつけたり。あまりに淺ましく、此の銘なからましかばと覺えて、

すてがなか又すて鐘か知らねどもおもしろからぬを文字なりけり

妙隆寺の庭より修性院の山つゞきは、寶曆六つのとし庭作りのたくみ、岡扇計がつくる所にして、日暮の宮といへる、小さき宮居の前に石ぶみ立てり。

富士筑波あひの木がらしひゞく庭

といへる句を刻む。紅葉の錦折り得顔に、二月の花毛氈もこれには過ぎじとおほゆ。何がしの國の守の、宿昔青雲の御志にて、草創し給ふ御寺は、とりもなほさず青雲寺といふ。太田金吾の船繫松あり。桑田碧海手の裏を瀧せるが如し。石碑あり、大きな霸王鞭を二十ばかり重ねあけたらんが如し。木挽町の何がしが建つる所にして、入江氏の文をきざむ。千とせの松の前に木挽とは、ちとさしあひなれど、入江といへる名字こそ、昔の面影に似かよひて、おもしろし。もとの道にかへりて、紙くふ未のさがりに、本行精舎にいたる。櫛を叩いて案内すれば、上人よろこび迎へものして、廬山の禁もけふ許りはと、何くれともてなし給ふ。おのゝ懐にせし木の實などさ、けつ。稍ありて東面の障子おし開けば、物見塚凸に、筑波山凹なり。田の面田の字のごとく、人家人の字をならべ煙

な、めに霧横はり、空あかるく、地くろし。白日さとの名にし負ひて、明月山からぬつと出で、庭に枯れたつ萩薄の根より、京の遺戸の板廂まで、三竿ばかりさしのほれば、人々こゝぞとかの礎に柱だてして、五七言の長城を、この城跡につくり出せしも、繁ければ皆漏らしつ。物見塚に筑波山人の書ける碑文あり。錦江、

物見塚むかしたづねてふみ見ればみぎと左につくば山人

ともなひし百順、筆とりて、繪にうつせるも興あり。去年の今日なん、朱樂菅江、中島平五郎を伴ひて、この御寺に遊び、十月の望二客と同じく、赤壁の月見ることを興せしが、一人は枕上にふし、一人は泉下に歸す。死生存亡は委細承知なれど、あまりに造化も胸欲なり。けさ菅江のもとより、見し月はそしてすめるや曇れるや一人は死客一人は持客

樂しみ極まりて哀しみきたれり。かうめいりては面白からず。また逢ふまではさらばくと、暇まうして立ち出づる。一寸先は闇の夜の、牛の角文字いろは茶屋、戀の手習見習はんと、玉簾の外にたすめば、女三の宮のおんばともいふべきか、天のうすめの命ならで、胸乳あらはして立てり。膚は生漆のごとく、目は團栗を欺く。されど畫く黛の艶なるは、一里塚の榎のかけより、三日月の影ほのかに見ゆるにたぐへつべし。

立白不_レ及_カ美人ノ腰_ニ
數年ノ眉黛_ヲ寫_シ誰_ノ描_ク

簾外_ニ立_テ如_シ野等_ノ猫_ニ

却_テ似_{タリ}證文_ノ一文字_ニ

わが輩の留まれるを見て、走り入りて坐す。三人四人と竝びて、缺けたるを補ふなるべし。あなはしたなの遊女や。わかきものでふ従者やなき。何がし居士の三平二満、あけばまた休まぬといへるも、かかる際にはあらざめりと、そこ／＼に見過して、月夜鳥の古巢に歸りぬ。茲に一日のうちのあらましを書いつけて、千里の外の日記にたぐふもをこがましけれど、家の戸庭を出でずして、おぬひの道行と名づけぬるわざを、よき方人として、日ぐらしの日記ともいふべからん。兎まれ角まれなけやりてん。

冬日逍遙亭詠夷歌序

たはれ歌は人のわらひの種を蒔きて、萬の人の口まめとはなりけらし。あるはうき世をまゝのかはらけ町、くだけてもとの木網が落栗庵、あるは本町二丁目の、絲屋にあらぬ、腹唐の秋人がよきぬた庵など、月次の會たえずぞなんありける。こゝに京町何がし屋のあるじ、此の道をたしみて、名におふ南瓜のへたならぬ言のはを述べ、梨壺の五町のうらなる逍遙亭の山里にして、ともに心をやり水の面目と、今日のまとのあるじまうけをなん爲しけらし。われも硯のすみの江の岸に生ふてふ忘草

の、寐ほけし夢のかよひぢも忘れがたく、かし編笠にしるぶ山、又ことかたの道も辿らまほしく、ただ一杯の茶漬食ふ間に、はしがみの端をけがしぬ。たとひ時うつり客さきり、むかひの提灯行きかふとも、みせすががきのいと絶えず。繪半切の末ながう、くどうもく、此の會に、おいでなんしといふことしかり。天明と聞ゆる二とせ霜月二十日あまり四日になん。

狂歌師の引きつくろはぬ衣紋坂うち連れてゆく晝中の町

竹本政大夫碑 文起に代りて作れり

やつがれ二葉のむかしより、くれ竹の一ふしに心をこめ、豊竹の生立は、筑前少掾に學び、其のち竹本の風を慕ひて、政大夫の門に遊びき。弟子襪線の才乏しといへども、針にたとへし師にしたがひつゝ、かの秦皇の松に許せし、位山にもほるべくなんなりにたるを、下里巴人のいやしき曲をもて、殘杯冷炙のむしろの末に侍ること、丈夫の望む所にあらずと、ひたすら先師の留め給ひしかど、好める道の捨てがたく、あながちにも止め侍れば、そこは住吉の人なり、岸の姫松色かへぬ、名は難波江の何とや呼ばんと宣ふ折から、錦大夫來あひ侍りて、住みこし住吉の住大夫こそ、つき／＼しからめなど、一言して定め給ひしも忘れがたく、ことし文月先師政大夫十あまり七かへりの秋をむかへしかば、その流れをくみ、その源をたづねて、大江戸新堀の邊にこの三人の筆の跡をうづめ、思ひ

を千引の石碑にのぶることとはなりぬ。其のことばに曰く、

竹あり竹あり

根を同じうして節を異にす

くれ竹の緑枝折れ

紅葉の錦腸を断つ

千ひろの陰に曲を傳へ

一字の恩に名を得たり

此のいしぶみを徴として

仰けば高く鑽ればかたし

天明元年辛丑孟秋十日竹本文起建

木兔引贊

衆鳥來りてこれをわらふ。其の智には及ぶべし。木兔ながらこれを引く。その愚にはおよぶべからず。

小鳥どもわらはばわらへ大方のうき世のことは聞かぬみづく

四方のあか下

向島賦

花のお江戸の隅田川、待乳山から向島の景色は、三圍のみめぐりありきても、洲崎のまさごのよみ盡しがたし。春はやう／＼土手の若草火繩とともに萌えそめ、牛島の角ぐむ蘆酒樽に錐もみし、軒端の藤波見世先に咲きかゝれば、池のかきつばた川骨の色をあらそふ。生酔の目に青葉して、山ほと、ぎすおちかへり啼く比より、屋たか屋根ぶね似たり猪牙もあひをつなぎ、あゆみをかく。秋の千葉の山の紅葉、はなの高雄の色をあらはし、ぶら提灯のぶらつきし果ては、燈籠俄に心かはり、いつしか時雨に落葉きき、雪見酉の町のうき船に、火燵の灰のかき立てて云ひつゝくれば、みな源氏の宇治十疊のかし座敷、いせ物がたりの乗合船のはなしめきたり。日も暮れぬ、はや船に乗れとは、むかうへ渡れといふことか。いざこと問はん、あそぶ氣はありやなしや。椎の葉ならぬ蘆の葉の、筏にいり酒のあらひ鯉をもち、山椒の實は小粒でも、蒲焼のうなぎの長さきに伴ふ。吸物の赤味噌あかすして、どんぶりのどんぶりはまる生簀のほとりに、藝者の三線堀の名の薬研でおろすかとうたがひ、太神樂

の曲太鼓、日毎に一萬度もまはるべし。斯く浮かれたる世にあれば、都鳥のはしと足のあかきも、秋葉の猿の尻の様に覺え、晉子が夕立の句も、稻荷の狂歌の額のことかと、己が田へひく水草の、きよき所の外國より、北のくにとははひわたるほど近きわたりの、四方のながめは、名におふ葛西の太郎月より、庵騎の大黒屋、夕越えくれのせはしきまで、いづくはあれどむさし屋と、地口有武が求むるにまかせて、紫の一本ならぬ、赤良が一筆しめすになん。

狂歌 如湧 角田 汀 短冊 頻ニ飛 秋葉ノ庭 向鳥ノ風流 從此始

武藏屋ノ額 權三ガ亭

はやうしもおそ牛島もよどみなく生洲のこひにこがれよるふね

腹から秋人

いつ見ても景色はたれかあか味噌の鯉と戀とにさしむかうじま

酒の上不埒

みめぐりへたえずに船のつき雪や花のお江戸の眞むかうじま

地口有武

うしじまの亭主のすきの赤味噌は時を忍ほしのこひの庵丁

加保茶元成春帖手鑑序

こ、に京町何がしやとうたひし、家の風もしるく、道理でかほちやの元成は、たはれ歌のせい低からず、ほんに猿丸大夫格子、むかうの人丸赤人や、おや玉つしまのおいらんより、其の名は一倍高かりける。ことしも例の酔心地、内所にこそりあふみのや、鏡の山の手かゞみに、歌の趣向をたてたれば、かねてぞ見ゆる人々の、名におふ狂歌の染模様、霞の衣すそ長く、千歳の春をかさねざらめや。天明四のとし初春。

早稲田太神宮法樂の文并歌

これ天明三年癸卯のとし、卯月の今日にめぐりめぐれる小車の、牛込のさと早稲田の面に行きかふ馬場の、下つ岩根に宮ばしらふとしきたてて、高間が原にちぎ高しりて、大君の御代のまもりと仰ぎ奉れる、かけまくもかしこき太神の廣前に、おそれみくもなく白す。百たらぬ八乙女のみかくらまねび、久堅のあまの鈿女の俳優をまじへ、歌垣にあともひたて、絲みちに絲かきあはせ、大つみの大きやかに、小つゞみのさ、やかに、笛竹のよだれくり、太鼓のばちあたりも、すみ酒のすみやかに、御備へのみそなはし、みあかしの光を和け、ちりからの塵をおなじうし、おたひらにやすらかにしろしめして、この一村の民草の、汗水のひたくと、ひたの水田のたなつもの、豊かにめぐみさ

いはひ給へと、おそれみくもなく白す。

法樂躍長歌七首狂歌

法樂舞

やまと歌やはらぐうへをまたひとつ今日やはらけて法樂の舞

名所

居ながらに歌人となれし近づきやさても名所はさまんの顔

娘道成寺

時しらぬ山といり來て京がのこ娘のそでをかへすをぞ見る

柱立

宮柱ふとたちよればこの神はそもばんじやうの君のはじまり

菊慈童

少女子は夜はの嵐にくしけつりあしたの雨にかみのすゞしめ

二人椀久

松山をこえたる波のたまくしけふたりちぎりをかさね椀久

執著

はる風をさらりと柳にやりみづの時しもいまは牡丹さく庭

黒づくししばらくのつらね

濱邊黒人
祝賀賀筵

しばらく、桐油ほくち南蠻鐵、四位黒袍天地女黄の其の中に、女の又女狂歌の門、入らざるものあらざらんや。京橋中橋中黒の、黒いは北の水谷町、隅からすみゑの三番叟、色のくろい尉殿にさあらばす、玉たどんの粉、目黒の不動大黒天、九郎判官九郎介いなり、八瀬や小原の黒木賣り、甲斐の黒こま八幡黒、黒鴨の供黒仕立、香に黒方楊枝に黒文字、にがいは家傳の黒丸子、あまいは名代の黒砂糖、黒米めしの三きね半。その神明のおはします、芝のはまべの狂歌の御奉行、黒人新翁、おなじみの、黒髪山をそりこほち、頭もまろきかみ山、いざたちよりて黒主も、そのけといふ歌仙の中へ、つん出た四方の赤つ下手は、人主が造化、請人が菅江、大屋がうら住、腹からが秋人、後楯にはつがもない、わけて此の道すきやがし、黒極上の狂歌仲間、今日のまとるの御祝義に、おらが連中花道の、つらねが一寸口眞似と、ホ、うやまつてまうす。

桐づくしきり口上

そもく桐座の濫觴は、千桐坂きり桐長桐、天の八重霧たちこめて、暫くやすみの月切り日切り、

天のいは戸のきり戸口、きり、とひらく鼠木戸、神をいさめの切狂言、これ俳優のはじめとかや。きりきり屋根をふき屋町、きりかはつたる顔見世の、櫓太鼓のうちきりに、ちよきりちよとこれを眺むれば、さてもみごとな五七の桐、舞臺のきり破風きり目縁、切幕さつと花道の、春狂言には友切丸、夏は俄のひときり、きりの一葉の秋狂言、おつるこがねをちぎりにかけ、菊桐きくきりみききり、四季をりくの限りなく、ひつきりもなき引船から、棧敷中の間きりおとし、留場しきり場火繩代、ねぎりこぎりはわり込みの、人に揉まる、こきりこは、ほ、かぶりして膝つきり、しりもちきりもち切りさうめん、蕎麥切船きり亂切いもきり、かやのたんきり饅頭蜜柑、辨當よしかりめし、ありきりはこぶ吸物臺引、切目正しき切りだめの、菜つきり庖丁薙刀なり、雪踏にきりつけ桐の下駄、切りみせそ、る四つ切の、茶椀酒には青つきり、ほていふりにはきりがれん、源氏にきりつほ平家には、西八條のきりかぶろ、切子は齋藤太郎左衛門、藤伊夕ぎり三かつ縁きり、序の切二の切三の切、緋桐唐桐、青ぎりきり島、わらひ道具はきりの箱、引つきり枕白のめきり、きり原のこま桐が谷、きりふりの瀧きりの海、きり山三兩かしこに五兩、きりかね曾我の切り艾、ねつきりはつきり病きり、きりはたりてふきりくす、夜霧をはらふ早天から、まづ今日はこれきりまで、錐の囊をもぬけた名題、桐の葉にすむ鳳凰や、きり人も出づべきみぎりとは、今日みつ指のきり口上、その口切の爐びら

きに、氣もうききりの紙ぶすま。きりくく。

右は天明四のとし甲辰、桐座はじめて、茸屋町にて顔見世の狂言せし時、戯れに書けるなり。世にまぎらはしき八の字づくしなど、名をかるといへども、桐の下駄と焼味噌なり。

をはぎの露

それ七々の忌に三の物忌をくはへ、六の齋の中に十あまり三とせを弔ふことは、斑鳩の宮にかくれませしみこより起り、何がし禪師の「京華集」にも、預修十王經をひきてその事を述べたれば、くだくだしくいふに及ばず。こゝに子々孫彦なん、親よりよく仕へまつりし君の、十三回の齋を弔はんとて、おのが好めることぐさをもてするも、無禮に無禮けなるべけれど、まめに實様なる心から、斯くは計り出でぬるものならし。はたむべくしき和歌の題はをこがましと、ひたすら戯れたるかたによせて、「計年思法事」とかいへるをい出して、「思往事」のひゞきを借りつ。これなんむかしの秀句めきて、今もわらはへの弄ぶ、地口なりなどあざみいふ人もあるべけれど、きやうごんきごも讚佛のゆかりなりと、頓作頓寫の琵琶を聞きて、青きあせとりの袂をひたせし、昔の人になすりの衣、をはぎのもちもいと露けくて、

十あまり三とせの秋のくろ豆もほとびにけりな法のこは飯

子々孫彦

つきぬ恩ながく法事のくるたびにかぞへてとはん百年忌まで

多田人成

あづさゆみはるかにかぞふ年の矢の十三ぞくにあたる命日

紀定麿

飯をもりてたてにし年をかぞふれば十といひつ、みつは杉箸

百番月歌合序

大かた月を賞でしたはれ歌を見侍りしに、三五夜中の數取に、十五連城の玉をつらね、又はふたよのお月さまいくつ、十三がねの曉を惜しむたぐひなれど、かく鳥の子を十づ、十つがひしざれ歌、ふたも、ちに、あらゆる月をながめ盡し、兔の杵のさきもちびて、三十丈の連木をはむてふ杭州のふる事を思ひ、桂の枝も折り盡しては、神田まつりの事はてて、宮居にかへる榭かとあやしむばかり、市ヶ谷のいちはやく、四谷のよついつ、と數へたるちりつもりて、あふけば高き山鳥の、尾張のみくのすき人ら、も、ちの歌を詠みたるに、良村安世ひとりして、も、ちの歌をよみあはせしは、かの良峯安世朝臣の水車より、よくまはりたる口車にこそ。よりて其のながえの端に、いさ、か筆の軸を

とり侍るのみ。

春日詠寄三七福神祝夷歌序

孟子に三つの樂しみをのべて曰く、かぞいろうともに在し、おと、え事なきは、一の樂しみなり。仰いであめの道に、俯して人の道にはづることなきは、二の樂しみなり。天が下にひいでし才ある人を教へはぐ、むは、三のたのしみなり。まめ人にこの三つの樂しみあり。南にむかふ位もなにかはせんとは、宜なりけらし。わが家かぞいろ堂にいまし、おと、え家を共にす。あめが下に秀でし才ある人、たがひに師友の交らひをなす。たゞ恥づべき恥を知らずして、天に人にいひわけなきぞ、また恥づべきの甚しきにあらずや。やつがれ、いはけたる比より文の園にあそび、ことばの林にたちまじり、からうたの筵に七あゆみの韻をふみ、敷島の道に六種のひとつをわいだめ、身をたて道をおこなひ、名をこの世にきこえあけてんと願ひしも、陽春白雪の高きしらべはとなふるもの少なく、下里巴人の下が、りは、誘ふもの多しとかいへる言の葉にたがはず、いつしか博士だちたるまじらひをいでて、ひたすら戯れたる方に身をはふらかしぬ。いでやこの身はとまれかくまれ、かぞいろの年を知らずやあるべきと、思ひおこして、此度たちを七十の齡をむかへ給ひぬれば、をととし、たちちめの六十の賀にまじるなる大黒屋に集ひしにならひ、兩つの國の橋のほとり、よろづ代のかめ屋のもと

に、今日のまるとるをなす事になりぬ。題もまめくしき和歌題は、はかりの關の憚りあれば、諺にいふめる七つの福ある神の御名によそへて、祝ひ歌をよましむ。そのことばに曰く、

寄大黒祝

わが家の大くばしら鼠壁こづちもつけていはふ神棚

谷水音が新宅をことぶくことば

谷水音、くれ竹の四谷のさとにやどりをうつし、もろ人のたはれ歌をもとむ。やつがれ、おふけなくもかんつよの詞にならひ、その室壽をなして曰く、ついたつる礎、ついたつる柱は、これつちぬしのみこ、ろの廣きなり。とりたつる三十日々々々は、これ家ぬしの御心のまに／＼なり。とりあぐる垂木は、これ大きな繪筆なり。とりまける腰張は、これいろどれる繪具なり。とり敷く覺は、これ主のへりくだれるかたちなり。とり葺く屋根は、これあるじの思ひあがれる藝なり。四谷は竹町なり。くれ竹のよつやの里に、大三輪のながれを汲める繪師たち、花のお江戸に、木の根草葉もよく物いふ戯れ友だち、かく壽ぎをはりて、ひた飲みに飲み、たゞ歌ひに歌ふ。その鼻唄のはしつかたに、聊かほ、かぶりし侍るはや。

所がら四谷丸太のとこばしらかけし墨畫の竹町のやど

鬼念佛畫贊

かたつぶりの角、折れては鬢觸の争ひやみ、外面は夜叉の如しと雖も、内心菩薩の道に入れり。身を墨染の奉加帳、つくたびごとに奥山の、かねの撞木はなまいだく。

富士山繪贊

そもく此の山、孝靈のむかし生まれ出でしより、若白髮の雪積り／＼て、千年の末はもかけず崩れず、二十一代の千言萬句も、赤人の田子の浦にうちけされ、五山の僧の抹香臭き詩も、丈山が白扇にあふぎふせられぬ。されど泰山は塵埃をゆづらず、河海は化粧水をいとはず。富士のしら雪朝日とけてと歌へば、三國一の甘酒の看板にも、をしけなく書きちらすは、また勿體なき事ならずや。むかしより此の山をめし人いくばくぞや。在五はまだらに雪舟はしろし。その中にまつ黒々の墨衣、西行といへば富士を思ひ、富士といへば西行と氣のつくは、此の山この人古今一對なるべし。嗚呼咲耶姫また出づるとも、わが言をかへじかし。

生國、駿河、者 本國、近江、湖 三國、一山、外 出廊、出店、無

うかへば富士ほど黒きものはなし管もて天をたつた一日

酒中花の報條

桃李物ははず山吹口なし。その口なしの色々と、巧み出でたるひとつもの、南の花にたはぶれし、蝴蝶の翁が書に見えし、芥の舟のそれならで、ひとたび杯の中に浮べば、花の脣はじめて動き、柳の眉たちまちにひらく。なべての世に行はれるは、淺草のはつかに、やなぎやのいと少なし。いま製する所は、吉野初瀬のたねをうつし、蒔繪沉金の杯をいとはず、摘みてはひたし、飲みては興ず。もし酒中の趣を知るものあらば、いさ、か一枝の春をおくらんといふことしかり。

月見のことば

ならびが岡の何がしも、萬のことは月みるにこそとはいひしか。今夜ぞ秋のもなかなれば、照る月次の會はさらなり、折にふれ時につけつ、おのがじ、心を遣れる中に、かのからうたは、餅は餅屋の、から人の言ひ古したる、清光に蹴押されたれば、か、けてむかふひのもとの、平仄の影もたどたどしく、連歌は庭の面八句に、浮雲のさり嫌ひおほく、誹諧はさびたる小刀に、澀柿の皮むかんもうるさし。和歌こそこの國の風俗にして、生きとし生けるもの、いづれかこれを詠まざるべかめれど、この比にいたりては、ざれたる詞、あだなる姿のみもてあそべば、女郎花たはれたるふりをなん、花薄ほ、ゑみあへりける。それこの月をみるにつけて、その品もまた様々なりや。先づはき出しの高どの、はれやかに御簾巻きあけ、花氈の錦所せう敷きならべ、洲濱にたてる絲花のかけに、みさかな

は何などけいめいして、杯のそこしたみながら、何やらんめでくつがへり、どと笑ふなどをこそ、月見とはいはめ。酒の池にやぐゑんほりをた、へ、肉の林に橘まちを手折り、みすぢの絲の棹かいつかみて、な弾きそ、御酒たうべよなど、戯れたるもあり。五つのちまたに千金をなけうち、三つの食に二世をちぎり、舌鼓うつ牽頭、歌うたふをうなけいさ連れてこそ月は月なれとおもふ人あり。舟に棹さし野に草鞋はきて、うかれ出でんと思ふも多からん。五條わたりの九尺店に、軒もる影をながめ、いかきの團子、ますの芋に、その樂しみをあらためぬも有るべし。今日なん何がしの許に、としく月のまとるあれば、夕飯の箸おきあへず、袴の腰さしあてんと思はず、外の方を見やりたるに、雲は魚の鱗の如く、月は兔の耳ながく、縁側の端つかたにさしいりたる、わが宿ながらなつかしきに、つもれば人のと言ひし、老いのまさに至りなんとするも知らず、露霜にそほちありく、身のはかなさまで思ひつゝくるに、入相のかね時分つかひの人を促し、雲居の鴈も跡なが先へ行くなるべし。

おなじく誹諧文風俗文選の體にならふ

萬のこと月見るにこそ、慰むわざなれとは、「つれづれ草」の法師も申され、今宵ぞ秋の最中とは、「和名抄」の作者も述べられたれど、これみな歌よみ連歌師のぬめりにして、いつも紅葉の錦は著れど、里芋の衣かづく風情を知らず、尾花の袖はふりきるとも、枝豆のゆでたてをいはず。わが誹諧の

自在なるや、宗鑑は柄をさして團扇となし、祖翁は雲をりく人安むるとは宣へり。さるは虚實の自由を得たらんに、尤も比興の本意を正したれば、茲に我が輩の閉口といふべく、はた後世の活法とすべし。世に不風雅の人ありて、宵から戸をさしこめて高軒したらんも、又は夜の明くるまで酒のみ物くひて、これを月見と心得たらんも、かの書物によみ入りて、夕立に麥を流し、傾城にうち込みて、身代を棒にふりたるにひとしく、品こそかはれ、その罪はひとしかるべし。されやまことの月見る人ぞ、まことの月は見るべく、月みる人の多きにつけて、月みぬ人を呷つなるべし。

巴人亭記

蝸牛の角をちめてはひり、蟹の甲に似せて穴を掘るも、家といふものの無くて叶はねばにやあらん。かりこもの亂れし菰うちかぶり、露霜の宿なしとも身をはふらかし棄てざらん限りは、膝を容るの窮屈ならんより、足のばす程の家居なからんやと、新たにひとつの宿りを占む。元より二尊堂にいまし、妻子室にみたり。その縁側の端つ方に、ひとつの妻戸を開きて入れば、ひろさ僅かに十疊ばかり、こゝに四方の客人を迎ふ。維摩が方丈の玄關にて、八萬四千の獅子を舞はせし類なるべし。その北に三枚敷あり。東面に戸をあけて、しやらくさき机を出せり。螢こいゝ雪こんくの場所なるべし。すべて財乏しければ物すきなし。牀なければ違棚も見えず。かけ物は壁に掛け、柳は鄰から

のぞく。澀柿はあるにまかせ、草は所まだらに抜かしむ。土藏の目の上の瘡となり、雪隠の鼻のさきに悪臭きも、かの南のやのかき、東鄰の下水をいとほざりし、司城子罕が昔をしのび、望海の亭、見山のたかどの、きら／＼しききはにはあらねど、張天錫が勸化をもて、家居を營みしたぐひに似たり。わが家に来るとし來る人、わが門に入るとし入る人、こゝに飲みこゝに笑ひ、こゝに歌ひこゝに樂しむ。飲むものは何ぞ四方のあからなり。うたふ所は何ぞ下里巴人の曲なり。もしそれ陽春の白雪糕も、また小兒の戯れなり。いづれをか高しとし、いづれをか低しとせん。

里の春柳の五もと 富本豊前大夫歳旦淨瑠璃

楊柳橋邊の川やなぎ、緑の釣の絲垂れり。百花川上の浪の花、とわたる船もたひらかに、安國なれや君が代は、千代にひとたびすみだ川、山屋の酒の諸白髮、わかやく尉とうばたまの、やみをあやなす首尾の松、今一しほとゆふしほに、千里も一里こがれ寄る、大さんばしの春景色、待乳の山もわらふかと、うれしの森のむら鳥、かはい／＼が憎いやら、憎い／＼がかはいやら、たつた今戸の裏表、口も八町土手つゞき、日本づゝみの辻占や、うそとまことを秤にかけて、どちらがおもい露銀は、都そだち歟しやほんに、花のお江戸の總花は、こがね花さく五もとの、柳のちまた花のさと、陸奥山も今こゝに、のりこむ駕籠のかよふ神、しりくめ繩の松かざり、直なる竹のおいらんに、しんぞ禿が初

草の、うらめづらしき晴小袖、こぞのしきせの衣配り、跡著のにしきこきませて、出づるいろはにはほ
 だはらや、抱いてねまつ初買の、初會うらじろ藪柑子、かうじかうじて居つゞけの、れんじの窓の
 北おもて、残んの雪の封じ文、文がやりたや室の梅、くひさき紙の未開紅、かしくの蒼愛らしく、け
 ふしといでて枝振は、花のかの様のく、手に渡せ、花のかの様のく、手に執るからにゆらくくと、
 ゆらく心の玉帚、えにしは盡きぬ富本の、ながれの末も豊かなる、天の八束穂たなつもの、積み重ね
 たる御倉町、爰ごあづまの都鳥、むかしもかかる賑はひは、ありやなしやと語りつぎ、いひつぎ棹の
 みつの絃、ねじめも長く巻きをさむ。

春色花鳥媒

ならの葉の、名におふ御代の撰集にも、相聞歌とは色の道、藍より出でて藍よりも、こきんに戀の
 部をたてて、花と鳥との媒や、花の姿はさまざまに、心うきたつ春色の、鳥はもとより妹と背の、
 ちゑない神にちゑつけて、つがひ離れぬ二柱、はしら曆のひめはじめ、口と口とのはがために、はだ
 とはだとの腹赤の奏、のりぞめよしの乗氣には、いらへもまたの藏びらき、當年の恵方より御祝儀申
 しいれますと、麻上下のみつ指も、いふにいはいれぬ中指と、つい薬子のくすり指、これこの指をかう
 折つて、じつとしめたるしめ繩の、しめつゆるめつ筒井筒の、井筒にかけし屠蘇ぶくろ、その小袋と

小娘に、ほんに油断はなら坂や、この手がしはのふた茶椀、割れてひゞけてひゞたけの、入間の里の
 里ちかき、たのむの鷹の玉章は、みよし野ならぬよし原や、色で丸めてさございの、くじもたふる、
 戀の山、富士はおいらん筑波は新造、このもかのもは玉くしけ、二人禿の門松の、しけきみかけの中
 の町、嘉例の酒の二日酔、三日のけふも居續けの、風呂の湯上り手ぬぐひの、絲ゆふなびく櫺子窓、
 水殿雲廊別に春をおくふかき、本間ふたまのかざり夜具、やぐら枕の牀入も、をさまる時にあふみの
 や、鏡の山を立てたれば、かねてぞ見ゆるかねつけ袖とめ、とめてとまらぬ年の内に、引込みかぶろ
 いつしかに、春の水上臙のつき出し、けに三千の粉黛も、この一郭にありそ海の、濱の眞砂はつくる
 とも、君が代はく、孔雀鳳凰おしきせの、天の羽衣いくかへり、みほの松原氣もつき島、愛鷹山や
 巫山の雲、雲となり雨となり、うるほふ民のまくらごと、いねの間もよろづよく、猶ゆたかなる年徳
 の、あきの富こそめでたけれ。

春日龜樓詠初芝居狂歌序

大塊われに問うていはく、われ汝に形をかすことひさし。目の見るべきあり。耳の聞くべきあり。
 鼻のかぐべきあり。手の舞ひ足の踏むべきあり。口はまた二役ありて、食ふべく言ふべし。耳目の欲
 にしたがひ、手足の勝手づくはしばらく措く。汝が口節あらず、たゞ酒を嗜む。汝が口則あらず、た

だむだを吐く。酒は量なくしてつねに亂醉に及び、むだは務めを廢して自暴自棄にちかし。汝を天地のむだ者といふ。如何々々。四方山人杯をあけ青天を望みて曰く、われ寧ろきん／＼として大通のごとくならんや。はた黙々として野暮のごとくならんや。むしろ黒鴨をつれて五侯の門に入らんや。はた白眼にして世上の人を見下さんや。寧ろ深き山に小路がくれをせんや。はた水草きよき所に岡釣をせんや。むしろ茶にじり上らんや。はた香に鼻をひこつかせんや。むしろ碁將碁に隙をつぶさんや。はた十露盤を枕とせんや。むしろ絲竹を友とせんや。はた書畫を愛せんや。むしろ螢と雪とをあつめて、萬卷の書をよみ破らんや。はた詩と文とをつくりて、千秋の業にほこらんや。むしろ高聞が原に神いちりをし、拍子の音をきこしめせと申さんや。はた鷺の山の佛くさく、經論に目をさらさんや。寧ろ老莊の徒たらんや。はた醫卜の道にかくれんや。富貴天にあり、梯子のとゞく所にあらず。窮達命あり、耳たぶをさぐるのみ。大塊われをわらふことなかれ。これも同じく役者にて、もろこしの康熙帝でたのみやす。そこの仕出しはあめつちの大芝居の帳元さん、それ日月の鼠木戸、一夜あぐればにぎやかに、風雷のやぐら太鼓、はじめて聲を發せしより、百千鳥のとひよく、梅と柳の引道具、はるのはじめの初芝居、その時を得たる哉／＼。いざ大入の杯をかたぶけて、例のことばの花道につらねん。造化のおぢい聞き給へ。大塊黙していらへなし。人をしてその心を述べしむ。その

ことばに曰く、

かほみせが周の春なら正月は初芝居かの時をおこなへ

春日泉亭詠雜煮餅狂歌序

不忍の池の氷、風や、渡り、廣小路の鉢の梅、雪なほ残れる比、あづまのひえの山を、はつかばかりかさねて六日といへる睦月の末、あけら館の主の門に遊べる人ら、大人の常に書きすさめる、のの字なすまとるせんとて、これかれけいめいす。ことしは丙のわらは、竹馬にのれる年なめりと、人々慎み恐りしが、はたして春日野の飛ぶ火にはあらで、漏るてふ水の手あやまちより、市人のかりすまひも、野寺が庵の心地し侍りて、いま幾日ありて戲言いひてんなど、いひしらふも本意なし。さばれむさし野のひろき殿づくり、みつばよつばの縁にかへり、筑波山のしげきいとなみ、このもかのものかけ頼もしく、日あらずして舊のごとくならんと、ついとりたつる室壽に、祝ふことばの和泉屋てふたかどのを借り、野中の清水むすび置きし、もとの心うしなはじと、入り来る人々中々所狭うなん。そも／＼年の始めの壽は、すでに申しをさめつ。猶はた漏れたる客人やあると、目をすぎばしのとありあへず、雑煮餅といふをもて題とす。もとよりもろ人の心を大根として、萬のことばの菜の葉ともなれば、里芋の中をもやはらけ、焼豆腐の串のたけき心をも慰め、目に見えぬ鬼神に、青こぶ取ら

れんもはかるべからずと、勻ひすくなき花鯉、そのひとつふしの連中の、筵の末にもあみつらねてよ。
いもが子の髪の毛程な青昆布につなぐ禮者の大ざぶに餅

栗花集序

年ごろ栗のもとにた、すみて、落栗の見あつめ聞きあつめたる、み、づくの形をつかねたれば、そのま、栗花集と名づく。見る人さ、けの花のみじかきを見て、この花の長きをいとふことなかれ。

茶杓記 石原氏に代りて作れり

いにし寛延己巳の秋、近江の國三井寺の櫻の根をわかつて庭に植ゑ置きしに、志賀のうら浪たちかへり、とし、春のながめ絶えせず。今年いさ、か其の下枝をきりて茶杓となし、人のもとに贈るとて、そのよし箱の蓋に書きつく。猶一爐の清風をそへて、百花の餘香に飽かんとなり。

鄰家におくれることば

むかひ三軒兩どなりとは、ふるくより言ひならはせど、將某のこまの銀將のごとく、うしろをおるすにしたるもをかし。小家がちなる夕がほの宿に、きた殿と聲をかけたる、もし日あたりのよき家ならば、きはめてうしろ鄰にもやあらん。必ず鄰ありと宣ひし孔子を、東家の久兵衛と覚えしかたくな者はいさしらず、鄰の醯を借りにやりしは、微生高が一生の名をれにして、鄰のちやほを盗むなどは

孟子のよき譬へなり。またその孟子のおふるは、鄰えらみのむづかしやにて、たびく豆いりをくばり、子どもあそびの土なぶりに、石ころで買物しても、浮世小路の店をかへられ、まして寺町前地をきらへば、淺草谷中の住居はなりがたからん。宋玉が東鄰のあね様は、楚國一番のだてしやと知り、喜撰がわが庵は小野小町が鄰に見ゆ。美濃と近江の寢物語は、木曾道中にかくれなく、鄰の寶をかぞふるが如しとは、「童子教」にもしるせり。鄰の糶杖はわが内の澤庵漬より好もしく、鄰しらずの牡丹餅は、春慶ぬりの重箱におどろく。鄰のばあさま茶をまるつたとは、どうまるつた斯うまるつたの口拍子にして、何の意義なく、鄰の疝氣を頭痛にやむは、僧上なることながら、いさかひ同士の軒ならびより、まだ深切なる方にやあらん。われらもとより猫の額ほどの地に住めば、馬の尻をかぐ長屋住居にもあらず。暗闇からひく牛込のほとり、東南にちまたあれば、この二方に鄰なし。北には姉弟はた甥など家居し居れば、他人のはじめの鄰ともいひがたし。たゞ西鄰の主のみ、まことの鄰といふべくして、したしき中の垣根より、一もの柳さし出でたるは、彭澤が五本にもまさりたるに、この比いとよしかくる春霜の、解けか、りたる綻びぐち言はんかたなし。ひと日鄰のあるじ、木こりに命じて枝をすかさしむ。主のいふ、この木はわが厨のかたにあれば、見はやすべきかたにあらず。たゞ鄰をおもに作るべしとて、はた其のもとに桃を植ゑしむ。木こり、なぞといへば、たゞ植ゑよ。

花咲きなん時、鄰の簀子にしりうたけて、酒酌まましなど、戯れたるいと興あり。遠き三千年はいさ知らず、まづさしあたりて此のはるのながめなり。網船に棹ささずして桃源の洞に入り、夜船に乗らずして伏見の里に旅寝すべく、物いはぬ桃もこと問ひかはす風情ありて、ねぶたき柳のよき話相手を得たりといふべし。長嘯子がぬすみて植ゑしは、あくる日の謔言もむづかしく、杜子美が樹木の進物は、むしくひもまじりなん。われはたゞ天々たるをまち、灼々たるを愛す。蓁々たる葉を行水にむしり、蕒たるその實に長竿を出す所存は、青柳のいとかけて、毛桃の毛頭あらじといふ。

三年になるてふ桃を垣ごしのはなの先にも見るぞうれしき

春日唐衣橋洲初會狂歌序

けふなん吳竹の四谷の里に、から衣きつ、なれにし友がきをつどへ、軒端の杉の丸太をしるしに、大三輪の酒たうべよなど、いひおこせ給ひしに、この比日でりうち續きて、直なる柳のいやな風にのみなびき、ものうき蕨の塵埃たちまされば、水のとばしり池の鱗におよび、火あやふしの夜行わり竹のふしどに響きしを、このひと日ふた日春雨をほ降りて、もろ人の心も漸くおちる侍りしかば、いざや戯歌の會にまかりて、結べる口を開きてんと思ひしに、よべより童の熱の心地し侍りて、膚もかこの斑に、時しらぬ山をあけ侍りしは、世におこなはるゝ疱瘡にてもやあらめと、近きわたり醫師の

がり行きて訪ひはべりしに、とく來りみて、さなり。されど順よかめり。なひやしそなど制するに、日頃は四方の人にまじはりて、三たび門をも過ぎてしかど、かのなにがしが言ひけん、その子の母もわれを待ちて、とかう養ひきこゆるものから、今日のまとるに外れぬることの、よにどころなき思ひをのばへて、過ぎし折からうけがひ物せし、言葉のせめをふたぐといふことしかり。

初 雛 賦

門びらきの御祝儀すみ、眞綿のつむのもてあそびもの所せく、桃のやう／＼咲きそむる比、この子のこゝに歸ぐべき、ひいなあそびの調度もとめんと、十軒店の二階に雲の上の雲をつかみ、麴町の室咲につくり花の花をかざらんと、鶏合はせの雌ときをす、むれば、潮干のひかぬ父親の心こそをかしけれ。内裏雛の袖は、かけ鯛の尾をさかだて、次郎左衛門の丸顔は、卵子に目鼻つけたらんが如し。紙ひいな雨ふりに腰はたたすと、てる／＼法師のかたちにて事たりなんを、今は古今の雛の装束の詮議より、大宮人を裸にして、折からの「桃華薬菜」に一條禪閣のお肝を潰させ、ふらその壺井も義知ぎちと爪をくはふべし。小人形のすは箱の蓋にあらはれ、男とも見え女とも見はやすべき方にはあらぬが、長たぶの首うちかたづけ、足のうらより竹釘を打ちつけられたるもいた／＼し。からくりこそ猶をかしけれ。綿やの窓に弓うつ音の心地し侍りて、唐子の雪をまろばし、亂局の獅子をまはす

も、みな一つひゞきなるよ。されど此等はみな古代にして、石女のはり箱の上にはけたる蝶足の膳を
 するられ、見たふしの古道具屋にみてつけの日切りをや歎くらん。近頃難方といへる者いできて、き
 りかぶろのぜんじをもて、芝居の下座にやうつしけん、笛小つゞみ大つゞみ、太鼓地謡まで、一つを
 かきては事足らぬ心地ぞする。裸人形ははらがけに美をつくし、六尺の手まはり鉢巻に氣をつけ
 たり。まして調度はのり物外居のみにかぎらず、御厨子黒棚は東山殿の牀かざりをあざむき、簞筒長
 持は座敷持の二間かとうたがふ。一雙の屏風は柳櫻をこきませ、式正の本膳にあさつき鱈はまぐり
 もをかし。毛氈しき幕うち廻し、落鴈の鯛折のはぜ、草餅のひし、豆いりの霞、山川白酒は豊島屋
 矢野をかたづけ、饅頭干菓子に鈴木金澤をつくす。かかれば紫清少が筆すさみは知らず、加田粟島
 の故實は猶さらうとくしけれど、世に男子もちて幟いかめしげに立て並べても、柏もち粽のかはを
 むくもうるさく、干鯨かさごの齒にはさまらんより、先づ何事もさし置きて食物の多きこそ、こよな
 うにぎはしき節句なれ。

樟腦のほひもまだき箱入のむすめのことしけふが初雛

初 幟、銘

鯉かぜをふくみて、うを木にのほり、劍鞘を出でて、鬼地をはしる。あがりかぶとの金箔は、「延喜

式」の儉約をつたへ、あさかの沼の花がつみは、中將殿の歌枕にして、頃はさつきの初のほり、紋の
 あやめもあざやかに、月ののほりの如く、日の昇りのごとく、終南山の進士のごとく、柏餅の葉のし
 けきがごとく、菖蒲刀の刃かけす崩れず、猶竿竹の直なる道をたてて、つけたる父を辱しむることな
 かれといふ。

初 瓜、頌

二月中旬の青籬は、唐詩にあらはれ、山城のこまのわたりと和歌にもよめり。曲禮は六かは半にむ
 き、兒手柏はふたへにつゝむ。かの青門の五色にまされる、さかりの花の江戸往來、當所の新田鳴子
 瓜は、四谷の馬の履をいれず、茄子のならぬ蔓をもとめて、目にみえぬ鬼をしてやる。うまいかな甜
 瓜、其の仁にしかんや瓢。
 わらはべもくは甜瓜めづらしと兩手にもちてころびうつなり

初 鮭、傳

はら、ごの生子年魚、その先東海の人なり。文治の比、源廷尉きぐるみ王に従ひ、奥州高館の亂を
 避けて蝦夷に入る。よりに名を變じてさけといふ。石狩の川邊にすみ、いちごといへる妻をめとりて
 子をうむ。名づけてはら、五郎といふ。源順が「和名」に、其の子いちごに似たりといへるは、

此の故なり。年魚その顔の色きはめて赤し。人呼びて赤光と異名す。性急にして、進むことありて退くことなし。其の年の秋にいたりて百千隊をなし、士卒をひきゐて石狩の川にのほる。一尺の劔をふるつて鎌倉を襲はんとす。佐々木三郎盛綱討手に向ひ、そのはた頭楚割四郎なるものを討ち捕り、首を折敷にする、小刀を相副へ幕府に獻ず。幕府御感の餘り御自筆を染められ、一首の歌を詠じ給ふ。時に建久元年十月十三日なり。事は「東鑑」にみえたり。年魚た、かひ利あらずといへども、その太刀風にあたれるもの、三年の古疵起りて、ことごとく死せしとかや。その時常陸下總の人、はじめ年魚が猶あることをしり、はつ鮮くともてはやせり。或は曰く、常陸坊海鱒なりと。又貝原翁の説には、鮭にあらす、鱒なりなど、異説まち／＼なり。年魚時のいたらず、月の迫れるをしり、鹽引に引きしりぞぎ、越後の國山川の城に隠るといふ。或はいはく長門なりと。

大酒公曰く、われかつて南嶺子に聞けり。あるひと、病中に河豚をくはんと欲して醫生にとふ。其の書簡に、河豚の正字をかきて鮭とす。醫生、本草を知らずして、鮭の性はよろしき者なりといふ。病める人河豚を食ひて死すと。此の説はなはだ非なり。河豚もと鮭にあらす。これなん莠の苗をみだる多田氏が臆説なるべし。

初霜解

初霜々々、おきやすくまた融けやすし。柱あれども太しからず、花あれどもしほむに早し。雨冠に相の字を書きしは、雨と雪との相のものか。もとの露末の雫の順にあたらば、さしづめしもの訓なるべし。それ青女いたりて時を感じ、君子踏みて亡き人を思ふ。軒の妻さへ白々と、新たに薄化粧したる橋のゆきけた、所まだらに二つ三つ四つ足跡の残りたる、月おち烏なき、もみぢ橋の船の寐醒、白菊の花の心あて違ひも、いつしか師走女の霜焼となりて、遂に手水鉢のかたき氷にもいたりなん。青柳の絲よりかくる春にもなれば、百たらぬ八十餘り八の夜のわかれをや歎くらん。星と霜との移り變るは、誰も知りたることながら、しらず明鏡の裏、頭に霜のおきそむるこそ、二度とけしなき恨みなれ。

臍穴守禪師におくることば

もろこし青州に臍縣あり、わが近江には臍村あり。天竺にては黄金のはだへに、臍くり金をたむるとかや。そもく四支九竅の必用を考へ、この一物の不用を歎くことは、自墮落先生の臍人の説、也。有翁の臍の頰に事古りにたれど、名におふ臍の穴守禪師、臍下に心を落ちつけて、口から出臍の文をこふ。よりにすばしりの臍の腥きをいとせず、臍がはらけのさしも草、たゞ頼まれし口ふさげに、いざ、か臍の垢をひねるにこそ。

ざれことにお臍の笑ふ聲きけばあななき笛の心地こそすれ

吉田李園翁を祝することば

おほよそ忠臣は孝子の門に求むとかいへれど、忠孝兩つながら全くすることかたしとなん。こゝろみに看よ、たらちねの病を看るとて斷りをたつれば、君の宿直に人だのみをし、とほき先觸の問屋場に、具足櫃の繪符を耀かせば、ちかき目の前のおふくろの佛間の氣をやすむることなし。こゝに李園先生の父君、武夫のまねぶべき事をとりて、なにがしの國の守につかへ給ひしが、遅々として去るわけありて、其の後なくなり給ひしより、今の李園君に至るまで三十あまり八年、松柏の操を守り箕裘の業をつぎ、梓弓柳の葉を百歩の外にうがち、勝つ色みするやり梅の一枝をかざしとして、つるぎたちはき庭の稽古場に、やつとうくの家聲をおとさず。ことし天明六とせ、ふたたび錦をきさらぎの比、もとのごとく召し還され給ひしは、まことに忠をかね孝をそなへて、二なきものゝふの鑑なるべし。やつがれ、すでに先生を知り、また其の子を知れり。其の子よく其の道を傳へて、かたはらざれ歌を好む。よりにて聊か、稱辭をのべて其の子に示す。猶親の親のふみわけ給ひし道筋をたがへず、子の子の末をみちびける先達にたち給へかといふことしかり。

たちかへり李の園の花みればもゝの祿までその中にあり

邊越方人をいためることば

方人々々、むかしは日本の本の橋のほとりに、朝市の利をあらそひ、今は築地のおきつきどころに長夜の夢をむすぶ。その世にあるや、親につかへ妹をめぐみ、その藝にあそぶや、詩をならべ戯歌をたしむ。その志をたつるや、商人のよき衣きんことを恥ぢ、その家を治むるや、小鮮を煮るがごとし。我かつてみづから過てり。汝まのあたり諫めてかくさず。われかつて人に誹らる。汝あなどりを防ぎていれず。たとへば孔子の子路を得て、逆言耳に入らざるがごとし。今や時うつり事さりて、春もまた半ばを過ぎぬ。これに告げんとすれば、其の人花に先だちて散り、これに見えんとすれば、其の影鳥の翔るが如し。いたれる悲しみは文なし。つかみじかなる筆を止めぬ。古よりみな死あり、ひとり西の方人のみならんや。例の友どち例の戯歌、外には何も手向なし。靈それ知ることあらば、尙はくは饗けよといふ。天明七のとし二月二十六日。

百喜齋記

角田川を前に、待乳山をしりへに、鶺鴒のわたせる橋にはあらぬ、今戸といへる橋のほとり、うれしの森のよろこび鳥、百のよろこびを告ぐる庵あり。かの東ぶりにうたふめる、のび上らねば見えぬてふ、なにがしの鳥居もみわたされ、高瀬の高き、いかだの長き、舟屋形の塵を動かせるは、みすぢ

の絲のゆりにして、ふす猪の牙のはやき小舟は、山谷わたりの里ちかき故なるべし。春は角ぐむ牛島のあしの若葉、波こゆる洲の上に、嘴と脚の赤きとりのつい居たる、角田の堤の川ぞひ柳、や、しけりゆく夏の日の長きながめに、薫風微涼を生じては、玉樓金殿の高きをも羨ます。鴈の玉章堀にわたり、白髭秋葉の黄ばみ落ちて、冬がれの炭がまならぬ、瓦やく煙のかすかに棚引きたるは、小野のけしきに思ひたぐへ、あつま橋の横ほりふせるは、宇治のわたりにも似かよひて、とりあつめたる所のさま、も、の目をよろこばしめざることなし。あるじは淺草の根ざし深くをさめし、よき商人の御藏町のほとりに生ひたち、み侍みかさにはあらぬ三つの時の、米給ふ事をつかさどれば、その身は市にありながら、おほやけのことにか、づらひありくも勞かはしと、今年竹の子にゆづり松の葉をかくまでも、浮世の外路次口に茶事をのみ嗜み、客人あればあるじまうけして、大空を蔽ふばかりの廣きしとね、大きな食つくりてんといひし、昔の人にも恥ぢざれば、あるじの獨り喜ぶのみならず、また百の人のよろこびならずや。

春夜伯樂宴集序

それ天地は萬物の宿屋なり、光陰は百年の同行なり、而うしてきちんは闇の如し。寢がへりをうつこといくばくぞや。古人燭をとりてはたごにす、まことに故あり。いはんや一樽われにす、むるに、

瀧水をもつてし、大會われにかすに、筆硯を以てす。伯樂のうまぶねに遊びて、千里のこまごとを吐く。今夜の秀逸はみな曉月房たり。われらが詠歌はひとり補陀洛にはづ。兼題いまだよめず、探題すでにいづ。樺焼をさいて花に坐し、夕河岸を呼んで月に酔ふ。批判あらずんば何ぞ勝負をわかつたん。もし狂歌のつがひならずんば、ばちは角力の太鼓にあたらん。

はるこまのいさむ心をたねとしてよろづの言のはく樂となる

宿屋 飯盛

歌よみは下手こそよけれ天地の動きいだしてたまるものかは

四方の留粕

蜀山人

四方の留粕の序

此のあかは吾が酒ならず、四方に知る赤良のうしの醸みし酒ぞ。うまらにをせさ、さ、おせくと流行唄に浮れたりし、安永のむかし、はじめて滑稽の口を開きて、狂薬好むたはれ人にす、め、手酔あしるひ酔ひくるはせ、一筋の路をともしに踏ませしより、千鳥あしの跡久しくとまり、今も昔にほ鳥の、かつしか早稻のうま口なる、大人の新體もがなと、ふみのはやしの杉をしるしに、たづね來る人日々に絶えず。けに戯れもんざうは年月にさまかはりて、あらたなるををかしと思ふ習ひなれば、何とかやの酒の十とせを経て損ねざるも、口なれたるは珍らしからず。然りとて酒つくる才なき人の、しほり出したるは、新しきも味ひなし。かくては何をちからとしてたはれうたをうたひ、戯れ文をつくるべき。瓶のつくるは鬚の恥とか。いざたまへよき酒乞ひにと、書屋と共に大人のみに参りて、此の殿の奥の酒屋のうはたまり、あはれ中酌をだにと乞ひもとめたりしに、留粕といふ物四十枚ばかりとう出て、かう嘆くさきものながら、幸ひに接骨醫師の泥鑊にもかゝらず、漬物店の桶にも入らず、爰に留粕のとまりて久しきが、さすがに人酔はすべき所なんある。かの劉伶が寝むしるに敷き、憶良の太夫の寢酒に暖めけんやうに、からの大和のねごとといひ出すたねともなるべくは、

そのしるをすゝり、その糟をくらひて、ふみ商人の腹をこやさせよと、投げあたへ給へりしを、やがて寧樂の櫻木にゑらせて、糟堵のかけす崩れず、幾久々と南總館のあるじと共に禱ぎくるほすも、まづ粕の勻ひに酔へるなるべし。

文政二年己卯正月吉日

四方歌垣眞顔

四方の留粕上

狂歌新玉集序

久かたの天、輕口をひらき、あらかねの地、おも口を結びしよりこのかた、神代のむかし、あまの
細女の乳房には、猿田彦もたなうらをうち、月のみくに、何がし尊者の花には、くどにも微笑をゆる
し給へりき。されば、麒麟に感ぜし翁も、時ありて笑ひ、胡蝶となりし癡者も、笑ひを大方にとらん
事を恥づ。青樓の春の風に、ちゞのこがねの笑ひをかひ、廬山の雨の夜に、三つの笑ひの友を忍ぶな
ど、いづれか笑ひのたねならざる。わきて新玉の年たちかへる且には、山も笑めるが如しとかや。花
になく鳥追も、笑ひ上戸の杯をあけ、ちまたにうたふ萬歳も、舌鼓をなんうちそへける。や、春ふか
く笑みをふくむに至りては、柳はみどりの眉を開き、梅は白きはもとをあらはす。春の詠めのくさぐ
さの歌、ざれたること、たはれたるふりをのみ書い連ねたるしりに、舊年の暮のしまひのをかしき笑
ひの中に、つるぎたち博士も智をうしなへるが如く、武士の道もかけごひにはたられし、世のいと
みのたゞことまで、つゆ記して一卷とし、名づけて「新玉狂歌集」といふ。斯くおとがひを解きぬれ

ば、飛鳥川の淵はせ、らわらふとも、さゞれ石のいはほとなりてこけ倒る、ほど、うま人のうまき笑ひや、いづこのやい太郎冠者、あるにもたらぬ我等まで、この時に生まれあへるをよろこび、弓は袋に、笑ひ晝は櫃にをさまれる代に、腹鼓うち、のどけきあしたに御茶をわかして、わらはざらめや、樂しまざらめや。

狂歌千里同風序

改年の御慶千里同風、いつかたも同じ御事にいはひをさむる中にも、たはれ歌の道なかに、さごされ、さごされと呼びあつめたる飴寶引の、いと口きれぬざれごとども、みな櫻飴の色をふくみ、ことごとく分銅の玉をみがく。智慧の袋のよねは八斗の才藏をあざむき、言葉の泉の杯は、百千の鳥追をまねぶ。都となく鄙となく、巧みなるもつたなきも、手鞠の歌の數あけてかぞへがたく、針うちの紙のあたへ、これがためにたふとし。木でもかねでも俗耳の耳かきにあたり、鼓と吹きものと詩腸のはら合ひによろし。これなん長閑けき御代をうたひものせる、撃壤の歌の初音ならんと、鶯笛のひとくひとく、羽子の九十二みそじ餘り、若草のところまだらに書いつけぬれば、かへる鷹の跡が先なも侍らんかし。

龜樓狂歌會序

そも天地は、萬物の大芝居にして、光陰は百とせの居續け客なり。はつ日の鼠木戸、留場のとめてとゞまらず、狂歌の大大口、會所の會たゆることなし。けふなん壺屋の淡雲きえ、袖の梅の香をふくみ、春風のふく山三階のたかどのに満ち、言葉の總花内證のはり札にひらく。舌つゞみの太鼓について前へくとすゞみ、ざれ歌の諸君このところへ出でて遊ぶ。御老人様しづかに跡よりいたれば、御町中様ますく御機嫌よく、武士も長道具を忘れ、醫者の外乗物をもちるす、張子のお馬お駕籠でこす。名におふかり橋三曲りにまがる、すみだ川のむかうの人々、龜やに人々、こんなく、うき木の龜や優曇華の對面は今日が初日にして、むれつ、きの字の題詠は、年次月の紋日、二十日頃よりみせをひくまで、入りくるくく大入の會、くどうもく此の會に、おや馬鹿らしうおさざらめや。

歲旦年鑑序

たはれ歌は人の笑ふをのみ種とせしが、いつしか實のあるやうにぞなれりける。こゝに京町かほ茶の元成、ふかく此の道を嗜みて、すり鉢をかく鶯、ながしのしたの蛙まで、いづれか徒をいはざりける。されば遠慮もないしよの客、るろりの枝すみ折々にたえず。けふなん智慧も淺草の、市にたつたるおすがたの、をかしきふりのすき人等、籬のものと木網を、室咲きの梅の花棒として、手桶のたがのわれもくと、おみきの口々よみ出せるさま、誹諧にあらず詩にあらず、唐土の鳥と日本づゝ